

---

# 野良猫物語

斑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

野良猫物語

### 【Zコード】

N4384C

### 【作者名】

斑

### 【あらすじ】

猫のような耳としつぽのはえた獣人のガレは、カリスと出会い。ガレは警戒したが、カリスはニンゲンだけれどガレを獣人と知つても嫌な顔をしない。それどころか、ガレにしつぽを触らせて、触らせてとせつついで・・。  
完結済み

## ガレとカリスと、ソラの物語 1（前書き）

年齢制限無し、350枚、童話風。  
ちびっこさん歓迎、そのおかあちゃんも大歓迎よと、  
優しく丁寧、難しくない言葉使いを目指して書いてました。。。

## ガレとカリスと、ソラの物語 1

ドジなんて、踏んでいないはずなのにずつとだつた。

ガレは自分の後に付いてくる人影を気にして苛立つていた。

二人か三人だ。

裕福な街につきものの若くてガラの悪いちんぴらのような者たちで、たぶんただの物取りだと思った。小柄で一人でいる自分の持ち物を、隙を見つけて奪おうとしているだけ。

けれどその思うすぐそばから、不安はゆらゆらと沸き上がってガレを息苦しくすっぽりと覆い尽くしてしまったのだ。

苛々と唇を噛んでいた。

薄めのすつきりとした口元。少年らしい幼さと精悍さを両方合わせもつた顔立ちがフードの陰にちらちら、と覗いていた。

表情は拭いきれない不安にこわばって、それは少年にとつて恐怖と言えるほど強いものだと教えている。

ガレの足運びは、さきほどから早足から脇へ一步逸れてからは、全力に走り込んでいた。

建物と建物の間の太陽の明るい昼間でもほとんど日陰になる細い路地は湿つて薄汚れて、お世辞にも歩んで楽しいとは言えない道だった。建ち並ぶ店の裏口からいらなくなつて放り出されたきりに置かれているような木箱や空き瓶が転がっている。

風雨に晒されるままのそれは急ぐガレの足下に、意地悪をしているような具合に。

でも、軽やかに道を走つてゆく小柄な少年・ガレにとつて、こうしたどこの街でもあまり変わらない物たちの見慣れた光景は、かえつて安心感を感じさせるものだった。

薄暗い道。

けれどもそれはガレが普段、望んで踏み込むものだったから。

よくも悪くもそこには人が少ないのだから。

それはガレに気がついて追いかけてくる者が少ないということ。

ガレの窮地に気が付いて、逆に助けてくれる者が出現する可能性も減つてしまふわけだけど今まで生きてきた中で、ガレは出会ったニンゲンに優しくしてもらつたことはほとんどなかつた。なら、そんなものは、すっぱりと当てになんかしないのだ、というのがガレの最近の気持ちだつた。

走る。

走る。

全力で、現れた路地を最初は左に折れて、次はまた左。

交差した道を横切つて次は右へ飛び込んでいた。

走ることに慣れるガレでも身体が熱くなり、マントの背中には大きく跳ねた拍子にころつと汗の玉が気持ち悪く転がり落ちて締めた腰の部分に溜まつてゐる。

呼吸が上がつて苦しくなつてゐた。

もうそろそろ、いいかもしない。

追いかけてきていた者たちはやはりただの物取りで、勢いよく走り出したガレにあつさりと諦めたようではしもと氣配もとづくになくなつていたから。

もう大丈夫、だらう。

安心してもいいのだ、と繰り返して自分に言い聞かせながら、後ろばかりを気にしていたので、ガレは再び曲がつて飛び込んだ先にひつそりとあつた氣配をうまく感じ取れなかつたのだ。

ぶつかる寸前に気が付いて、うわっ、と驚いて止まつとしたが無理だつた。

どん、とガレは相手にぶつかつてしまつた。

それでもなんとか、顔と顔をぶつけてしまふのだけは避けて、肩。

「あつ」

という相手の声を、一緒になつてなだれ込んで地面に倒れる寸前、すぐ近くで聞いた気がした。

でも、それを聞いた上で。

自分がぶつかってしまったのは女の子だとガレは思った。

うわ、しまった・・・女は泣き虫だ、と後悔と軽い罪悪感を感じて・・・。

でも違つたのだ。

相手は同じ男で、背の高さも歳も同じぐらいの13、4歳ほどの少年でガレの憂鬱は少し晴れたのだけど――。

女みたいな奴だった。

癖のある黒髪が頃で一つに束ねられるほどに長く伸びてしまつているガレとは反対の白っぽい、金色の髪をしていた。

肩に届くぐらいのサラサラの髪だ。

少し広めの通りで建物の隙間から差し込んだ太陽の光を浴びてきらきらと輝いていた。

日焼けしていらない白い肌、灰青色の大きな瞳にそこだけ紅い優しい色の唇。

声では男か女か判断できなかつたのだけれど、顔を見ても女だと思つた相手は、ぶつかって痛いと泣きだすのだろうかと内心びくびくしたガレの想像とも反対で、明るい声をあげていた。

「驚いた！」

大きな瞳は丸く見開かれてガレを見つめていた。

女だとガレに思わせた相手は出会い頭に肩をぶつけ押されるよう後に後に尻餅を付いたのだが、突っ込んでいったガレはおでこだつたろう。

とつさに手を着こうとしたがそこに押し倒した相手の頭があつて、一瞬のためらいでしたたかにガレは自分の額を地面に打つてしまうことになつた。

田の前の星が跳んだよつな痛みを、呻きながら掌で撫でて散らせ

てこるなかでガレの気持ちを逆なでするような楽しそうな声。

「ねえ、ねえ。す、い、よ。す、ご、い、驚、き、だ、よ、一、き、み、す、い、い、一、一、」

「はあ？」

高い声に耳に近づけられて、ガレは涙の滲んだ琥珀色の瞳を向けていた。

「・・・なんだよ・・・」

なにがすごいのか、そう言われてもガレにはまったくわからなかつたのだから。

その響きには、褒めているかのような色があるから余計に不思議で無視できなかつたのだ。

知らない誰かにそんな声をかけられたことなどガレは今までなかつたのだから。

なんだか、くすぐつたい。

向けられているのは、何かに驚いてはこるようだけれど明るく温かい眼差し、感情だつた。

「・・・なんのこと、言ひてんだよ、言えよ・・・」

ぶつきらぼうになつた低い声に氣を悪くした様子もなく、陽気な声が笑顔でガレにそれを教えていた。

「耳！」

自分の金色の髪の頭に両手を運んで、真似するように五指を立ててみせる。

「黒い耳！す、い、い、！」

無邪気な声だったが言われて、はつと氣が付いたガレは、次の瞬間弾かれるようにその場から飛び退いていた。

距離を空けて、額をぶつけて涙目の不機嫌さは一瞬で威嚇するようになりものに変わつていた。

頬を緊張させていた。そして、めぐり上がつたガレの唇の下にための牙のように尖つた歯が覗いていた。

背を丸めて、ぎりと睨み付ける。

まるで、ほんとうに怒つた猫みたいと思わせたガレの様子だった

が、猫が苦手でないとみえる相手は、のほほんとした笑顔を崩さなかつた。

「はじめまして、”猫”さん。僕の名前はカリス。ねえ、猫さんの名前は？」

瞬きもせずに激しく睨め付けるだけの相手に、カリスもようやく気が付いたようだ。

「あれ。・・・機嫌が悪いの？・・・ぶつかつたから？・・・でもそれはきみが走ってきたからだし、・・・避けられなかつた僕もそりやあ、悪いだらうけど・・・」

じゃあ、謝るから。と神妙な顔になった。

「ごめんね、痛かつた？大丈夫・・・じゃないみたい、おでこ、赤くなっちゃつてるね・・・」

カリスが服に付いた砂をぱたぱたと払いながら立ち上がつていた。ガレは一步退いた。

そこはもう建物の壁で背中に硬く当たつていた。  
走り去ればいいのだとわかつていたけれど、驚きすぎて足は動かなくなつていて。

マントのフードがぶつかつた衝撃に脱げてしまつたのだ。  
被つていたものが背中に落ちてしまつて、見えないように隠して  
いたものがあらわになつた。

“僕はカリス”と名乗つた少年が見つめていたのは、二つの大きな耳だった。

ガレの黒い頭に生える猫のよつた黒い耳。

「・・・“猫”さん？」

一言もしゃべらない相手にカリスも不安になつてきて、小さく尋ねるような声になつた。

「・・・“猫”、“猫”呼ぶな。・・・“猫”じゃねえよ。俺の名前は、ガレ、だ」

「わかつた、ガレ。じゃあ、ガレって呼ぶよ。僕はカリスだよ！よろしくね！」

強ばつた表情のままのガレに、ふふっとカリスは笑っていた。

カリスはガレに手を伸ばしたら、ガレの手はさつとカリスの前から後ろに隠されてしまった。

「あ、握手、嫌いなの？ そう、わかつた」

一人頷いた後、カリスは再びガレを見つめた。

「ところで。急いでいたみたいだけどうかしたの？ 約束の用事とかあるなら急がないと・・・。旅行者みたいだね、この街、きっとみより僕は詳しいから案内してあげるよ」

また笑顔だつた。

さあ行こうよ、と促されてどこかに連れて行かれそうになるのでガレは慌てて答えていた。

「・・・別に約束なんかねえよ・・・」

「あ、そなんだ。よかつた、暇なんだね、じゃあ僕と話そうよー。」あまり自然に屈託なく言われたガレは断る言葉が浮かばなかつた。ただ呆然となつて、ガレはカリスの楽しげな表情を見つめて立ちつくしていたのだ。

「ガレ、どうかしたの？」

すると、不思議そうに首を傾げられてしまい、ガレは大きくゅつくりと息を吸いこんだ。

そして、ふううとゅっくり、全部を吐き出していた。

「なんでもねえよ」

普段の声が出せてガレは心中で安堵していた。  
もつとも声の最初は、少し震えてしまつたけれど。

「ねえ、ガレ。しつぽ」

その後の、カリスの第一声はそれだつた。

「しつぽもあるの？」

いいや、ととっさに言えなかつたガレに、肯定と判断したカリスが、うふふと嬉しそうに微笑んで、思いを率直に口にした。

「見たいな。見たいなあ、もし嫌じゃなかつたら見せて欲しいなあ。耳は黒いからしつぽも黒いのかな？黒いしつぽ、僕、見せて欲しいなあ」

ガレはむつつりと、さらに不機嫌になつていたけれどカリスは鈍感かのか、気にしないのだ。明るい口調でまくし立てるようにもう一度言つて、大きな目を期待に輝かせて、ガレの返事を持つている。見せてと言われたしつぽ。

あたりには他に人の気配のない静かな路地だつた。  
もう見られてしまつたので、慌ててフードを被り直すのも格好悪いと耳はそのままにしていた。

ガレの黒い髪の間からするつと生えた猫のような黒い三角形の耳は、遠くに聞こえる物音に反応してぴくぴくと動いている。  
そんなガレの耳を面白そうにちらちらと気にしながら、カリスの灰青色の瞳はガレの琥珀色の田の奥を、そこにガレの気持ちが隠れているとばかりに覗き込む。

「しつぽ、駄目？ 嫌？」

手を伸ばせば相手にさわれるぐらいの距離だつた。  
だけど一人とも、相手を乱暴に突き飛ばすこともしないで静かに向かい合つていた。

カリスに軽く首を傾げてねだるように聞かれてガレは考えていた。  
嫌なのかと訊かれてあらためて考えてみると、すると別に嫌ではないと思つてしまつた。

ガレのしつぽや耳は、嫌とか好きとかの話ではなく、見せてはいけないことのはずだつた。だけど失敗を犯してしまつたガレは、耳をすつかりと見られてしまつた。

その上で、さらにしてしつぽは嫌なのかと聞かれているのも変なものだつた。

ニンゲンに見られて、見つかつたら珍しい生き物と捕まえられることになるかもしれないというガレの耳としつぽだ。

ニンゲンではない生き物・“獣人”の証であり、特徴だつた。

しばらくガレが一緒に行動していた仲間たちは、それがニンゲンにバレて追われて逃げているうちに離ればなれになってしまい、今、ガレは一人になっていた。

獣人だと気が付けば追いかけてくるニンゲンのなかでも、特に危険なのはハンターという職種の者たちだつた。

彼らは仕事として、ガレのようなニンゲン以外の種族を追う。追つて捕まえて、売るのだ。

珍しい生き物は見せ物小屋の“看板”になつたり、もつと裕福なニンゲンは個人で大金を払つて所有し、家畜や愛玩動物のようにされるのだとガレは聞かされて育つてきた。

うまく逃げているから、ガレは今までそんな風に捕まつて売られたことはなく知識に過ぎなかつたけれど、武器を持った人相の悪い男達の集団に追いかけられて必死に森を走つたことは何度も経験があつたのだ。

ニンゲンと、ガレのような獣人は世界の創造の神話ではともに生まれた兄弟であり、仲の良い友であるのに、現実には全く違つていた。

歴史のなか仲が良く隣人として暮らしたという時期はあつたけれど、長くは続かずその一時期以外は追うものと追われるもの、そして決まつて追われるのは獣人の方だつた。

ニンゲンのような外見のうえに獣のようないい、耳やしつぽがあるといふ獣人は、“猫”型、“犬”型、“蜥蜴”型と数種存在していたけれどどの種族もただのニンゲンよりも腕力が優れていたり丈夫な身体をしていて、とつくみあいの喧嘩をしたなら決して負けないはずだつた。けれど、そうとはならないのだ。獣人は負けてしまう。追われるのだ。圧倒的に数で負けてしまうから。

世界の主人公とでもいうように、増えて大きなグループを作り、街や国を築いたニンゲンのなかで獣人の数はあまりに少ないためだつた。

今や獣人は、数もなく珍しい貴重な生き物になりつつある。

猫や犬よりも、頭脳が発達している。会話もできる。

数が少ない、このままではしばらくの間でいなくなってしまうからと、心配するニンゲンもいるけれど、彼らも獣人を見つけると保護という名目で捉えようとするなら一緒にだつた。

ガレは追われるのだ。

追われるからニンゲンを恐れて、捕まつたりしないように警戒しながら強く生きてゆくしかないのだろう。

まずは、ニンゲンの振りをして。

耳やしつぽを見られないように、見られたらおしまいだから。解決策としては、あとはもう噛みついでモニンゲンを振り切つて逃げるしかない——と思つていたところだつたのに。

ガレはちらりとカリスを盗み見た。

カリスの態度はいろいろと想像していたものとも、経験してきた今までともどちらとも違つのだ。

襲いかからない。

嫌なにやにや笑いもないし、うわっと嫌そうな悲鳴もあげなかつた。

興味を持つてガレに触ろうと手を伸ばしてきていたけれど、それは握手をしようとしたと説明していた。ガレが拒否したあとは立っているだけで再び手を伸ばすことはない。ガレを捕まえようとも、また違う生き物で危ないと追い立てるこどもしないのだ。

ただ、信じられないような明るい笑顔で「ねえ、ガレ。しつぽ、しつぽ。見せて？」と繰り返している。

だから、ガレは少し困つてしまふのだ。

カリス。

とても変な奴だとガレは思つた。

カリスはきれいな格好をしていた。

ニンゲンのなかでは裕福な貴族というランクなのだとガレははしゃぐカリスを冷静に眺めて判断していた。

光沢のある青色の上着に、艶やかなブーツ。

胸のところには水色の大きなブローチが留めてあって目立つていた。

大きな石のブローチはとても高価そつだと宝石に知識のないガレでも感じるものだった。

だから、もしかして。

こいつはもしかして馬鹿かもしないと思い当たったのだ。

獣人じやなくて、同じニンゲンであつても、外で子供が良いものをひけらかしているのは危険なことだろうに、そんな簡単なことも気が付かないのかお金持ちそうな格好で一人街を歩き回っている様子のカリス。

女みたいな可愛さの綺麗な優しい顔で、裕福で恵まれた育ちだけど中味はどうやら馬鹿なのだ。

なら、と考えたガレは、それほどカリスを警戒しなくともいいのかもしれないというものに行き着いたのだ。

そう、こいつはきっと馬鹿なのだ。

だったら真剣になつてそんな奴から逃げ回っているのも、馬鹿みたいではないだろうか！

「しつぽ、しつぽ！」

ガレが答えないと、しつぽが見たいといつカリスの訴えは飽きることなく続いている。

「・・・ああ、別にいいけどさ・・・」

ガレは渋々に言うと、弾けるようにカリスだつた。

「やつたあ、ありがとう！」

よくわからないけれど、お礼を言われてガレは少し威張るようないい気分になつて鼻の頭を指で擦つていた。

「しつぽ、しつぽ！・・・そうだ、マント持とうか？」  
すかさず入つた申し出だつたが、ガレは頷かなかつた。

「・・・別にマント脱がなくたつて見えるじゃん」

「・・・そうだけど・・・マントない方がよく見えるかなあとと思つてさ・・・」

ガレに却下されて少しがつかりとしたようだつたが、カリスはめげなかつた。すぐに立ち直つて笑顔になつた。

もつと持ち上げてよ、暗くて見えないよ、と細かく注文されてガレはむつとなりつつマントを胸のあたりまでたくし上げていた。

深い縁で、だけど少し草臥れた感じになつてているフード付きの外套、マントを請われて捲つてあらわれたガレの衣服は上も下も動きやすい簡素なデザインの黒だつた。その腰のあたりを別の深い光沢の良い黒が紐ベルトのように巻かれてある。

まるでベルトそのものに見えたが、カリスはちゃんとそれがわかつっていた。

艶のいい紐の丸い先つぽがときどき生き物のように動いている。その通り。それは生き物で、ガレの身体の一部のしつぽなのだ。

「へえ。そういうふうに普段は胴にくるつて巻いてるの？」

「・・・下に降ろしていたら先つぽとか、見られるかも知れないじやん」

膝あたりぐらいの丈のマントの下からしつぽが見えてしまつたら危険だと不機嫌に説明したガレに、そうか、とすぐカリスは屈託なく納得した。

「触つてもいい？」

「・・・はあ？」

ガレは隠すようにマントを持っていた指を開いて幕が下ろされ、遠慮のない要求にガレの声は素直にしごぶる尖つていたが、カリスはもつと素直になつて尋ねていた。

「あ、やつぱり、嫌？引つぱつたりしないよ、そつと触るだけだよ。ただ黒い毛皮がね、つやつやでとても気持ちよそうそうだなあと思つたから。・・・耳でもいいけど、耳だともつと嫌かなつと思つて」そこまで言つたあと

「・・・でもやつぱり、こりこりの駄菓子だよねえ・・・」  
ずっと陽気だったカリスは雰囲気を変えて、急に沈んだ聲音になつていた。

「・・・僕になんか触られるの、きみも嫌だよねえ・・・」

「はあ?なんだよそれ。そんなこと誰も言つてねえじゃん。つてい  
うかおまえにという前に、嫌だよ、そんなん、触られるの。おまえ  
だって、知らない奴に身体触られるの嫌だろが!」

「・・・うん。・・・たしかに、そうかもしけないけど・・・」

剥きになつて声を荒げたガレに言われてカリスも何かを感じ入つ  
たようだつた。

けれどそれで大人しく納得するかと思いきや、カリスはそうはな  
らなかつた。しばらく考えた末にさらにこう口を開いたのだ。

「友達だつたら平氣だよ。触つてもいいよ、僕なら  
ねえ、とガレに訊いていた。

「きみは?」

再び雲の切れ間から差し込んだ太陽の光のよつてにわかに明るい  
表情になつたカリスに、ガレはたじたじとなつていて。

古くて薄汚れた路地の木箱は慣れていても、こんな風にこじりこり  
と風に吹かれる木の葉のように表情を変えるものにあまり関わつた  
ことはなかつたのだ。しかも相手は危険なニンゲンだというのに。  
きみは、どうなのと、人懐つこい笑顔で聞かれてガレには、なん  
だかよくわからなくなつていた。

いや、少し想像したけれど勝手な思いつきを信じることはしては  
ならないことだつた。あとでがつかりして動けなくなつてしまつこ  
とになると駄目だから、自分にはわからないことだと決めたのに。  
親切なカリスは丁寧に言葉を足してガレに聞き直した。

「きみも友達だつたら平氣だよね?」

疑問ではなく確認で、ガレの返事は困つた末に怒つたよつた声に  
なつて

「・・・おまえ、友達でもなんでもないじゃん!」

「そうだよねえ、さつき会つたばかりだものねえ・・・  
しんみりと言つたあとで、うふふっと笑つたのだ。

「じゃあ、もつと時間が経つて友達になつたらしつぽ触らせてくれ!」

絶対、こいつは馬鹿だとガレは思った。

友達になどなれると思っているのだろうか？

と、訊いてやつたのだ。ガレは腹が立つたから。そうしたら「どうして、なれないの？・・・きみは僕のことがやっぱり、嫌いなの・・・？」

酷く悲しげになつて言った。

「そ、そんなことじやなくてっ」

嫌いとかではないはずだつた。

しつぽが自分には生えていて、おまえには生えていながらというもつと重要なことが問題なのに、ガレが出会つたカリスは馬鹿だから手に負えなかつた。

苦手だと思つた。

わけがわからぬ。どうやって考えていたらいいのかわからぬのだ。

答えられずにはいるとカリスはとても強い声音でガレに聞いたのだ。

「好き？嫌い、どうち？」

「・・・別に、嫌いじやない・・・」

考える余裕はなく圧されるようにガレは口に出していた。

大きな瞳にひたつと見据えられてかなり切実に聞かれている気がしたから。

痛いほどの真剣な表情になつたカリスの目は、突然別人に入れ替わつたように強くて、だけどとも寂しい色にガレには見えてしまつたから。

嫌いだ、と言い切る理由だつてまだ出会つたばかりでありはしないのだから。

するとカリスは。

やはりそうなつた。ふと過ぎつた嫌なガレの想像通り。

「良かつたあ！じゃ、そのうち友達になつたら約束ね、しつぽ触らせてね！」

黒いつやつやしつぽ、約束、約束！…と歌うよろに続いて、ガレ

を無頓着な笑顔で追いつめるのだ。

「・・・そのうちな・・・友達になつたらなつ」

歳は同じぐらいだけど、女の子みたいな顔をして自分よりも背が低い相手なのに情けなく負けてしまつているような気になつて腹立たしいガレの声は、とてもぶつきりぱりぱりだつた。

ガレは歩き出していた。

急いで向かわなくてはいけない約束はなかつたけれど、じつをしていると居たたまれない氣分になつてくるからだ。

落ち着かない。

向けられる期待に溢れる明るく大きなカリスの瞳。

話題が見つからなくて少し黙つているけれど、一番彼の言いたいことはガレにはもうわかっているのだ。『しつぽ、触らしてね』だ。友達になつたらと約束して、約束をちゃんと守るつもりなのだろう。

カリスは無理矢理触ろうとも、触らせてよとももう言わなかつた。だけど、立ち去らない。

ガレの後を追つて付いてくる。

とことことしばらく歩いて、角がやつてきた。

曲がつたガレは、走り出していた。

さつきとは違つてそれほど嫌な気持ちにはなつていなかつたけれどカリスが気になつて、普段ではいられない、巻いてしまおうと思つたのだ。

だれど相手はやはり、さつきとは違つていた。街のじろつきではなく、カリスという裕福そうなきれいな格好をした女の子みたいな顔立ちの奴であり、結果だつてさつきと同じじとは簡単にはいかなかつたのだ。

しばらく走り回つたけど、上手くカリスを置き去りにできなかつた。立ち止まって大きく肩で息を吐くガレの少し後ろで、こちらは

もつと苦しそうにせいぜいと呼吸して、カリスはしゃべることもままならないという様子だった。

今、もう一度走つたら。

ちらと考えたけれど、とても意地悪な気がしてガレはやめたのだ。自分よりも小さいカリスがこれだけ走つて付いてきたことに驚いていたし、ただの変な奴だけではないのだと知った。根性があると評価してもいい。

ガレは少しカリスを見直していた。

「・・・おまえ、変な奴だな」

「・・・そう、かな・・・。僕にとつては、ガレの方が変だよ、なんでこんなに走るのか・・・もう、疲れたよ・・・」

はあ、はあと荒い呼吸の間に、呆れたような文句混じりの言葉が紡がれた。そうしているうちに次第に呼吸も整つていったカリスは、最後には前屈みになつていた身体をピンと伸ばして、にこりと汗ばんで髪を額の縁にへばりつかせている顔を綻ばせた。

「走るのが好きなガレでも、これだけ走ればもう十分だよね。じゃあ今度はゆっくり歩こう!」

「・・・少しだけ、な。いいよ、おまえに付き合つてやる」

深緑色のフードを目深に被つて、しつぽはきちつと腰に巻いているのだろう。昼の光のなかで少々暑苦しい旅人の格好のガレの横を軽装の、青色の品の良い上着の一見で街を行き交う人々のなかでも上流の部類の人間だと知れるカリスは、相手に意地になつて走るのも疲れたのでゆつたりと歩いていた。

少し進むうちに細い道は大きな通りにぶつかつてなくなつてしまつた。

仕方なく多くの二ングエンや馬車が行き交う通りを歩んでいた。

二ングエンがいっぱいの場所は嫌いだったが、一緒に一人ガレと歩いているからなのだろうか。不思議なことにこのときはあまり怖いとは思わくなっていた。

カリスを。

ガレはちらりと横目で見ていた。

カリスは前を見ていたが、視線に気が付いたようにガレを見て、にこりとまた笑う。

「なに？」

「別に……」

「あ、走りすぎて疲れたの？ならどっかで休んでもいいよ」「ち、違うよ！」

それはおまえの方だろう、と氣色ばんに言つと、カリスはけろりとして、僕は平氣だよ、と言つ。  
「だけど、ガレが疲れたのなら一緒に休憩するよ。我慢しなくていいよ、言つてよ」

本氣でガレを心配しているのか、やせ我慢なのか。でもとにかく自分より小さい女の子のような、しかも身体の作りが弱いニンゲンに案じられているなどガレは、やつぱり落ち着かなかつた。

走ることよりも、こうしてカリスと一緒にいることが調子を狂わされてしまい遙かに疲れるとガレは思つた。  
だから、それがふううと大きな溜息になつたのだ。

「おまえってさ、何、考えてんのよ」

黙々と並んで歩いていることに慣れ、また飽きてきたガレはしばらくしてカリスに低く尋ねていた。

「どういうこと？」

カリスはガレの言葉に不思議そうな顔をした。

「だから、言いたい」と

「しつぽ触りたい！」

「・・・それじゃない、それはもう聞いたよ。友達になつたらつて決めたじゃん」

ガレの意見はなく、ただカリスが勝手にだつたがそう決まった。

「じゃあ、なに？」

カリスが、わからないと歩きながらガレを見て首を傾げた。

「だから・・・俺も見て耳としつぽが違つていて気持ち悪いとか、俺の方が力あるし、爪も尖つているだろ、怖いとか、思わねえのか？」

ちらりとカリスはガレの手元を見ていた。

ガレはカリスのために少しマントの間から指先を覗かせていました。耳としつぽほどではないけれど違のある、猫のように爪が出たり引っ込んだりする“猫”型の獣人のガレの手だった。

「爪は格好いいけど、掌とか腕とか普通なんだね。しつぽや耳のよう毛皮になつてない。面白いね。お腹とかは？」

ふさふさしているの、と聞かれたら答えは、違う、だつたけれど、それはもうすでにガレが持つて行こうとしている方向とは話はすでに逸れていつてしまつていて。

しかし、答えないでいると余計に変な方向に、たとえば、脱いで見せてよなどと言い出されそうなのでガレはしぶしぶ答えることにした。

「お腹も背中もおまえと一緒にだよ。毛は生えていないよ。耳としつぽだけだ。・・・なんでとか聞くなよ、俺だつてそんなこと知らないんだ！」

「ふうん、そうなんだ」

新しい知識を仕入れることを喜びにする勤勉な学生のように頷いたカリスだつたけれど、そういうつしているなかで最初の大きな感動を思い出してしまつたようだ。

「ねえねえ！やつぱりさ。すごいよね」

カリスの声はまた楽しげに弾みだしてゆく。

「僕、本当にね、きみみたいに歳の近い“猫”さんに会うのはじめてだつたんだよね！」

華やいだカリスの声に、慣れないガレはつるむをつに顔を顰めている。

「ああ、ねえ。きみの兄弟とか、お父さんとかお母さんとかみんな

黒いしつぽ生えてるの？・・・すごなあ、みんなでしつぽーー」「

確信で、はつきりとカリスは変な奴なのだ。

ガレにはいまいち理解できない妙な感嘆がいつまでずっと続きそ  
うで嫌になつてガレはカリスを遮るように口を開いていた。

「何がすごいのか。・・・俺にはまつたくわからんけどね」

わざと冷たい声を出していた。

すごいと言われて悪い気分はしなかつたけれど、何度も言われて  
いるとひねくれている性格のガレはへそが曲がるのだ。

「ああ、そうだよ、おまえの言つようになに家族、みんなしつぽ生えて  
いたよ」

ありつたけの毒を言葉に塗り込める。

「だけどしつぽ生えていなくて俺たちのことすごいとか思つおまえ  
らみたいな奴にとつ捕まつて、どつか連れて行かれちまつたよ」  
このあたりからガレのハツ当たりだつた。

忘れられない悲しい出来事、カリスが悪いわけではなかつたけれ  
ど腹が立つてきて心に湧き起こつた黒いモヤモヤを田の前の子供で  
弱そうなカリスにぶつけたのだ。

「今頃、すごいしつぽとか、言われながら首輪付けられたり家畜扱  
いされてんだろうな」

突き放すようにガレは冷たい笑みをフードの陰からカリスに送つ  
た。

すると、カリスはぴたつと立ち止まつていた。

「・・・ひどいよ・・・そんなこと、言つなんて・・・」

数歩進んで振り返つたガレの琥珀の目の前で、灰青の瞳がさらに  
大きく見開かれて、次いで悲しげに揺れた。

「・・・僕はさ、そんなこと、ちつともしたいと思わないよ・・・」

「お・・・い、なんだよ・・・」

ガレはびっくりしていた。

「事実言つただけじゃん。・・・泣、くなよつ、おまえ男だろー。」  
事実だった。

今まで、ガレにはこんな風に失敗して正体がばれてしまったあとはきまつて、必死になつて逃げなくてはならなかつたのだから。

「・・・おいつて。おまえがそんなふうに泣いたらさ、俺がなんか、おまえのこと、俺の方がおまえ、苛めてるみたいじゃんかよ！」

「事実じゃないもの。そんな風に僕はしないよっ！」

大きな目に涙を滲ませて女の子のように泣き出してしまつたカリスに、ガレはひどく焦つて慌てなくてはならなかつた。

「・・・じゃあ、言い直すよ！おまえは例外・・・かもしぬなくて、おまえ以外の奴は、そういうことをするつ！」

「・・・うん。僕は例外だよ。それだったら、いい・・・」

カリスはガレの言葉を聞いて満足そうに鼻をすすり上げながら頷いた。

良かつたと思つたが、その次の瞬間、ガレは自分が完璧カリスのペースに巻き込まれてしまつていてのだと気が付いて、うつうと呻きたい気分だつた。

ガレの方も泣きたくなつたぐらいだつた。

けれど、こういう相手に動搖させられることは、動搖でもいろいろなものがあり、これは力一杯、物を蹴りつけたくなるような嫌なものではないと感じていた。

少し、面白いと思つたのだ。

カリスと一緒にいて、こういうのを楽しいというのだろうか。

湧きあがつた一筋の甘さをガレはそつと噛みしめていた。

笑顔で、優しげな奴だと思つていたけど、感情の起伏が激しい。そしてつかみ所もなくて、まるでカリスこそが猫みたいだとガレは思つていた。

ニンゲンだけど、猫。

きれいな毛並みで大人しげに見えて、機嫌が悪いと爪を向いて

バリツと赤い筋を刻んでくれる小さくても獸、猫だ。街の路地でも、家々の屋根ではリボン付きを見かける。街で暮らす生き物だった。

もつと大きな一本足で歩く黒い“猫”のガレはといつともう街での用事は済ませていた。

「食べ物を買いに市場にきたの？」

「違う。食べ物なら少し前に、捕まえたマダラ鳥で燻製、作つてある。パンも前の町で買ったものが残つてゐるし。……情報だよ」

「情報、なにの？」

興味津々と耳を傾けるカリスをちらりと見ながら、ガレは続けていた。

「・・・仲間の。この街に立ち寄つてゐる奴、いるかなあとthoughtte・・・」

「こんな内容を二ングエンのカリスに話してしまつていいのだろうか」という不安があつて、悩み悩みだつた。

「へえ、“猫”さんが集まつてくる“猫”さん基地があるんだね！」

「そんなようなもん・・・」

「それつてどー?」

「はあ。なんでそんな秘密、おまえにしゃべらないといけないわけ」「まあ、そうだけど。でもそこに行つたら、“猫”さんにいっぽい会えるんだなあと思つたから・・・」

叱られて静かになつたカリスに、今度はガレは質問の番だつた。「おまえ、そういうの好きなはわかつたけどさ、変な奴だな。なんでそんなん好きなんだよ、仲間でもないのに」

少し怪しこんだのだ。

だけど、獣人の血の独特的の匂いは薄まつてゐるものでも大抵気が付くものだが、カリスには少しも臭わなかつた。

ならカリスは、混じりけのない二ングエンなわけで、同族意識的な感情があるとは考えられない。

すると、やはりただの興味だらうか。

小鳥を見ると胸の奥が震えて切なくなり放つておけずに近づかず

にいられないガレのような気持ちかと思つてみると、水を差された  
ように楽しい気分が薄らいでいた。

カリスはお金持ちの生れだつた。

なら、ハンターに売られる獣人をぽんと大金を払つて購入するあ  
たりの人種なのだ。

そういう目でガレを見ていて、自分も欲しいとでも考えているの  
だろうかという疑問が浮かんだ。

どんどん憂鬱になつていくガレの横でカリスも、しばらく黙つて  
歩いていたけれど、少し明るさが陰つた真面目な響きのする声だつ  
た。

「・・・仲間になれないかなあ・・・。僕はしつぽ生えていないか  
ら、無理かなあ・・・」

「なんだよ、それ」

驚きすぎてガレは呆れてしまつ。

「おまえ、ニンゲンなのに獣人の仲間になりたいわけ？馬鹿じやね  
えの」

ガレの方に目を戻して不思議そうに首を傾げられた。

「ニンゲンの方が生きやすいじやん。なんでわざわざ、獣人の仲間  
になりたいなんて思うんだか！」

「駄目だから」

低い声で薄く笑いながらカリスは、はつきりと答えた。

「僕は駄目だから。嫌われてるから」

「・・・誰に、だよ・・・」

予想も付かない展開にただ、ガレは尋ねるだけだつた。  
するとカリスは紅い唇を尖らせて

「みんなに！」

「みんなって・・・」

「僕の家族」

漠然としたものから、一気にわかりやすい単位に絞られてガレは  
息を呑んだ。

「・・・家族に嫌われるつて・・・それ、おまえがなんか悪戯したんだる」

「こんな話つまらないね、やめよ！」

「つまらないから、おわり！」

カリスはぱつと明るく宣言すると、その通りに話は終えられてしまったのだ。

ガレは気になつてもつと詳しく述べたが、もう終わりの一辺倒にあしらわれてしまい、為す術がなかつた。

「それより、しつぽの話をしようよ！」

「しつぽの話なんて俺はもつとつまらない」

というガレの言い分はすっぱりと無視されて、話題はまたガレのしつぽになつてしまつた。

「ねえ。しつぽ触らしてくれるつて約束だけね。友達つてどのくらいの時間が経つたらなれるのだとと思う？」

「はあ。友達つて時間でなるもんかよ」

「違うけど。でも田安はあつたほつがわかりやすいよ」

ガレにとつて、カリスは滅茶苦茶な性格をしていくと思つていたが、間違つてはいなかとも感じるのだ。

時間ではないけど、目に見えない友達といつものになつたかならないか、判断ができるような気がするからやはり、時間という田安はあつてもいい。

「一日話をしていたら？じゃ、二日？もつとで一月ぐらいしたら友達？」

友達といつのも、実はガレにはよくわからないものだつたが、カリスの言つている友達とはわかりやすいだつ。なぜなら、友達になつたらしつぽを触らせる、ということであり、しつぽを触らせてもいいとこうガレの気持ちの頃合いが友達になつたことになるのだから。

つまりカリスは、いつになつたらしつぽを触らせてくれるのかと聞いているのだ。

カリスが言った一ヶ月なんていうのは気が遠くなるような時間だった。あり得なくて想像が付かないだろう。

一日だと、もうしばらくして夕方になるとには、触らせり触らせろとせつつかれそうだと思った。

だから。

「三日」

これも十分現実味のない時間のはずだった。  
三日も自分がこのカリスと一緒にいるなどとは変な夢を見ている  
ようなものだからだ。だからとても適当だった。

「三日ぐらいいじやないか?」

「そう。三日か。わかつた」

神妙に頷いたカリスにガレは、少し不思議なものを感じたが深く  
は考えなかつた。

またカリスもその内容について深く考えているなどとはまったく  
思わなかつたから。

だけど、夕方。

ガレは知ることになる。

三日と言つたガレの言葉で、カリスは思い切つてしまつたのかも  
しれない。

自分の言葉のせいじやないかと後悔することになるのだから。

賑やかな市の通りの脇に並んだ屋台を覗いて歩いていた。

いろいろな物が「こちやんちやん」と一緒にになつて売られている。  
異国の物、珍しい食べ物をはじめ、変な汚い壺の破片のようなガ  
レには価値がわからないもの、物でも生きている小動物が入つてい  
るのだろう籠もいくつも並んでがさがさ音を立てていた。

特に変で珍しい物として、ときどき獣人なども鎖で繋がれて目玉  
商品として並ぶこともあるので一口に面白い場所とは言い切れない  
けれど、ガレはこうした市場が好きだった。

ガレが罠を仕掛けたり矢を使つたりして得た肉の食べきれない余分を買い取ってくれ、尾羽や角や、薬草もお金にしてくれるのはくだけた空気のこういう場所だった。

街中で大きなお店を構える商売人では、いろいろと勿体ぶつた言い方をし、なかにはガレの素性も探るような質問をしてくる。なかなかすんなり買つてくれないことが多いのだ。

フードが目深に被つているガレとカリスが一人、人混みに流されないようにお互いを気にしながら屋台や露店の品物を見て回つていたときだった。

地面に広げられた布の上に並べてある、緑色や赤色や、青色が混じっている石は宝石の原石だと知れたが、よく似た石なら今までに見つけたことがあるなあ、などと考えていたガレの袖がぎゅっと引っぱられた。

ニンゲンのカリスが今日は一緒にいるから、自分もニンゲンになつているような安心した気分になつっていたガレがはつと緊張したが、他でもない。それはカリスの手だった。

「なんだよ

「逃げよう」

「はあ？」

カリスの表情は強ばっていた。笑顔が消え硬い顔つきになつて小声でガレに訴えていた。

「逃げなくちゃいけない、捕まっちゃうから」

「なんで」

耳もしつぽも隠しているのにと息を呑んだガレに、カリスは首を横に振つていた。

「違うよ、僕が

誰に、と聞く暇はガレには与えられなかつた。

カリスにかしつと手首を掴まれてぐいと引っ張られていた。

そのままカリスは走り出してしまう。

ガレも引きずられるように一緒に走らなくてはならなかつた。

「なんで、誰にだよつ」

「ほら、の人たち」

そつと視線が送られた方向を走りながら振り返つて見たガレには、人の波の間、まわりとは衣服の雰囲気が違う者が見え隠れした。

暗い色の服の男は確かに追いかけてきていると思った。

腰に細い剣を下げているような男だ。

着ているものは地味で、カリスほど地味で高級そうでなかつたけれどデザインも雰囲気も共通して同じ世界に暮らしている者だと思つた。

カリスが言うとおり、カリスを追いかけてくるようだつた。

カリスが言つたように、『嫌われている』から?

「おまえ、なんか悪いことしたのか?」

ガレに聞かれたカリスに一瞬の間が空いた。

「僕は、していないよ。何もしていない、してないけどさつと僕は丸ごと悪いんだ!」

叩きつけるような強い響きで、驚いたガレは

「そんなこと?」

「ないだろ」と言おうとしたのだが、遮られてしまった。

「だつたら、ガレも悪いことしたのつ?」

怒つたような目がガレに向けられて、ずっと追われてきたガレは悪いことをしてそのせいで追いかけられているのかと切り替えされたガレは答えられなかつた。

答えない代わりに、引っばられていた腕を一端放して、改めて握り直していた。

二人ともが走りやすいようにだ。

ガレの方がカリスより背が高かつた。

走ることだつて、爪先の狭いブーツを履いているようなカリスより慣れて得意だつた。

ガレは走り出していた。本気だ。

逃げるために、自分より走る速度が遅いカリスを引っぱつて敵か

ら逃げ切るために。

二人して逃げ延びるためだ！

走つて走つて、走つてばかりだと思った。

人の間をすり抜け、太い道から細い道、目立たない道も選んで飛び込んで、行きとまつてしまつたので塀を乗り越えた。

身軽なガレが塀の上にまず飛び乗つて、カリスを引きずり上げるのだ。

昼にも走つていたけど、夕方の今度は一人だつた。

出会つたカリスと二人。

太陽が西に傾きかけて空が茜色に染まりはじめたころ、ようやく二人は立ち止まつていた。

汗ばんだ身体を夕方の涼しい風が冷やして行く。

太陽が沈んで、夜がやつてくる。

一日が終わる時間だつた。

そして、二人の逃亡劇も終わろうとしていた。

街のはずれに出でしまつっていた。

大きな石造りの古びた門を潜つてしまえば、街の外だつた。

ガレにとつて街や国の門は幾度と無く潜つて出て行く通過点に過ぎなかつたが、カリスにはそうとは言えないことをわかつていた。一緒に逃げてきたけれど、そのまま一緒に潜り出でしまうことはできないだろう。

空が寂しい夕暮れを迎える世界を精一杯華やかな色に包もうとしていた。

明日もいい天気になるな。

ガレは金色のなかに飛んで行く一羽の黒い鳥の影をぼんやりと目にしながら思つた。

「家、どこだよ。家の前まで送つていつてやる」

「ガレ？」

「おまえの家。だいぶん来ちゃつたから、一人で帰るの危ないだろ  
つ、だから 送り届けてやるつて言つてんの！」

喧嘩をしているような声になつてしまい、ガレは腹立たしげに自  
分に向かつて舌打ちをしていた。

なぜ、こんなに苛立つているのか。

カリスとこれでお別れだとなつて、寂しいなじといつ感傷に囚わ  
れているせいだと気づいてしまうと、余計にいろいろな気持ちが  
湧き起こつてさらに気分が悪くなつてくる。

そういうガレの気持ちなど、カリスは一切悟ることはないらしい。  
ただ不思議そうな顔をして自分を見つめてくるのだから。  
やつぱり、鈍くて馬鹿なのだ。だから、さつさと別れてしまつ  
た方がいいのだ！

乱暴に結論付けたガレが、カリスをカリスの家の前まで運んでい  
つてさつさと終わりにしようと離していった手を再び掴もうとした。  
しかし、カリスはさせなかつた。

寸前に、びょこんと飛びはねるよつて動いてそのまま駆けだして  
しまう。

ガレが思つていた方向と逆だった。

カリスの家があるだろう街の中央ではなく、門へ。街の外に向か  
つて。

ガレがまた一人になつて潜るはずだつた外へと続く門。

「・・・おいつ、おまえ・・・」

「せつかく走つたのに、なにしてるの、ぐずぐずしてこると追いつ  
かれちゃうよ？」

「でも、おまえ・・・家」

「捕まつたら、家に連れ戻されちゃう。やつと逃げ出してきたのに」

「おまえ・・・家出なのか・・・？」

カリスの淡々とした態度に、ガレの方は呆然としていた。

「なんかやらかして、親に怒られて家出。・・・って、そりゅうや  
つなのかよつ！」

みんなに嫌われているなど大げさなことを言つていたがこうこう単純なこと、真剣になつて損したとガレは思ったのだ。

でも、すぐにあっさりと否定がされた。

「違うよ。怒られていない。怒らないよ、あの入達、誰も僕のこと怒らないんだ。ずっと嘘をついて僕のことをだましてきたのを知った僕は怒つて、父上の書斎の人形を床に叩きつけて壊してしまったけれど、怒らなかつた。もつといろいろ壊そとしたら、自分の部屋に連れて行かれて鍵を掛けられたけど」

「・・・なんだよ、それ」

「毎日、いろいろな人が入れ替わりに僕のところにやつていて、つまらないことをしゃべつてくるから、僕は窓からこっそり逃げてきたの」

そして。

「もう僕、あそこには戻らない」

カリスはつんと鼻をあげて、可愛らしい顔に意地を漲らせていた。

「はあ！？」

ガレの口癖の言葉だったが、これが今日一日のなかで一番大きな声になつた。

ガレの驚きもまだ冷めないながだ。

「僕もいつしょに行つていい？」

笑顔のカリスが言つ。

「ガレに付いていつてもいい？ ガレは好きなところに行けばいい。僕は特にどこかに行きたいつてことないから。ガレにくつづいて行く

何気ない明日の遊びの予定話のように軽い口調でカリスはガレに頼み込んでいたが、ガレはことに重大性を感じていてすぐには返事ができなかつた。

「・・・駄目？」

「駄目っていうか、そんなのおかしいよ・・・」

「おかしくないよ」

「おかしい。黙つて、おまえ、家を出てもう家族に会わないのであるからよ」

「・・・ほんとは向こうも、僕に会いたくないんだよ。だけど、いらないくなつても捨てるわけにいかないでしょ?」

聞き分けの悪いガレを、年長者が諭すように小首が傾げながら。「本や服は捨ててもいいけど、子供は駄目だからあの人には僕を置いておくだけなの。捨てたら罪になるもの」

同じように邪魔になつても生き物だから同じにしてはならないのだから。

「両方が嫌なのに、仕方なくて一緒にいるつてそっちのほうがおかしいでしょ。だから、僕が自分で家を出たの。でもね」

それまでとても冷静だったのに、少し寂しそうな顔になつていて。「ガレが、やつぱり僕は嫌だと言うなら無理にお願いとは言わないから大丈夫。そうしたら僕は、ガレみたいに一人旅するだけだから。だつてもともと最初はそのつもりだつたんだもの」

「本気なのか?」

「変なの。本氣で走つて逃げていたじゃない」

大きな門を背に立つていたカリスが、ふふっと笑つた後、ガレをその場に残したままくるりと踵を返してしまつ。

夜の気配が深まつてきて、街の出入口の人数はまばらになつていた。

不穏な侵入者から街を守るという役割の制服の男が門の飾りのよう立つてゐる。一人の子供にちらりと目を向けたがそれだけだった。

カリスは。

堅牢な石造りに四角く切り取られ空間のなかに踏みだして行つた。

「待てよっ」

ガレは慌てて後ろ姿を追いかけていた。

「待つたら！」

追いついて、どんどん走つていこうとする相手の腕を捕まえていた。

不思議そうにカリスはガレを振り向いていた。  
もうそこは外だった。

地平に広がる草原、その間に古い石畳が続く道。

反対側の遠くの林の果てから、野犬の鳴く声が聞こえていた。

「暗くなるんだぞ！」

わかつてているのかと、ガレは怒鳴りつけていた。

「街の外は真っ暗で、星の明かりしかなくなるんだぞ。走つてばかりいたら転ぶ。転んで怪我したつて、ニンゲンのおまえじゃあ満足に見えないだろ？」

「ガレは見える？」

ああ、と頷いた。ニンゲンの機能より獣人のガレの方が発達しているのだから。

ガレは夜も昼も、いや夜の方がニンゲンがいなくて気分が楽で好きなくらいだつた。

「じゃあ、僕の足下も見て、つまづきそうだったら教えてよ」

「でも、走り回られていたら言つても間に合わないだろ」

「うん、わかった」

どこかずれた会話を交わしたあと、しばらく一人は無言で歩いていた。

真っ暗になる前に、ガレはマントの下の鞄から小さなランプを取り出して火打ち石で火を灯していた。自分にはあまり必要のないものだったが、古道具屋で売れるかなと拾つていたものだったが、役に立つっていた。

カリスに持たせて、黙々と歩いていた。

何を話していいのか、聞きたいことがあつたけど聞いてもいいのかわからなかつたからだ。

カリスも黙つていたから、月が天辺に上がる頃まで、道沿いにゆ

つくりと。

幸運なのか、不運なんかそれも謎だったが、二人は街へと急ぐ馬車や旅の家族とすれ違ったがガレとカリスの歩みを妨げようとするものは現れなかつた。

## ガレとカリスと、ソラの物語 2

さすがにガレも疲れて足が重くなつてきて、道から少し逸れた空き地に焚き火を熾していた。

雑木林も近く、枯れ枝もすぐに集まつてすぐに赤々と炎は揺れはじめた。

暖かい炎を挟んで、ガレとカリスは向かい合つて座つていた。旅人がよく野宿に使う場所らしく、燃された焚き火の跡や、座りやすい椅子として用意されたのだろう太い丸太も転がつていてすぐ落ち着くことができたのだ。

夏を迎えるとしている季節は野宿も辛くはなくなつていた。満天の星空が屋根のように広がつている木々の枝の合間から一人の少年を見下ろしていた。

誰もいない夜のなか、ガレは街のなかではかぶり続けていたフードを背中に落としていた。

黒い猫のような耳が二つ。ガレの黒い髪の間から生えてときどきぴくりぴくりと本物の猫のように動かされていた。

耳を見つめていたあと、カリスの視線は下に降りてきた。地面の上だつた。

たぐなつたマントの間から、期待通りのものが顔を出してゆるりゆるりと動いている。黒色のガレのしつぽだった。

じつとカリスが見ているとしつぽはさつと布の下に引っ込んで消えてしまった。

ガレが自分の視線を感じて隠してしまったのだとカリスもすぐに気が付いて未練っぽい声で言つた。

「しつぽ・・・」

「食べるか?」

ガレは鞄の中から燻製肉を取りだして、半分をカリスに差し出していた。

「ありがとう」

受け取ったカリスは今まで食べたことのないような焦げ色の固まりを、躊躇いなくすぐに口に運んで嚥っていた。

お腹など空いていないと思っていたけれど一口嚥むと、急に空腹感に襲われて硬い肉を思い切り頬張っていた。

「おまえさ・・・家出はいいけど。食べ物も何も持っていないだろ。馬鹿じやねえか？」

お皿もフォークもないガレの食事を、きれいな格好のカリスが食べるかどうか半信半疑だったガレが、結果に一つ息を吐いて、自分も口のなかに入れた。

「俺が食い物持つていなかつたらビーツなんだよ。食つもんなくて腹減りじゃん」

「ガレに会わなかつたら、買い物に行つていたよ。だけど、ガレに会つてすっかり忘れちゃつたよ」

咀嚼の間から灰青色の瞳が、さりとただの事実のように言い訳をしていた。

「驚いて、忘れちゃつていた・・・街を出てから思い出した」  
それから「こそ」そと上着のポケットに手を突っ込んで、はいとガレに伸ばされた。

「これを売つてね、買い物しようと思つていたのだけど買わずにすんじやつた。ガレに食べ物貰う代わりに」ガレにあげる

掌に載せられたものはぴかぴかのコインかと思ったが、もつと高そうなものだつた。

「指輪！うわ、でかい石！！」

「あげる。だからまた明日も、僕にも食べ物ちょうどいいね」

「おまえ、これさ、すげえ高いんじやねえの？これを盗んだから追いかけられたんじやねえの？」

「違うよ」

疑わしそうに言つと、窃盗には無実のカリスが少し嫌そうな顔になつていた。

脳天気にここにしている奴でも、ここには潔癖なのだと知った。

「これはずっと僕が持っていたものだもん。僕のものだもの」

「大きさ合わないじやん。嘘言つなよ、指にぶかぶかだろ、こんなん」

「お母さんのなの。お母さんもお母さんに貰ったものなの。それを僕が貰ったの！」

「それを俺に渡しちゃつていいのかよ？」

「いいの。僕はそれ好きじゃないから」

「でもそれこそ、そういうのおまえが誰かにやつちやつたらお母ちゃんに怒られるわ」

すると、しばらく黙り込んでから「怒らないよ」と小さく呟つた。「だつていないもの」

「おまえの母ちゃん、死んだのか？」

「こんな話、つまらない！つまらない！！それよりか、明日の話をしようよ」

癪癩を起したように鋭く言つたあと、こうと霧囲気が変えられてしまつて、またにこにこと笑うカリスに変わつて行った。

「ガレはどこに向かつて歩いていくの？」

苦手だなあと、ガレは感じていた。

そうして笑顔を向けられしめうと、それ以上に聞けなくなつてしまつたから。

そして、その女の子のような優しい笑顔が少し怖いのだと思った。よくわからないけれど、カリスは最初の予想とは違つて馬鹿じゃないのかもしれないとガレは思ったのだ。

「別に行く当てなんて、無いけどせ・・・」「ないけど、どこへ？」

「どこと、繰り返して聞かれてガレは口を割つていた。

「・・・『樂園』」

「樂園？」

“ 楽園” 。 . . 僕たちの世界。ニンゲンがいなくて、俺たち獣人が楽しく安心して暮らしてゆけるという秘密の場所 . . .

「 西の園・・・獣人が生まれた神話の“ 摆りかご” ?」

世界の東の園では人間が生まれたのだ。弱い人間のために新たに作られた揆りかごと、西の古い大きな揆りかごを比べたときどちらが快適かという議論が、ニンゲンと獣人の最初の仲違いの原因と物語はいう。

でも神話の場所が、世界に本当に存在するなどと思つてはいなかつたのでカリスが驚きを隠せなかつた。

「 知らなかつた。あるんだ、本当に!そこをガレは目指して旅をしているんだね」

「 あるかどうか、知らないよ。 . . . だけど、安心して俺たちが暮らせるのはニンゲンがいないきつとそこだけなんだよ」

憂鬱な心地になつてガレは説明を付け加えていた。

そんないい旅をしているなんて誤解されているのは、酷く虚しいと思つたからだ。だつたらただ彷徨つているのだと同情の方がまだマシだという気がした。

しかしして、カリスは。

そつと、「 そうなのか」と言つただけだつた。

ぱちぱちと焚き火の炎が楽しげに踊つている。

「 ジゃあ、そこに着いちゃつたとき、僕は入れないんだね . . . 」

「 はあ?」

「 だつて、そこは獣人の揆りかごだから、僕はそこまでガレに一緒にくつついていちゃけないんだよね . . . 」

聞いているところは現実的な話なのか非現実なのか、ガレには判断が付かなかつた。

カリスは、馬鹿なのか頭がいいのか、とぼけているのが本気で言つているのかガレにはとても難しかつた。

「 あ。じゃあ、僕は揆りかごの少し外に暮らすよ。で、僕には入れないからガレが出て、ときどき僕に会いに来る。それでいいね!」

にっこりとカリスはガレに微笑みかけていた。

「・・・そうだな。それだと、問題はないよな・・・」

現実にそんな夢のような場所が存在するのか、存在するとして無事に自分に行き着けるかがそれ以前の大きな問題として横たわっているわけだけれど。

カリスによると、それは問題ではないらしい。その後のことで、でもその解決策も無事、カリスは自分で見つけたようだ。行き着いてしまってまで自分たちは一緒にいて、カリスが入れない場所に着いた後は、入り口あたりにカリスは留まつてときどきに会う、ということになるという。

「信じられない話だ・・・」

「・・・なにが?」

自分たちがこのさきそんな風に、一緒にいるという話だ。

「・・・大丈夫。信じていいよ、駄目だつて言われたら僕、ちゃんと守る、・・・ガレ達の楽園には入らないから」

カリスがこんなだから、ガレには言葉もない。

目を見張るガレのまえで、ゆらゆらとカリスの身体は今にも倒れて行きそうに揺れだしていた。

「寝るんだつたら、草の上で寝ころんで寝ろよ。・・・こけたら怪我するぞ」

「・・・うんわかった・・・」

目も半分閉じられたまま、もぞもぞと云つて這うようにお尻をのせていた丸太から降りると、じろりと力尽きて倒れるように横になっていた。

すぐに規則正しい寝息が聞こえだした。

ガレでも今日は走つてばかりの日だと思つたぐらいだから。

平氣そうな顔をしていたけど、カリスはとても疲れていたのだろう。

う。

話はまだ途中だつたけど、中途半端に終えられてしまつていた。

でも一つだけは言えることがあるかもしねれない。

明日の朝、自分はこのカリスと一緒にいるということ。

ガレの意志や同じ子供でしかないカリスの思いなど、もつと強いものと向かい合つたときどう吹き飛ばされるかわからないけれど、少なくともカリスはガレといるつもりでいるのだ。

一瞬迷つたけれど、ガレはマントを脱いでいた。

隠れていたしつぽに夜風が当たつて涼しくなつた。

あたりには大きな生き物の気配はなかつた。しつぽを狙つている一番身近なニンゲンも眠つてしまつてしているのだから、平氣だらう。そして脱いだマントをガレはカリスの身体の上に広げてやつた。

ガレはほんと睡れずに朝を迎えていた。

マントを脱いでいたので寒かつたのかも知れない。

朝日が上がり邊りが明るくなつて、取り戻したマントを身につけたガレは眠りこけているカリスに声をかけていた。

「・・・おい。もう太陽は昇つてるぞ・・・」

「んんっ・・・と寝ぼけた後で、ぱちっと長い睫が開いて、フード

もすっぽり被つてゐるガレを認めて驚いた顔になつた。

「おはよ、ひどいよ、置いてかないでよっ！」

「・・・だからこうして置いてつてないじやん」

飛び起きて髪を掌で撫でつけてゐるカリスに、向こうに小川が流れてて顔が洗えるとガレは教えていた。

カリスの準備が整つと、今度は干した甘い果物を囁りながら歩き始めていた。

行く先は、昨晩カリスに話したとおり西の振りかごだった。

どこにあるか、知らないけれど、西だらう。

西に向かうのだ。

とにかく向かう。

ぐずぐずしていると追つ手がやつてしまつ氣がしたからだ。

オリドの街から。

カリスが出てきた街からの追つてが追いかけてくる。

追いかけて、取り戻していつてしまうかもしれないと思った。

そうして無理矢理ガレから持つて行つてしまふと、また自分は一人になつてしまふ。

渡さないと、ガレは思った。

何を。

カリスをだ。

・・・どうして？

浮かんだ自問にすぐに自答も浮かんでいた。

ああ、それはカリスがいれば、隠れ蓑になるから。  
もしもの時に一緒にいたらカリスの陰に隠れることができるから。  
カリスを盾にできる。そういうことなのだ。  
お金持ちそうで、女みたいな顔をしていて、みんな一人がいたら  
ガレではなくカリス方に注目するだろうから。  
カリスはいろいろ役に立ちそつだから！

夜の間一人考えていて、ガレの中に生まれた疑問は朝にはすっかりと解決できていた。

あとは、カリスを急かしてさつさと歩いて行くだけだった。

「行くぞ」

「うん。今日も晴れていて良かつたね。雨降つてたら濡れちゃうん  
だものね」

ガレの打算をわかつているのか、なにもわかつていいのか。も  
しかしてわかつたうえでどうでもいいと無視なのか。

カリスは朝日のように明るかった。

「西に行くんだね。このまままっすぐに歩いていると明後日にはフ  
ームルの街につくかなあ」

「フームルには行かない。その手前で逸れてアシの村を通り抜け  
て行くつもり」

「南寄りになっちゃうよ」

「アシから山道を通つて一気にサザントーイに入ろうと思つて  
いる

んだ。そっちの方が人の通りが少ないだらうし、いざとなつたら山に逃げ込むことができるし」

サザントーイとはファームルの果てに広がる大きな街だった。  
「山の中つて走りにくくつて大変じゃない？」

「だからいいんじやないか」

「・・・そつか」

頷いたカリスは納得したようだつた。

二人は歩き出していた。

穏やかに晴れた眩しい光の中で、すっぽりと頭から深緑のフードを被つているガレと、田舎道には浮いているきれいな青色の上着と爪先の細いブーツに宝石のブローチといつたカリスが並んで進んで行く。

野良仕事に向かう農夫の馬車や旅馬車が一人とすれ違つて行き、三台田以降の馬車がやつて来たときには、カリスが首を傾げていうちに気が付くガレの指示で街道脇の木立や藪の陰に隠れてやり過ぎようになつた。

「用心はしそぎることはないし」

「うん、そうだね。休憩にもなるし僕は賛成だよ」

緊張した面持ちのガレに、カリスは笑つて応じていた。  
耳を澄まして、馬車や人の気配に警戒していた。

一人でいるときより遙かに気を配りながらガレは歩んでいた。

ガレ一人の運命じゃない。カリスと二人分の責任がガレの肩にずしりと乗っかつていた。

カリスを守らなくちゃいけない。

ガレにそんな理由などないのに生まれたときから決められていたことのような気分になつていた。

自分は絶対カリスを守りきつていかないと駄目なのだ。

あとはもう無い。

一度とこんなチャンスは巡つてこないかもしないのだから。

「ふう、ちょっと疲れたかも」

次第に立ち止まることが頻繁になつてきているカリスの暢気さに苛立ちながらガレは必死になつてカリスをなだめて急かして歩かせていた。

「お腹が空いた、お腹がペニペニ。もつ今日は無理、食べないと動けない！」

ガレの予定としてはもう少し先まで進んでから野宿にするつもりだつたけれど、太陽が傾きだしたころには、すっかりカリスは座り込んでしまつて駄々つ子のように空腹を訴えるのでガレは仕方なく折れたのだ。

道から焚き火の明かりが見えない窪地を選んで枯れ枝を集めて早めの準備をしているなかで、ガレの気持ちを知らないカリスは半分食べた乾し肉を握りしめたまま眠り込んでいた。

本当はカリスの家出のことなどもつと詳しく知りたかったのだけれど、カリスは目も覚まさず朝まで眠り続けていた。

翌朝は日の出頃には大きな雨粒が、一つも星が輝かなかつた空から落ちはじめた。

眠つているカリスを起こすと引きずるよつに近くの木の根本に移動していた。

寝起きの悪いカリスが足下にぺたんと腰を下ろして目を閉じた頃にはすっかり世界は灰色で本降りの兆しだつた。

他に方法はなく空を睨んで雨が止むのを待つてゐるガレの横で、たつぷり眠つたあと、むくりと頭をもたげたカリスだつた。

「ぜんぜん起きないから死んじゃつたのかもつて思つた」

ずっと眠つていたカリスに面白くないガレが嫌みっぽく言つと思わぬ反撃がやつてきた。

「違うよ！変なこと言わないでよつ。いびきかいていたでしょ！！」

唇を尖らせて、叫いてほんとに女みたいな奴と思わせるカリスに、「いびきはかいていなかつたよ・・・」

激しく眉を吊り上げられる前で、ガレは剣幕に圧されるよつて否定しなくてはならなかつた。

「おまえつてよくわかんねえ・・・」

「ガレが変なことを言うからだよ。死ぬとか、そういう言葉は氣安く言つてはいけないんだよ。ほんとになつちやうんだよ、知らないの？」

「言わなくたつて現実になるときはなるよ・・・」

一瞬考えて、ガレはそう言つと「それは、そつだけど・・・」と、不服そうに頬を膨らませた後、うん、と一つ頷いてからカリスはきつぱりと言つた。

「僕はそういうの好きぢゃないから言つちや駄目なのー！」

じつと睨まれるからガレはたじたじつと逃げ腰だ。

「・・・わかつたよ・・・言わないようにするよ」

「うん、ならない、許してあげる！」

田を覚ましたカリスと、どしゃ降りの雨の音を聞きながらの会話はこれだつた。

ガレはやつぱり、自分はいろいろカリスに負けているよつた気分になつて、ちょっと癪にさわつた。でも正面からぴたつと見られると強く出られない。でもそれもそれほどは悪くないのかとも感じてしまつてゐるけれど。

氣を取り直して朝ご飯を一人で齧つていた。鞄から取り出した乾燥した食べ物だつた。

雨は降り続いたので動くことはできずに一人は木の根本で雨を避け肩を寄せ合つように座つて時間を過ごしていた。

カリスはすぐに再びうつらうつらと眠りだし、しばらくするとこつん、と不安定に揺れていた頭がガレの肩に当たつていた。

押し返すのも大人げないのかなと迷つてゐるうちに、ずるずるとカリスの身体が傾いてきて、ガレはすっかりクッショングがわりになつていた。

ガレは少し考えて、まあいいか、と思つた。

肌寒い天気だったのだが、カリスの身体がもたれかかっているところは温かかったからだ。

昼近くになって、雨はいったん上がつていていた。

またすぐ降り出すだらうといつ黒い雲が空を占めていたが、雨は一応やんだので少しでも移動しようとガレは考えた。

二人になつて食料の減りは二倍になつていたから、補充もしなくてはならなかつた。そのためにもアシの村に早く着きたいと思つていたのだ。

よく眠つた後で足取りも軽くなつたカリスと、ぬかるんだ道を走つていつたがまもなくして雨はまた降りはじめてしまった。

「うきやあ、冷たいっ」

青色の上着を脱いで頭から被つたカリスが薄い胴衣を通して背中を濡らされて甲高い悲鳴をあげた。

「冷たい、どうするのガレ！体温で乾くまでずっと走つて行くの？」

雨の中を、乾くまで。

ふざけた顔もせずに、ここつはそこうここつはそこうことを言つ奴だとガレもわかつてきていた。

ただし、本当にまじめなのかどうかはまだわからない。

「どっちでもいいけど。おまえの好きなようにしていいよ」

走り続けるには雨は激しすぎるから、どこかで雨宿りを。時間はまだ早く晴れているなら太陽は西に傾くかけたばかりの時刻だつたろうが、日が照らない今日は暗かつた。そのまま静かに野宿に入ろうと想えていた。

「うわあ。靴の中も水浸しだよ。気持ち悪い、じゃぶじゃぶいっている！」

カリスは歎声のように明るく騒いでいたが、走る勢いがふと弱まつて、立ち止まってしまった。

雑木林の奥に向かつて腕が伸ばされていた。

「あそこは！？」

濡れて灰色に見える木々の間にぼんやりと明かりが見えた。

近づくと一軒の農家だった。

古くて小さな母屋の横に、同じようにみすぼらしい納屋が立っていた。

入り口の扉は半開きになつていて、家畜はおらず藁や農具が暗がりに積まれていた。

「ここがいいよ

母屋の中を窓からこいつそりと覗いてみたガレは、小さなおばあさんが暖炉のまえの揺り椅子に座つて編み物をしている様子を確認していた。

閑散とした部屋の物の無さにも、老婆の一人暮らしなのだと判断がされた。

「ああ、ここで宿を借りることにしよう」

無断だつたが、家主にとつて、今夜取り立てて用のない場所を少し眠るために借り受けるだけで悪さをするつもりはないのだから。だから、わざわざ断わりにゆかなくてもいいのだとカリスも納得した。

雨が降り続いている。

鍵が掛けられておらず元々扉も半開きだつた納屋に忍び込むと濡れた服を脱いで、二人は積まれた藁の山のなかに潜り込んだ。暗くなってきたのでランプに明かりを灯して、残つていた乾し果物と肉の薫製を半分ずつ、藁から頭だけを出して分け合つてタゴ飯だつた。

食べ終えてもひもじさが残つていたが、一人とも口に出さずに藁布団のなかでうとうとなつていたときだつた。

ガレは、不覚だと飛び起きたが遅かった。

「あれまあ。なにか様子が変だなあと思つたら。狸の仔よりもずつと大きい子どもが一人もあるでないか！」

大きな明かりに照らされて眩しくて、ガレは慌てて腕を翳しただろつ。

年を取つた女主人が皺の奥に落ちくぼんだ小さな眼を、このとき

ばかりは大仰に見開いて戸口に立つて二人を見ていた。

「「めんなさい、おばあさん。僕たち、黙つて納屋を借りていました」

脱いでいた肌着を慌てて身につけてある程度の身支度を整えたカリスが、丁寧に頭を下げて謝っていた。

ランプと反対の手にはパン生地を捏ねる棍棒を握つてやつてきた老婆の前に立つて、その一步後ろにガレがいた。

上着までは着る時間がなかつたカリスと違つて、そちらはマントのフードまで田深に被つていた。

自分より背の小さいカリスの陰に隠れるよつに背を丸めて俯いて立つガレの緊張を感じ取つていたから、庇つようにもう一歩前に出た。

「ごめんなさい。でも明日の朝まで、雨がやむまで休ませてもらおうとしただけで、物を盗んだり壊したりするするつもりはなかつたのです」

カリスによくはわからなかつた。

カリス自身はもし自分の屋敷の庭に、ガレのようななじつぽの生えた者が迷い込んでいたら、大歓迎で嬉しいと思つのだ。

追い出したり、捕まえたり、大声を出すこともしないと思つけれど、ガレは怯えてしまつてゐる。

この小さなおばあさんに。

気づいたとき、横のカリスの反応がぼんやりとあれほど悪くなかつたら、納屋の奥の窓に飛びついて外に逃げ出してゆく勢いだつたのだ。けれど状況をすぐには飲み込めなかつたカリスがいたから、ガレも動けず立ちつくことになつてしまつた。

「ごめんなさい、おばあさん。すぐに出で行くので許してください」

「なんでこんなところおる。坊たちは家はどうだ、家出か?」

「え?」

「揃つて家出してきたのか、兄弟なのか？」

「兄弟じゃないです……」

カリスは答えていた。

嘘をついてもすぐにばれてしまう。着ている物の雰囲気が違いますぎるだらうから。

「友達です。……僕も友達と一緒に行こうと、家出しました……

「……馬鹿たれだな。今じろ親御たちは心配しとるに」

もうじもじと歯数が少し減つている口元を動かして、低く怒つたような声で老婆はこぼしていた。

「こっち、来い」

カリスは驚いて、後ろのガレのマントの端っこを掴んでいた。だつと走り出してカリス一人、置いてゆかれないようだつた。「後ろの大きい子もはよ、来い。濡れたままでこんなところにいるのは気持ち悪いだろう、向こうに暖炉もあるし、芋だけじゃがステークもある。食べるといい」

どうしたらしいのかわからぬカリスが、ガレを窺っていた。

「ほらさつさとしろ」

「・・・はい」

カリスが一人分の返事をしていた。

ガレのマントの端を握りながら、カリスはガレと老婆の後ろに従つて、母屋に入つていった。

捕まつたわけではない。

よぼよぼの老婆で、少し強く突き飛ばせばやつづけることができる。

無視してカリスを引っ張つて去ることだつてできただらう。

だけど、そうしなかつたのはカリスに出会つていたからかもしない。

もしかして、また逃げなくともいいのかもしないと、ちらつとガレは考えてしまつたから。

「ガレは頭に禿があつて、それを気にしてゐる」

勝手にすゞいことをカリスは言つてゐるとガレは思つたが、口に出さずに『えられたスープを黙々と口に運んでいた。

「禿ができるから、性格暗くなつちやつてあまりしゃべらなくなつたけれど、本当はとても優しいから僕は好き」

笑顔で説明するカリスの話をすっかり信用したのか、老婆はふうんと頷いたあとちらつとガレに目を向けた。

「禿なんて氣にすることないのに。死んだ爺さんも禿とつたが平氣だつたぞ」

ニンゲンの老婆と目があつてガレはびくつと背筋を伸ばした。

「まあ、仕方ないか。子供だからな、思い惱んでもな・・・。でもよくよすると余計に禿げると言つやつて若いでのうちは生えてくるからあまり気にしんことだ」

うんうん、と必死に頷いて自分に向けられた話題をやり過ごそうとしているガレだ。

鞄から取り出した布でガレは耳の生えた頭をくるむように巻いて隠していた。

しつぽはお尻まで長い上着の下に入れて、マントは脱いでいた。

乾いた衣服を貸し与えられて、食卓に湯気が立つ温かいスープとパンを並べると鷹揚に、席に着けと命じた老婆の名はオードルだと聞かされ、一人もそれぞれ名前を名乗つていた。

「うふん、二人はガレ坊の故郷に向かつて旅をしてゐるつてことか。子供だけだが、あまり感心はしないがなあ・・・」

言えない本当を隠して適度の嘘が入り交じる説明は、勿論カリスが、すらすらと口にしたものだ。

まだまだ緊張に凝り固まつてゐるガレは満足に言葉が見つかなかつたが、横にいるカリスがガレの分もつまくオードルと話をしていた。

カリスにとつては三日ぶりの温かいご飯だつた。

ガレにとつては、何日ぶりかなんて数えられなかつた。仲間と生き別れになつて一人になつてからははじめてだつた。屋台で狩つた獲物を売つてお金を持ち合わしていくても、街の食堂に一人入つて食べようとは思わなかつた。そんなふうに一人テーブルに座つて運ばれて、どんと置かれていつた料理をニンゲンのなかで一人きりで食べても味はきっとわからないだろうから。

だけど、今は少し状況は変わつてゐるのだ。

ガレの横にはガレのしつぽを知つてゐるカリスがいて、お金はあまり持つていなかつたらともスープを出してくれたオーデルだけのこぢんまりとした空間だつた。

「うまいか、禿の坊。お代わりが欲しかつたらまだあるぞ」

嘘なので、むごい呼ばれ方でもガレは腹は立たなかつた。

「おいしいです。・・・でももうおなかいっぱいです」

「嘘つくな。まだ入る顔しとる」

はなつからガレの言葉など聞くつもりはなかつたのだろうか。さつさとお皿にお代わりが入れられてガレのまえに戻つていた。惜しげもなくみなみとした汁のなかに芋が少しだけ沈んでいるというスープだつた。

「・・・ありがと、ござります」

ガレの様子を隣で見ていたカリスがうぶつと嬉しそうに笑つていた。

「坊も食べるな?」

「はい、いただきます」

そして、オードルが後ろを向いてゐる間に、そつとガレを肘に小突いていた。

「僕、芋だけのスープつてはじめて食べるけど、こんなに美味しいつて知らなかつたよ」

高級そうな格好をしてゐるカリスだつたから、芋だけのような質素な料理は食べたここがないのだろうなあと思つたものだが、美味

しいのは本当だつた。

「ああ、とても美味しい」

食事のあとは、もう寝る時間だなと、オーデルはベッドを用意して一人を押し込んでいた。

無理矢理で強行な態度だつたから、しばらくしてガレはこっそり扉を開けて様子を窺つてみたが、鍵を掛けられて閉じこめられいることもなくオーデルは暖炉の脇のソファーを寝床にして眠つてしまつたことを知つた。

安心してベッドに戻つたガレは一つ息を吐いた。  
狭い寝室に一つのベッドだつた。

ふかふかとは言えなかつたが、布団に掛布で屋根付きの夜だつた。  
「嬉しいね。今日は背中痛くないね」

ランプの明かりのなかでカリスは楽しそうにしていたがガレは聞いて反対に口の端を歪ませなくてはならなかつた。

「おまえ、そんな背中痛かつたのかよ？」

「あ。そういうわけじゃないけどね。でもこっちのほうが土よりも軟らかいわけだし。ガレもこっちのほうが嬉しい、きっとぐつすり眠れて明日はいっぱい歩けるよ」

誤魔化しているような笑顔だとちらつとガレは思つたが、追求はせずに別のこと口にしていた。

「あのばあさん・・・嵐で庭に倒れた木を邪魔そうに言つていたよな」

食事をしながらガレの禿の他に話題にあがつたいくつかの話のなかの一つだつた。

「うん。通路にどんとあるから通りにくいつて。腰が痛いし、一人では動かせられないんだつて言つてたね」

「その目的があつたから、俺たちに優しくしたのか？」

「さあ。わかんないけど、でもスープ僕たちの分新しく材料追加して作つていたよ。温かくてとても美味しかつたね」

「なにが言いたいんだよ」

「べつに、なんにもだよ」

爺さんのお古だという大きなシャツを夜着に借りて着ている一人は、古くて、少し動くとミシミシ音がするけど広さだけは少年一人十分休める大きなベッドでじろじろと転がって話をしていた。

「だって、僕はガレにくつづいてゆくだけだもん！」

「おまえ、ひ弱だもんな」

カリスのふわふわと漂うような、のらりくらり交わすような方にガレは腹を立て言うと、カリスはぱつと頭を上げて上を向いて寝そべっていたガレを見下ろした。

怒ったのかとガレは思つたが、そういうわけでもなかつたようだ。

「うん。僕はひ弱だよねえ。だから、倒れた木をどかす作業、ガレが一人でやってね」

「はあ？ なんこと誰がやるつて決めたんだよー？」

「ガレ」

「言つていなだろつ！」

「ん。ならいいけど、僕は出発までゆっくり寝てるからねー！」

と笑顔で言った。

やはりカリスは怒つたのかもしれないとガレは思つた。

「おやすみ、ガレ」

さつさと背中を向けると掛布を被るほどに引つ張り上げてしまつ。

「・・・おやすみ・・・」

本気で、出発まで一人眠つているつもりなのだろうかとガレは心配になつてきていた。

一ソングンでその上さらには自分より小さいカリスにはたいした力など望めないだろう。だから自分がやるしかないのだろうなあと思つていたけれど、カリスは部屋のベッドでうとうとしていてガレが一人働くのは、たとえば手伝わなくてもそばに立つていては全然気分が違うつてものだろう。

しばらく考えて、ひ弱だと悪く言つたことを謝りつかと思つて、カリスの顔を覗いたけれど、ガレは断念だった。

カリスは女の子のような長い睫を閉じてもう眠つてしまっていたから。

かわりにガレは腕を伸ばして枕元のランプの明かりを消した。カリスはへそを曲げてしまつて、本当に手伝わないつもりだらうか。

悩ましく、眠れないかもしぬないと思つたのもつかの間、ガレの意識も穏やかな眠りの世界に吸い込まれていった。

ベッドの布団のなかで目を覚まして、一瞬驚いたが、隣にはカリスが眠つていた。

自分を取り巻いている状況を思い出して、頭の禿を布で隠してしつぽも上着の下に入れたガレは次第に憂鬱になつてきていた。

薄いカーテンの窓の外の空は昨日の色が嘘のようにきれいに晴れた空が広がつていたが、視線を下に落としたときそれを思い出してしまつた。

約束でも命令されたわけでもなかつたけれど、ガレにとつて決定事項になつていて。

宿と食事のお礼としてオーデルおばあさんのために、倒れた木を邪魔ではないところに移動させるのだ。

ガレはまた、自分がハつ当たりにカリスのことをひ弱だと言つたこともしつかりと思い出して、だから暗い気分だつた。

自分一人でやるのだろうか。

たぶん、がさがさとやつていたら、オーデルが気が付いて見に来るかもしれない。そのとき普通にしゃべられるか自信がなくて嫌なのだ。

小さく声をかけてみたが、起きる様子はない。

カリスは元々、朝が弱い質で日覚めが悪いのだから、普通でも簡単には起きやしないだろつ。

もう一回、もう少し大きな声で「カリス、朝だぞ」と繰り返して

みたが、結果は同じだった。

「ぶすつと頬に空氣を溜めたガレが、マントを着よつかと迷つたがやめた。」

マントを着ていろと田を覚ましたカリスが、また慌てるかもしけないと考えたからマントはベッドのそばに置いたまま窓から外に出ていた。

雨降りのあとで濡れて朝日にきらきらと光る庭だった。

石を並べて作られた垣根の扉に繋がる一本の通路の真ん中で横たわる秋の嵐に倒されたという大きな枯れ木にはガレもなるほど、邪魔だと思った。

「ご飯をもらつたので。

ベッドも使わせてもらつたから。

しぶしぶだつた。

ガレはまず軽く腕で抱えて集められる枝を集めて庭の縁運んでいつた。

昨日の雨の中で折られたのだろうまだ新しい枝だつた。どうせきれいにしてもまわりには木が多いので、また嵐がやってきたらこんな風になるにきまつている、とぶつぶつ言いながら、枝を外に放り出して戻つていつたガレは。

いつのまにかその大木の近く、しゃがみ込んでガレを見上げているカリスの姿を田にしてとつさに言葉はなかつた。

「・・・おまえ」

「なに?」

「・・・んなとこひに座つていないで手伝えよ

「ひ弱だもん」

一晩経つてもカリスもしつかりと覚えていて根に持つてゐるのだ。むつとなつたガレに構わず、カリスも怒つたような表情で続けていた。

「それにガレ、僕を起こさなかつたもん。一人でやりたいんでしょ

「お、起こしたぞつ！声掛けたけどそつちが起きなかつたんじやん

か！」

「違うよ」

「違わない！おまえ、寝ぼすけ、ぜんぜん起きないじゃんかつ」

「・・・違うよ、そんなことはないよ？」

カリスもガレの剣幕に怯んだようで、首を傾げていたが  
「ひ弱な手伝い、いる？」

「いる・・・」

「じゃあ、謝る？」

「・・・わかったよ、謝ればいいんだろ、ひ弱つて言つて―――」  
「べつに謝らなくていいよ！」

にこつと笑顔になつたカリスが、よつこらしょと、老人のような  
かけ声を口にしながら立ち上がつた。

「だつて、謝られても僕、ひ弱だもん。軽いのしか持てないもん！  
重いのは全部、ガレが持つてね」

青い上着の袖をまくつたカリスが足下に落ちていた枝を拾い上げ  
た。

最初に石や木の枝を取り除いて、そうしていりのうちに斧が納屋にあると姿を現したオードルが教えて、一人で大きすぎる倒木を解体していった。

抱えられるほどに割つた木をすべて庭の隅まで運び終わつたガレ  
と、カリスにオードルが声をかけた。

「二人ともありがとな。助かつたよ、もうこれで大跨ぎしたり、夕  
方つまづくこともなくなつた。一人のおかげだなあ。さあ、ご飯だ。  
禿の坊はわしらじや無理だと思つた大きな木の固まりを引つぱつ  
てくれた。お腹もどんと空いたろう、たんとお食べよ」

オードルにとつて禿の坊の働きは感動が深かつたようで、禿の坊、禿の坊、とガレは繰り返し褒められた。

「ほんとは禿じゃないのにね・・・」

これには、禿だと説明したカリスは罪悪感があるため小さく誰に  
ともない不平をこぼしたが、当のガレは平氣だつた。

「べつに、俺、禿てると思われても平氣だし」

「・・・そう。でも、僕はなんか、いやかも・・・」

あんまり物事を感じていなさそうなカリスでも禿は嫌いなのかと、

発見したガレは笑顔だった。

自分が笑っていて、カリスがふてくされた表情。こんなことは出会つてからこつち、珍しかった。

そうと気が付いてさらにガレは、心が楽しくなっていたのだ。

でもその楽しさは長くは続かなかつた。

井出で汗をかいた額を拭つて、汚れた手を洗つたあとミルクとパンと焼いた薄いハムの朝食を食べ終わつたぐらいの間までしか保たなかつたのだ。

ガラガラと馬車が家に近づいて遠ざかつてゆくと思われたとき、急に音が止まり、変わつて馬車が引き返してきたことを感じていた。オーデルと楽しそうに話をしていたカリスはどうかは知らなかつたけど、ガレは気が付いて密かに背中のうぶ毛を逆立てていたのだ。オーデル老夫人にはだいぶん慣れて、いくらか話もできるほどに緊張を解けるようになつていたけれど、すべてのニンゲンにそうはいかなかつた。

知らないニンゲンが扉を叩いて、オーデルの返事を待たずに開けて入つてきたのだから。

大柄の、鍬の似合いそうな農夫の中年の男だつた。髪の顎、太い腕。

腰には野良仕事に使うのだろう鉈を提げていた。

男にとつて普段の他意のない仕事の格好だつたがガレは腰を浮かすほど警戒をしていた。

顔が引きつっているのが自分でもわかつたが、どうにもできなくて早く去つてくれるよう祈るように俯くだけだつた。

男が入り口に近い椅子に座つていたガレの横に立つていた。

ガレのもつ一方のほうの腕に安心させるようにカリスの手が触れていた。

「おはよう、ばあさん。今、仕事にゆく途中だつたんだがな、驚いて寄つたところだよ」

質素な部屋に似合わない大声が壁にぶつかって跳ね返つて殴られているような気持ちになつてガレは身体を竦めていただろう。

「おれも、ついつい、頼まれていたんだが先延ばしにしちまつて悪いとは思つていたんだが」

がはがはつと笑つて頭を搔いたあと

「庭の倒木だ。それが今日見たら、きれいに片づけられていてどうしたんだと驚いたんだよ」

「おまえも、忙しいからな。気にしておらんよ。気長に待つていつもりだつたんだが、そうしたらこの坊たちがな、朝一番にやってくれたんだ」

オーデルは皺の深い小さな顔に親しみのこもつた笑顔を刻んで説明していた。

男は近所にする者で、オーデルとは気心の知れた関係のようだつた。

自分たちに男の視線が向けられているのを感じてガレの腕は小刻みに震えだしていただが、ガレの様子に注意が向くまえにカリスだつた。

「おはよづります。僕たち泊めていただいて、もうこれでお暇するのですけれどお礼と思って」

「ちつこいおまえたち小僧が一人である木をどかせたのか?」

「小さく切つて三人で運んだから」

「それにしても、断ち割るだけでも大変だつたひつに感心した響きだつた。

男の胸あたりの身長でしかない少年が一人で、よくやつたものだと感嘆の色を浮かべつつでも、信じられないなあと納得できない目もっていた。

だから。

おばあさんは説明したのだと、カリスは思っている。

カリスも驚いて言葉を失う」となつたのだけれど、オーデルおばあさんは普通の態度で、いやそれ以上に素敵なことを打ち明けるような笑顔、意地悪ではなかつたのだろうと。

でも結果は最悪なものだった。

「こっちの坊はな、耳が生えている者だから、力がうんと強くてな。細つこいのに樂々と木を担いで運んでくれたんだ」

言葉がすべて終わるまえにガレは椅子を蹴つて立ち上がり、立ち上がったガレの腕を男は別人のような怒つている。

ガレは獣人のニンゲンよりも強い膂力で男を激しく振り払つて、男は背中から壁に吹つ飛んでうめき声を上げていた。

「あー、あ、やめり。」の子たちを嫌がないで、こゝ子だよ。」

と駅の元に寄つていつた。

「この野郎、やりやがったなつ・・・ばあさんどいてな。ばあさんの取り分は半分だ。借金に取られてしまつた爺さんの土地をこれで取り戻せるぞ！」

立ち上がった男の言葉をオーデルは繰り返していた。

爺さんの土地

「なんだ、取り戻したいんだら、じこれで顔向けてやないつてつ。」こんな幸運一度と来ないぞ、ばあちゃん!」

— ● ● 爺さん ● ● 「

オードルが男をなんとか止めようとしていた手が離されたのを力  
リスは視界の端で見た。

ガレは寝室に荷物とマントを取りに走つてそして、男はすばり  
こいガレではなくカリスの方を先に捕まえようとした。

こちらを押さえることで、ガレを捕獲しやすいと考えたのだ。  
大男が両腕を広げてカリスに迫つてゆく。

「・・・どうか、落ち着いて・・・うわあ、嫌だあ！」

手が伸ばされてじりじりと後退していたカリスの後ろは壁でもう逃げ場所はなくなつた。

「嫌だ、こういうのはつ、離して、離してよー。」

身を捩つて暴れたが、がつちりと大きな男にカリスの抵抗など痛くもないようだつた。

が、ガレの体当たりを喰らつて男は再び壁に肩をぶつけることになつたが、寸前にうまくカリスが腕から逃げ出した。

「ガレ」

カリスはガレに手を伸ばした。

ガレはカリスの腕を掴み取つていた。そしてそのまま一人で戸口に向かつた。

転がつている椅子を飛び越えて、暴れた振動でテーブルから床に落ちた皿が幾枚も割れていた。

そのなかでオーデルは落ちくぼんだ瞳に悲しげな光を湛えて立ちつくしてこちらを見ていた。

「・・・おばあさん・・・」

一瞬振り返つて何か言おうと、なじろうと口を開いたはずだが、ガレには言いたいことがわからなくなつてしまつていた。つんと鼻の奥が熱くなつた。

ガレはカリスの手を引いて前を向いて走りだして走つて走つて村を出て山の中までずっと休むことなく。

何度も木の根や石に足を取られて転びそうになりながら走り続けて、ずっと手を引っ張られていたカリスの心臓が爆発する寸前に、ようやくガレは立ち止まつていた。

ガレはそのまま木の根本に蹲つてしまつた。

「ガレ・・・」

カリスは考えてようやく見つけた言葉だつた。

カリスはそつと名前を呼んだ。他に良い言葉は見つからなかつたから。

でもいつたん声を出したあとは大丈夫だつた。

「ああ、もう、追いかけてきていないみたい。追いかけてもガレ、足早いから追いつかないね。あ、でも僕が一緒にいて足引つぱつているか・・・。ガレ一人ならもつと山ほど走れたのに、僕がふらふらになつていたから駄目だねえ、もつと走れるようにならないと・・」

「一人でも走れないよつ！」

ガレは噛みつくように叫んで、カリスは歌うような一人しゃべりの口を閉ざしたのだ。

「足が震えて走れない、がたがたついてとまらない！手も震えてるつ、こんなのもう嫌だ！」

ずっと感情をフードの下の耳のように感情もじつと押し殺してい るようなガレの絶叫だつた。

やはりこうなつてしまつたのだ。

これではいつもと同じだつた。

耳がバレたらお終い、獣人と知られたガレには居場所がないのだ。珍しい生き物としてただの獸とのように追われてしまう。お母さんとばらばらになつて、おじさんはガレを岩陰に隠した後、ハンターの前に飛びだしていつて、しばらくして誰もいなくなつたとき、ガレは這いだしておじさんが走つた道とは反対に広がる林へと逃げたのだ。

それきり、お母さんもおじさんの消息も知れなかつた。

「嫌だよ」

こんなのは、もう嫌だと、言つても無駄とわかつていてもにガレは止められなかつた。

「こんなの、もう嫌だつ！びつじて、おばあさん、優しかつたのになつ！俺も普通にしてたのに、あのヒト、やつぱり裏切つた！俺の耳をあの男にバラして、俺を売るつもりで最初からいたんだ、きっと

「ガレ・・・

琥珀の瞳からはぼとぼと大粒の涙がこぼれていく。でもガレは

拭うことせず叫んでいた。

「なんで、俺は普通にいたいだけだよ、どうして捕まえられて殴られないといけないわけ、檻に入れられて売られなくちゃならないんだよっ！…」

しゃくりあげながらガレは訴えていた。

「俺は悪いことしないんだ、ただしつぽと耳が生えてるつてぐらいなのに、どうして仲良くできないんだろう、なんで殴るんだろう、武器を持つて自分の子供だと殴らないのに俺だと殴るんだつ、ニンゲンは俺たちのこと嫌いなんだ！…ほんとはおまえだつて・・・」

そこでガレの声は震えて消えていた。

「ねえ、ガレ。・・・僕のことまでは勝手に決めないでよ・・・。僕はガレが好きだよ。確かに殴る人もいるけど、だけどみんなじゃない。ガレのこと好きだつて人、ちゃんといろよ」

痛ましそうに、でも怒ったようにカリスは蹲つているガレの横に膝をついて腰の鞄を示したのだ。開けてもいいかと丁寧にガレに断つてからガレの鞄の蓋を開けた。

中からカリスが取りだした物は、数枚の古びたコインと布にくるまれたパンやゆで卵などの食べ物、そして古い帽子だった。

どれもガレが入れた覚えがない物を見せられて、驚いて涙は止まつていた。

「オーデルおばあさんがね。ガレが仕事しているときに僕にくれたの。最近物忘れが多いから、うつかりと出かけのときに忘れるといけないからつて。もらつて僕はガレの鞄に入れて置いたの」

まったく知らなかつたことでガレは目を見張つたが

「・・・でもあのばあさんは、結局裏切つたんだ！」

悔しそうに悲しそうにガレの顔は再び歪んでいた。

「・・・それは、僕は少し違うと思うんだ。オードルさん、昨日の夜でも食事が終わつたに、食事はもう食べたかつて、何度も何度も聞いていたでしょ。お歳だから忘れちゃうんだね。だから、あの時もすっかり、ガレの耳のことを話したらどうなるかってことを忘れちゃつただけだと思うの」

黙つて話に耳を傾けているガレはズズッと鼻をすすり上げた。

「オードルさん、きっと最初からガレのこと気が付いていたんだよ。だけど言わなかつた。それで、ほら」

ガレにカリスは帽子を差し出していた。

「これから旅するのに、マントでは暑いだろし、布だと落ちるといけないからこれを使えつて言つていたんだよ。でもうつかり忘れちゃつて・・・。ああ、ほら、ガレの力持ちを嬉しそうに自慢するようになつていたと思わなかつた?」

優しい笑みを浮かべるカリスが、ガレの涙に濡れた手の甲の上にそつと帽子を置いていた。

黒狐のような動物の毛で作られた帽子は大事にされていたとわかる品だつた。

大事にしてあつたおじいさんの物。おそらく“禿”を隠すためにとガレに贈られた帽子だ。

それをガレにと。

「ね、ガレ」

カリスはそつと両腕を伸ばしてガレを抱きしめていた。

「ガレのこと好きな人は隠れていてなかなか見つからないかもしないけど、ちゃんといろよ。だつて、もうここに一人いる。一人いるなら何人もいるよ、絶対ね」

ぎゅっと腕に力を込めていた。

「でもやつぱりいても現れないの意味はなくて、寂しいよね。ねえ、ガレ。僕はね、一緒だよ。一緒に“樂園”に行こうよ、早く。そこに行けばもうガレは悲しくならなくなる。そこに行こう!..」

さあ、とガレを抱きしめていた腕を解いたカリスは立ち上がつた。

「行こう！」

今度はカリスだった。

涙でぐちゃぐちゃになつてゐるガレに手を差し出していた。

ガレは、光に集まる羽虫のよつにふらりとその自分より小さな白い手に手を重ねていた。

カリスは、ガレの手を掴むと引っぱり立たせてもう一度。

「行こう！ ガレ」

ガレが見とれた明るく太陽のような力強さを感じた笑顔だった。ガレの手をしっかりと握つてカリスは駆けだした。

## ガレとカリスと、ソラの物語 3

「『めんね・・・ガレ。少し休んだらまた走れるよ』になると思つ  
んだけど・・・」

「いいよ。べつに。俺の方が絶対体力あるんだし」

ニンゲンと獣人ではしつぽや耳があるだけでなく、基礎的な身体  
の作りが違うのだ。だから、ガレには走れなくなつたカリスを背負  
つて山道を駆け上<sup>あ</sup>がることだつてそれほど苦ではなかつた。

行こう、と威勢良くガレの手を取つて走り出したカリスだつたが  
どれほども走らないうちに、ガレよりも息が上がり足がもつれだし  
た。

「情けないよね・・・転んで走れなくなつちゃうなんて・・・」

カリスはガレの背中に掴まりながらぶつぶつ言つていたが、もう  
ガレはあまり聞いていなかつた。

気にしなくつていいからと、最初は丁寧にいちいち答えていたけ  
れどカリスは納得しない。気にしていることが好きなのだ。だつた  
らずつと言つていればいいやと思つたのだ。

ガレの背中に掛かる重みと、体温。

そして優しげなカリスの声。

内容はずつとぼやきだつたけど、聞いていて嫌ではなかつたから  
ガレはカリスの自由にさせていた。

「ねえ、ガレ。やっぱり、獣人つて凄いね。こんな風にいっぱい走  
ることが出来るなんて羨ましいよ」

「走れなくても普通に暮らせて行けるおまえたちニンゲンの方が、  
俺には羨ましいけどね、そういうものなのかなえ」

「うん。そういうものだよ。もつそろそろ降りるよ。足の痛みも少  
なくなつてきてるし」

だからべつに気にすることないって・・・と言いながらも、カリ  
スは降りると騒ぐのでガレはしゃがんで背中から地面に降ろしてや

つた。

すると足を着いて、最初こそぐらりとふらついてガレを慌てさせたが、踏みどじると、

「うん、大丈夫そう」

カリスはうんと頷いて見せた。

「意地つ張り」

「なに、なにか言った？」

「いいやなんにも」

登った斜面を下つて、平らな部分に差し掛かつてしばらく下草のなかを歩いて行くと、木立の向こうに細い道が見えるようになった。街の近くの街道とは違い石畳ではなく踏み固められているような農道のようなものだつたが、草の下に氣の根っこや石の凹凸が隠れている今より、歩きやすい」とはまちがいなし。カリスは嬉しそうに歩調を早めていた。

「あそこに出よう！」

「あ、待てよっ・・・」

このまま雑木林を歩いていた方が人がいないので安全だろうかと、考えていた最中のガレは驚いて引き止めようとしたが、気がつくのが遅れてカリスはもうどんどん先に行つてしまつていた。

「待てつたら！」

「嫌だよ、待たないよ、うわあっ」

甲高い悲鳴が上がつて、ガレの前でカリスがべたつと前方に倒れていた。

何度もだらうか。

カリスはよく転ぶ。またか、と苦笑しながら追いついて助け起こそうとしたガレに、カリスは別の者へと言葉だつた。

「あの、ごめんなさいつ。こんなところに寝ていらっしゃるなんて思いもしなかつたので・・・」

「カリス！？」

太い一本の木立の陰で見えなかつたが、そこには誰かがいるのだ

るつ。

顔色を変えたガレが駆け寄つて、カリスの身体をそいつから引き離すように抱き寄せた。

「ひでえなあ、踏んづけられてしまつた・・・」

低い男の声だった。

「まあ、いいけど。・・・で、そつちこそこんなとこに子どもが何してるんだ、お、一人連れか?」

「ガレ・・・この人の足をうつかり踏みつけてしまつたの・・・」

カリスは申し訳なさそうにガレに説明したが、カリスとガレに疑わしげな目を向けているこの男の方こそ、怪しいとガレは緊張させられていた。

黒い衣類の上下に身を固める男は髪も黒だった。

黒のなかでも腰に巻かれるベルトとブーツの濃い革色が濃淡なアクセントになつていてる男は三十ぐらいの歳に見えた。

カリスが横断して行こうとしていたその場所で一本の木の幹に身体を預け足を投げ出して眠つていたようで、その足を草の陰で見えなかつたカリスは踏みつけてバランスを崩し、転がつてしまつたといふことだった。

「気にすることない」

どう考へても、ほつりと眠つていたところこの男はガレにとつて胡散臭かつた。

カリスが気にする必要などないように思えたので、ガレは不機嫌に口にしてしまつたが、当然だつた。

当然のこと、不満の声だつた。

「おいこら。おめえが言つことじやあないだろつよ?」

ガレに文句を言いつつ、のそりと男は身体を起こして立ち上がつていた。

カリスの腕を持ったままでガレは一步退いていた。

男は長身だつた。

今まで地面に腰を下ろしてはいる男相手で見下ろしていたが、こ

れで立場が逆転した。

大柄な男はどんぐりの背比べなカリスとガレの前で抜きんでて大きかった。

分厚い身体をしていた。贅沢な生活でふよぶよの肉の肥満したものではない。

鎧のように厚みがあり胸板は筋肉が覆い、隆起した頑丈に厚いのだ。

バランスが良くてとても引き締まつて見える腹だつて腹筋で覆わ  
れて割れているのだろうと思つた。

この手の奴ならガレはよく知つていた。  
こんな感じの体付きをした者は、獣人にとってニーンゲンのなかで  
も最悪な部類だつたろう。

気がついた事態に、総毛立つガレの想像を裏付けるように男は地面に置いてあつただろう幅広の剣の柄を握つている。

「ガレ？」

「・・・駄目だ、逃げっ・・・」

カリスの腕を引つぱつて男から逃げようとしたのだ。  
でも、ガレよりも男の方が早かつた。

「ぎやっ」

ガレが潰れた悲鳴をあげていた。

掴まつて持ち上げられてしまつたのだ。

「は、離せっ――」

ガレは足をばたつかせて懸命に暴れていたが男はびくともしなかつた。

それでも必死になつてガレの足は男の身体を蹴りつけていたが  
「うおっ・・・元気がいいねえ」

男からはそんなとぼけたような言葉が口にされただけだった。  
さすがのカリスも事態に何かを感じたらしく笑顔を消していた。

「ガレを、離してください」

「ああ。離すが、でも悪いことをしたら謝る方が先でしょう？」

「謝る？・・・ガレは何もしていない」

「俺の足を踏んだ」

「踏んだのは僕だ！」

「ああ、そうだが。」こいつは踏む以上に可愛くないことを言つたぞ  
確かに、男にも聞こえるようにカリスに気にしなくていいと言つ  
たガレは可愛くはなかつただろうと、カリスは認めた。

「でも最初に悪かつたのは、僕だよ、『めんなさい』、おじさん。許  
して、ガレを離して」

祈るようなカリスの訴えだつた。

しかし男は、男らしく精悍な顔の口元を歪めただけだった。

「状況は悪化したな・・・」

「なぜ、どうして！」

「おまえも失言を犯した」

「そんなことないっ！」

カリスは力一杯否定していた。

「いや、あつた」

ある、ないと繰り返す微妙なぬい空氣の口論になつてゆき、吊  
り上げられたままになつてている本人のガレは平常心を取り戻してい  
つた。

「・・・『めんなさい』、おにいさん。カリスの暴言もまとめて俺が  
謝るから・・・『めんなさい』。どうか、降ろしてください・・・」

「わかれればいい」

すとんと地面に戻されたガレに飛びつくようにカリスはくつつい  
たがその頃には男の大きめな唇には何事もなかつたような笑顔が刻  
まれていた。

「・・・『おにいさん』・・・？」

確認するように咳いたカリスに、愛想の良い笑顔で

「じゃないと、おかしいだろ？？」

おじさん、じゃないか。どこも自分は間違つていないじゃないか  
とは、カリスの心の声だったが、賢明に口に出すことはしなかつた。

ガレが小さく、首を横に振つて言うなと合図を送つてていたから従つたけれど、理不尽な不正を強要されたカリスの心はそれからしばらく曇つてしまつた。

「ゾラ・エルド」

聞いてはいなかつたけれど、自分から名乗つた男は、気にせずゾラと呼び捨てでいいぞと言つた。

そのあと、二人に名前を聞いた。

仕方なく近くのいたカリスから、

「カリス・・・」

「ガレ」

続いて、ガレも同じようにぼそつと言つた。

「おい。俺がフルネームで言つているのにおまえたちは、それかい」大仰で非難の色に敏感にカリスが唇を尖らせていた。

「知らない人に不用意に名前を言つたらいけないんだよ！」

家出の最中で、こつそり家を出てきたというカリスは家名を明かす名字を告げたくないのだと言うことをガレも気がついている。

ガレも、“カリス”としか聞いていないのだ。

でもそれで十分で、困つたこともなかつたのだけれど、カリスがこつそりとガレの知らないところで抱えているものがはじめて、少し気になつたときだつた。

高そうな衣服を着ているカリス。しゃべり方も上品でお金持ちなだけでなく貴族のように階級が高いのだと感じている。

だけど、こんな田舎で、告げただけでああ、とわかるほどの家柄なのだろうか、それはどんなものだというのか？

目を背けるように生きてきたガレが己の外の世界についての疑問を感じてしまつて横で、話は進んでいる。

「なんでこんなとこに、一人でいるんだい？」

「秘密だよ！ そういうことも気安く他人には話してはいけないこと

なんだよ！」

カリスが、ゾラを良く思つていいことを隠さない態度で、棘を持つて、ガレがそれまでに知つたカリスとは別人のような、ある意味さらに子どもっぽく受け答えをしていた。

「可愛いくない餓鬼だな」

ついにはそんなことをゾラに言わせてしまつっていたが、カリスは平気なようだつた。

「それでいいの。可愛いと攫われる可能性が高いから可愛いくない方が良いんだよ！」

そのうちには穏やかそうにしゃべつてゐる男も堪忍袋の緒を切つてしまわないかと不安になつてきたのでガレが口を挟んでいた。  
「俺が・・・おばさんのところを頼つて行こうとしている。そうしたらカリスが一人じゃ危ないから一緒に付いてきてくれるつて・・・

」

嘘だつた。

「おまえの親は？」

「死んだ。俺は一人だからおばさんのところへ」  
ガレは普通にしゃべれた気がして安心した。

「じゃあ、おまえの親は？」

今度は再びカリスへの質問だつた。

「一人いる。けど僕は愛されていいるからね。好きなことをして良いつて送り出してくれたよ」

「旅着も荷物も無しですか？」

「・・・ガレが、優しくて僕の分少し、持つてくれてるよ。身軽

が一番なの！！」

カリスの言葉には幾分無理がある。本当に室内着のような豪華な上着と、旅支度も調える暇がなかつたと宝石を見てくれたカリスは、ポケットの中に売ればお金になるという宝石を持つているけれど手元には乾し肉一枚持たないので。

旅慣れてそうな清潔に保たれているが草臥れた鞄や衣類のゾラに

納得できるはずがないとガレは肝を冷やす心地だったが、ゾラはあつさりとそれ以上の追求はしなかつた。

「ふうん。最近の教育は俺達との頃とは違うんだねえ」「

感心するような揶揄するような言葉に、「やつぱり、おじさん発言」と小さく機嫌の悪いカリスは口に出したが幸い、ゾラまでは届かなかつたようだ。

「で、ならそのおばさんはどこにいるんだ?」

ガレが尋ねられていた。

言うことないのだと、すげすげと入り込んでくるゾラの態度に怒つてゐるカリスが主張しているけれど、なんとか丸く收めたいと思つてゐるガレは進路方向にある大きな街の名前を思いついていた。「ザザントーラーに、いるつて聞いている。昔の話だからよくわからないけど・・・

「ザザントーラーイ。まだ結構、遠いぜ」

「うん。けどなんとか・・・行けると思うし・・・」

「まあ。それぞれ事情があるからな、今が踏ん張りどころだと思ってがんばれよ」

頷いたガレは、これで上手くいったと思ったが、また駄目だった。また。

数日のうちにこれで一度目だ。

「暇だからついて行つてやる」

「えつ?」

性格はそれぞれ違つてゐる二人が同じ顔になつて、大きく見開いた目でゾラを見上げる。

「だから、一人じゃ心許ないだろう?今は仕事も区切りになつて、フリーだから俺が護衛に付いてやるぞ」

「お金、無いから無理だよ!」

「ああ、心配するな。奉仕の精神だ」

「要らないつ!」

硬直してゐるガレの横でカリスが一人果敢に応戦してゐた。

「じゃあ、山賊に襲われてもおまえは無視しておいてやる。助けるのはこっちの坊主だけな」

「ガレつ、なんとか言つてよつー！」

せつぱ詰まつた表情に無言のガレをカリスは搔さぶつたが、これ以上上手い言葉が自分に見つけられないことをガレは語っていた。

ガレは、カリスに言いくるめられてしまうのだ。

そのカリスが太刀打ちできない相手なのだったら。

「ねえ、ガレつ！」

それでもなんとか

「結構です・・・遠慮します・・・俺達、一人でうまく出来ます、から・・・」

「子どもは遠慮なぞしなくていい。安心してどんと任せとおけ！」

じゃあ、とゾラは。

さつさと行くぞとガレとカリスに背を向けて歩きだした。

「何してるんだ、置いて行くぞ」

カリスが走つていた方向である。

そつちの先にザザントーライがある。

それを無視して背後にある街を告げても、信じられないだりうと

本当の方向にある適当な街をガレは口に出したのだ。

嘘の中には本当を織り込むことに信憑性が上がると言つではないか。

でもこれは墓穴じゃないとガレは思った。

そう言つてしまつたために、ゾラの背中を追つて、ガレに選択肢がなくなつてしまつているのだから。

ぶつぶつ、聞こえないようにでも聞こえるようゴリラの文句を言い続けるカリスだったが、ガレは少し違つた。

カリスは太刀打ちできなことが悔しくてたまらずに不平を收められないのだけど、ガレは無理なので、諦めた気持ちで大人しく歩

いていた。

でも、やはり溜息が出てきてしまつ。

「おい、どうした?」

カリスの文句は聞こえていないように無視しているゾラが、ガレの様子に気づいて振り返つたきた。

「疲れたか、なら休むか?」

「疲れていない」

「そうか。じゃあそつちの元気な坊主は?」

まだ歩けるかと、優しげな笑顔のゾラを嫌なにたにた笑いだと腹を立てるカリスが

「全然平氣。まだ走れるよ!」

「おう、そうかい、そりやあ良かつた、意地つ張り君!」

大きな剣を携えて、ハンターのような空氣を持つ男でとても警戒していたガレだったが、危険な氣配は薄れていた。出で立ちはそういつた類のものだつたけれど、ゾラは口は悪いもののあまり警戒しなくても良い相手なのではと考えるようになつっていた。

大人相手に、驚くような発言をするカリスの横でガレはビクついたものだが、本人のゾラの方は気にならないらしく平氣で笑つている。そこが余計にカリスの瘤に障つてゐるのだろうけど、この調子ならそれほどこの先も険悪なことにならないだらうと少し安心してガレは聞いていられるようになつていた。

「意地つ張りじゃない。ほんとにもだ走れるんだから!」

「はいはい。じゃあがんばつて歩いてくれ。あとでよくやつたよと頭撫でてやるから」

「子ども扱いするな!」

「子どもだろ?」

「でもつ、僕だけ! ガレにはぜんぜん言わないじゃないか!」

「そりゃあ、おまえの方が面白そだからな!」

「差別だつ!」

「おまえの態度も差別してるだらう?」

顔を怒りに紅潮させて立ち止まってしまったカリスにすぐに気が付いて涼しい顔で振り返ったゾラが切り返していた。

「差別？」

「ああ。ガレにゃあ、穏やかにしゃべるが俺だともう親の敵なんかやつたか？おまえの母ちゃんを、俺は殺して覚えはないけどね」

巫山戯た物言いで、存外に物騒なことをゾラは言った。

言葉の流れで実際に死や生が関係あるとはガレは思わなかつたが、その先の言葉を見つけられなくなつたカリスはただ息を呑んでいた。カリスもわかっていた。

ハつ当たりしているのだ。

ゾラに悪いところはないけれど、ただ自分とガレの二人という予定の中に入ってきてしまつた邪魔者だった。しかも大人。見下ろすような態度がカリスの父親と少し似ていると感じてしまつたからむかむかと腹が立つて、平静ではいられなかつた。

もしかしてと、カリスも一つの不安をゾラに対して抱いたのだから。

ハンターではないかとガレは思つたけれど、カリスは父親の指示で自分を連れ戻しにやつてきている手の者かと、だつた。

まだなんとも言えないけれど、でも無理矢理連れ戻される様子はなくてそこにはホッとしていたけれど腹立たしい。

ガレと二人旅が良かつたのに。

大人で剣も扱えそうなゾラがいれば危険度が減るかもしれないけれど、ガレはゾラを受け入れてしまつたように反対していないところも腹立たしい。

ガレにとつて、自分がだけだつたのに入り込んでしまつたゾラが。ゾラは悪くなくても。

「おい。やつぱり歩けなくなつたか？」

ズキズキと痛んでいたけれど、まだ歩ける。

「強がりをごめんなさいと、素直に謝つたら許してやるぞ？おんぶ

してやるわ」

「全然、平気だよ。歩けるもの一絶対にそんなことしてくれなくていいつー！」

だけど口早に。

「ごめん。僕が間違っていた、かもしだれない……」

先を黙々と歩いて行くガレの位置まで走って、追い越しざまに素っ気ない声でカリスはゾラに伝えた。

「ガレ、一人どんどん進んでいかないでよ。僕を置いて行くつもりなの？」

「・・・ああ。」めん。ちょっとと考え事していた・・・」

「もうつ、ガレったら酷いよ！ 考え事していたら置いてっちゃうわけなの？」

「そういうわけじゃないよ」

「あたりまえだよ、そんなの酷いよ！」

聞こえなかつたかもしれないと思つたが、ちゃんとゾラに聞いたのだろう。

「謝りビリルが違つんじやないの？ ビリせならそつちにしておいた方が楽だろうに、まつたく」

ふうと、後ろからゾラの大きなため息も聞こえてきたが、打ち消すような明るい陽気なカリスの声が鳥の声と木の葉の風唄の林に響いていた。

「ほそこそ藪の中歩かなくても、俺がついていりやあ山賊も物取りも大丈夫だろ？」

と言うゾラが道連れにいる。

「他に山ん中を行かなければならぬ理由があるのか？」

不思議そうなゾラの一言に、一人とも口を開けざして道を堂々と歩いていた。

カリスにとつて草や木の根が這つてている林の中や筋肌よりもとて

も歩きやすくて歓迎だったが、ガレはそのために緊張を隠せないでいる。

田舎の道は街の付近のように石畳でもなく、道と言つてもあたりに人の姿も気配もない鄙びたものだったが、いつ煙帰りの荷馬車が藪や山の間から出てくるかもしけないので気がかりだった。

ガレはオードルから貰つた、禿げた旦那の物だったという帽子を被つてフードを脱いでいた。

慣れない帽子なことあって、いつものようにフードを被つてしまつた方が心が安心できるのだろうけれど、ゾラがいるためにこれもできずにいた。

道に出て、脱いでいたフードを田深に被つてみせたら、何かがあるのだとわざわざ自分で教えていよいよつなのだった。

今は笑っているゾラ。

だけどガレのしつぽと耳を知ったとき、どんな風に変わってしまったややは警戒は消えなかつた。

剣を持っている。

がつしりと背も高く大柄で身体を鍛えているハンターのよつなタイプだつた。

だけど、比較的穏やかそう。

自分にも優しい。と言つよりただ普通。お金持ちそうな格好をしていて、いろいろと面白そうなカリスを苛めて遊んでいるので、ガレには特別な感心もないという雰囲気だった。ガレにはそこまで子ども扱いをしてこなかつたけれど、ガレより少し背は小さいもののそれほど大差はないはずのカリスをしつこくからかつている。

大人しくて女の子のような奴だと思つていたけれど結構、激しい性格をしていて気はあまり長くない。カリスはゾラに、今にも叫んで憤慨を起こしそうな危険な空氣を纏わせるほどにもいつたけれど、少しずつ落ち着いてきていくようで、ガレはその点だけは安心していた。

でも、ガレはずつとはらはら、じどおじだと気がついた。

それはカリスに出会ってからだつた。

カリスに出会って、カリスがいたからこそ、オーデルの居間に招かれることになつてゐた。自分一人なら冷たい雨の中の方がマシだとニンゲンの臭いのある納屋に泊まることはしなかつただろうし、その結果に泣かされた悲しいこともなかつただらうけれど、ならこうして帽子を貰うこともなかつたはずだ。

カリスの言葉を聞いてからガレは、もうそれほどオーデルを悪く思う気持ちはなくなつていたのだ。

オーデルは温かいスープをくれたのだ。

カリスが言つたとおり、最初から、やうではなかつたとしても早い時点から自分に気がついていたようにガレにも思えるのだ。

知つていただけど、普通にしていた。

オーデルは平氣な感じだつた。

最後には平氣すぎて、大事なことをうつかりと忘れてしまつたぐらいで。

食べたご飯のことを忘れてしまつことのように罪も惡意もなかつたのかもしないと。

カリスに出会つて、自分のペースを失つてしまつて乱された中でドキドキと精神をすり減らしながら教えられたことは、大きいとガレは認めていた。

だから、このゾラと一緒に今いることも、どういう結果になるかわからぬけどもう少し逃げずにじよつと思つてゐた。

そんなことを一人考えるガレの横を一台の荷馬車が通り過ぎて行くこともあつた。

ゴトゴトという車輪の音が挽きつぶされそつに大きく中年の夫婦が乗つた馬車が近づいてきて、一人は自分を見ている気がした。

もうすぐ気が付いて鍬や斧を振りかざすかもしれないと腕も足も震えそうになつたときだ。

「やあ、ご主人。今日は一日いい天氣だつたですねえ。仕事ははかどられましたか？」

ゾラの明るい声に、すると同じような脳天気な声だつた。

「昨日の雨が嘘みたいで大助かりでしたがね、雨が多いと雑草の伸びも早くて追われますわい」

「でも、一雨降つて欲しい頃だつたんですけどね」

ほほほつと夫より恰幅の良い夫人が愛想よく続いた。

「しかし二人の子ども連れじやあ楽ではないですね」

「いえいえ。生意氣で困りもんですがそれが子どもの特権でしょうねえ」

やつぱりおやじトークだと感じるカリスと、ただ目を見張つているガレだった。

すると、本当に夫人が自分を見ていることに気が付いた。

「どうぞ、お気を付けてくださいね。バイバイ、坊やたち」  
咄嗟に言葉が出なかつたガレに向かつて、少し小声になつて「お父さんをあまり苛めないのよ」と笑つた。

ガレに言つたのは、同じ黒髪だから似てゐるせいなのだろう。

「お父さんだつて」

小声で言つて、ふつと吹き出したカリスだけなく、ガレも一緒に夫人に手を振り返して馬車の一人連れを見送ることをしていた。  
小さく遠ざかつて行く馬車を振り切れず、いつまでも止まつて見ていたガレにゾラが言つ。

「おい、行くぞ」

頷くと、再びてくてくと歩き出したのだけど、ガレは自分の中味が空っぽになつてゐる感じがしていた。

空っぽといふと、悪いものに聞こえるかもしだれど、それは嫌な気分ではなかつた。詰まつていた重い物が消えて、軽くすっぽと空いてゐる。

空になつてゐるせいか、力もあまり籠もらなくて今は少し前に一日中走り回つたときのように全力では走れそつになかつたけれど。ガレは逃げない。ゾラから。

現実から、・・・だろうか。

ああ、もつとも。簡単に逃げると言つても、ガレほどには走れないカリスと二人でこの男の前から無事、追いつかれることなく逃げおおすことはとても大変そのことで、必要がないならなるだけ避けたいけれど——などと考えていたら急に可笑しくなつていた。

「ガレ、なに、何が面白いの？」

目敏く気が付いてカリスに聞かれて、べつに、と答えていた。

だつて本当に、説明するほど面白いことなどなかつたのだから他に言えなかつたのだ。

だけどなぜだかとても可笑しくて笑い続けていると、カリスは自分に教えられないことを僻んだように「変なの！」と不満そうに言うものだから、余計にガレの笑いが止まらなくなつたのだ。

タゞ飯は豪華になつていた。

オードルがこつそりガレの鞄に入れてくれた食料があつた。

ハムを挟んだパンとパンケーキと、果物と茹でた卵だつた。そして、その上、ゾラが気前よく、自分で持つっていた物をカリスとガレにも分けてくれたからだ。二人のオードルがくれた物はちゃんとゾラにも分けるつもりでいたのだけれど、それだけでは足りんよなあと言つたゾラは慣れた手つきでできぱきと準備を始めた。

しかも荷物から小さな鍋も食料と一緒に取り出したゾラは、小川で水を汲んできて塩や香辛料を入れて乾燥物を煮込んで温かく水分のある食事に戻してくれて、カリスもこれには大喜びだつた。

文句は言わていなかつたが、ガレがカリスに分けていた、ただの乾し肉の食事には不服があつたことがよくわかる出来事だつた。

こういう調理方法があることはガレも知つていたけど、鍋を持つていなかつたし実行するのは面倒だつたのだ。

だつたら、はつきりそう言つてくれればいいのに、と気分の悪いガレの隣で、美味しいとゞ機嫌にはしゃいでいたカリスだつたが、

しばらくするうちに静かになっていた。見ると眠ってしまったのだ。身体の上に自分の持ち物から毛布を出して広げているとゾラが言った。

「おまえも寝ていいぞ。しばらく俺が夜番しているから」

道から少し離れて焚き火を起こして、野営だった。

晴れた青空の一日と入れ替わった夜の空は、満点の星が輝いていた。

カリスがいるせいか、不思議にガレも半田でゾラにすつかり慣れてしまつて緊張も薄れていて、昔からの知り合いで久しぶりに会つたような気分になつていた。

だから、つい愚痴になつていた。

ゾラよりもつと長い時間一緒にいるけれど、カリスには言えない愚痴だつた。

「こいつ・・・すぐ寝る。食べたあと、気が付いたときにはもう寝てるんだ」

昼間は動いているから、夜だとゆっくり話が出来ると思つたのに。カリスの方はそうは思つていなか朝までぐっすりで、ガレはつまらないのだ。

「そりやあ、しかたないだろ？」

笑つて同意してくれると思つたのに、ゾラの返事はガレの予想とは違つてしまつた。

ゾラは言つ。

「そんな顔せずに、考えてみ。クタクタだらうよ」

「くたくた？」

繰り返した直後に、はつとしてガレは血相を変えた。

「そんな、無理させていない。こいつに合わせて歩いている、俺一人だつたらもつとつ――」

「ん、なこと力説しても意味ないだろ？…おまえはそう思つていなくて、こっちでは現にこうのことなんだから」

ゾラが木の枝を火にくべながら、顎で芋虫のようになくなつて眠

つているカリスを示していた。

眠っているカリスに配慮して特別に声をひそめてはいない。

それでも目を覚ましそうにない様子だった。

長い睫の目は閉じられて白い頬に焚き火の陰が踊っている。頬にこぼれるさらさらの金色の髪。

黙っているとカリスは街のお店のガラスの奥に飾られている高そうな人形のようだった。意味なく高いそれは自分には一生、関係ない物だと目にしては鼻を鳴らしていた。

急に気になつて、手を伸ばして指で頬を触つてみると途端に消えて無くなることなく、肉の感触にガレの指先はカリスの頬にめり込んだ。

満足して引っ込んだガレは、焚き火を挟んだもう一人の道連れゾラと色の目と目が合つた。

居心地の悪い沈黙が広がつていった。

すると明るくからかうようにゾラが言った。

「なんだ、気が付かなかつたか。・・・どう見ても、こいつこいつ生活したことなさそうに見えねえか?」

「そう、だけど。・・・だけど、このくらい・・・単にこいつ、寝るのが好きなだけかもしれないし・・・」

「まあ、そういうこともあるかもな」

焦つたガレの言い訳だったが、ゾラはあつさりと納得したように頷いて、それきりこの話は終わってしまった。

「おまえもさつさと寝ろ。寝ておけるときに寝ておくもんだぞ」  
ゾラに急かされて、ガレも横になつていた。

ガレはあまり疲れてなどいなかつた。自分一人ならこの十倍も移動したことがあつただろう。だけどカリスがいるから最近はゆつくりで、これぐらいなのだ。

だからこのくらいなら、カリスだつてきつと大丈夫なはずではないか。

ゾラのせいで、ガレの心に一本の小さな棘が残つてしまつた。

摘めないくらい細いのに、それはちくちくとじばらく痛かった。

晴れた朝のように明るく元気なカリスに、やはりゾラの考えすぎだとガレは思った。

昨日一日しか、ゾラは自分たちのことを知らない。

だけど、ガレはカリスのことを、その三倍も一緒にいるのだから。大人であろうと、ゾラの言うことがすべて正しいのだと思う必要などないのだと気がついたのだ。

だけど、すっきり心が晴れないのはまだガレもカリスのことをよく知らないからだろう。

気にはなった。

でも過去などどうでもいいことかもしない。そう言つではないか。

家出をするほどの理由は、他人に言いたくないことに決まっているはずだ。

だから、拘らないで知らん顔をしている方が男らしいと氣にはなつたけど聞けずにいたことだった。

午前中、意識してカリスに歩調に合わせてゆっくりと歩いた。のんびりした道中になり、天気も良かつた。

ゾラは相変わらずカリスをからかってしゃべっていたがガレは聞き流して、その間に荷馬車と徒步の旅行者にもすれ違つた。

ゾラが言葉を交わして、カリスとガレも後ろで軽く頭を下げて挨拶をした。

そうするうちに太陽は天辺に昇り、お昼ご飯と休憩になった。

お昼は乾燥物を簡単に食べる。

そのあとは荷物はゾラのところに置いて、カリスとガレは近くある湖を見に行くことにした。

「あまり遠くに行くなよ。何かあつたらすぐ大声を出せよ」

ゾラに見送られて、木立の向こうできらきらと光る水面がずっと

気になつていたのだというカリスの希望だつた。湖に着くとカリスの歓声だつた。

「きれいな水だね。冷たい！」

ガレにはそれほど珍しい物でもなく、岸でしゃがみ込んで水の中に手を突つ込んでいるカリスを後ろから眺めていたのだが、このとき意を決した。

「なあ。おまえって、ほんとに家に戻らなくていいのか？」  
「ガレ。それ、なに？」

カリスの返事は、背中を向けたままだつた。

「だつてさ、家出つて言つてたけど・・・」

「ゾラが来たから、僕が邪魔になつてきたの？」

普段の声だつたけれど、普段ならカリスはこっちを振り向いていふと思つたからガレは焦る。

「そうじやないよつ、だけど、気になつたんだよ、家出の理由、なんにも俺聞いてないじゃん！」

ぱしゃぱしゃ水をかき混ぜている音がしていたが、返事が返つてこない。

「おい、カリス！」

「そんな話聞いてもつまらないよ」

涼しげな声だつた。だからガレの声は逆に熱くなつてくるのだ。

「気になるんだつ、俺には秘密で、話せなことなのかよー！」

勢いがよかつた水音がぴたつと止まつた。

ガレにとつて、カリスはどこか怖いところがあつた。

小さくて女の子のようで、明るくておしゃべりだつたけれど、こんな風にいつたん空気が変わつてしまつと、どうしていいのかわからなくなつてしまつ。

怒らせたのだろうか。

謝つた方がいいのだろうか。

べつに謝るようなことなどしていなければ、そうすべきだらうか。

だけど、ガレは謝らなくても済んだ。

カリスがガレを振り返つて立ち上がりっていた。笑顔だった。

怒つてはいないうやうだった、ガレには、だ。

「あのね。僕の家族はね。みんな僕を嫌いなの。みんな、僕がいいと良いと思つていいの」

そのあたりの話なら一度聞いていた。

「そんなこと、ほんとにおまえ、言われたのかよ」

ガレには信じられなかつたから、思い過ごしじゃないかと思つたのだ。

カリスは普通の人間で、しつぽも生えていないし、追われる必要もない。ガレとは比べものにならないほどいい物を着ている。

カリスが言つているほどの苦しみなどあるように思えなかつたのだから、甘えてるいるのではないかと——。

「言わなくてわかるよ」

「じゃあ実際に、言われていないんじやんかつ」

「言われなくてもわかるよ」

「なんだよ、それ」

「事実だもの！」

「はあ？」

もう少しで馬鹿みたいだと言つたそになつていた。  
でも言わなくてよかつたと思った。

僕もみんな嫌いだからいいの、と頑なな前置きをした後でカリスは言つたのだ。

「みんな、ずっとグルになつて僕をだましていたんだ」

欺すのは悪いこと。

カリス一人除け者にされて欺されていたのなら、カリスが家族を嫌いになつて家出をしても当然かもしれないと思つたかもしない。話してくれずひた隠しに隠し続けるカリスの態度に腹を立てていなかつたら。

そして、続きを聞かなかつたなら、ガレは単純にそう決めた

かもしだい。

「お母さまは、病弱でもなんでもなかつたんだ！」

でもそのあとカリスから飛びだしてしまつた内容は、簡単ではなかつた。

「だけど僕を産んで死んでしまつたんだよ」

カリスは激しく怒つていた。

「その日に、急に。僕を産んすぐ！僕が一歳の時まで生きていたなんて嘘だつたんだ。僕を産んで死んだんだよつ・・・それなのに、みんなして欺していたつ・・・」

カリスの声は最後には震えて聞き取れないほどに押しつぶされていた。

そうして再び繰り返されたのだ。

みんな僕を欺していた。

大きめな瞳はそのとき、ガレを見ていなかつただろう。瞬きもなくただ見開かれて虚空を見つめていた。

「・・・お母さんは、僕が生まれてすぐに死んだのに・・・欺した、僕を。欺すなんて僕を嫌つている証拠だ・・・」

小さなつぶやき。

虚空にはガレには目に出来ない痛点があるのだ。

「そんな、・・・それは違つ

「違わないよ！」

「違うつて」

カリスの言つていることは間違つていいのだと、なんとか否定したいガレにカリスはさらに強く断言していた。

「そんなの嘘だよ！心中ではちゃんとそう思つてゐるくせに、みんなそう言つんだ。嘘ばっかりだ。そんなはずないよ、みんな僕のこと嫌いなのに、愛してゐつてお母さまだつて言つたわけじやないのに、みんな、愛しているつて嘘を言つつ・・・だいつ嫌いだつ！」  
気になつていたカリスの家出の理由を聞きはじめたのは自分、そして今度はガレは、はぐらかされずにちゃんと教えられた。望み通

りで喜んでいいはずだつたのに。

だけど今、ガレは聞かなければよかつたと思つていた。

叫んだ後、カリスは浅い息を繰り返していた。

カリスは苦しんでいるんだと知つたけれど、じゃあ自分はどうしてやればいいか、ガレにはわからなくてただ突つ立つてゐるしかない。

違うと言つても、聞き入れられない。その他にどう言つていいのか思いつかなかつたから。

笑顔が消えたけれどカリスは泣いてはいなかつた。  
でもその代わり、ガレが泣きそうだつた。

しかし、そんなガレの前で当の本人のカリスはにこつと笑つたのだ。

「だから、聞いてもつまらない話だつて言つたのに。・・・でも大丈夫だよ。ガレ、そんな顔しないでよ、僕は平氣なんだもの。嫌われていても僕もみんなを嫌いだからおあいこだものね！」

ガレには返事が出来なかつた。

昼下がりの日差しは明るくて温かだつた。  
光を弾いてカリスの髪は優しくきらきらと輝いていた。

## ガレとカリスと、ソラの物語 4

カリスの小さな頃で、具体的に聞くと生まれて一年ぐらい。カリスが一歳になつた頃にカリスのお母さんは神様のところにゆかれたのだと、カリスは家族から聞いていた。

小さすぎてカリスには、母の記憶は残っていないけれど、「わたしの赤ちゃん」といつもカリスを胸に抱いて話しかけていたと、父は話してくれた。

それなのに自分はそのひとことをなにも覚えていなくて悲しかった。なんとか少しでも顔を、声を思い出せないかと父の部屋の肖像を見つめて過ごしていたものだ。

自分とは違つて二人の少し年の離れた姉たちは、よく母のことを覚えているようだつた。カリスが聞くと、いつも弟のために繰り返し話をしてくれた。

「僕もいっしょに遊びに行つたことがあるの？」

「ええ。あるわ。四人でピクニックに行つたことがあるのよ」

「あなたはお母さまのお膝の上だつたけれど、楽しそうに笑つていたわ。その様子にお母さまも楽しそうになされて、お歌を歌つてくださつたわ」

「そうそう。みんなで歌を歌つたわね」

「嘘！僕は一歳だから歌えないよ」

口を尖らせるカリスに

「あら」

小さい姉が言つて、大きい姉を振り返つた。

「お姉さま、カリスつたらあんなこと言つてる」

すると本を読んでいた姉が顔を上げた。

「あなた、知らないのね。言葉を覚えていないうちの赤ちゃんは、わたし達とは違う赤ちゃんの言葉を口にして歌つのよ」

「・・・へえ。そつなの？」

卑屈になりかけたところだつたけれどカリスは知らなかつた新事実にぱつと明るくなつた。

「・・・僕、ぜんぜん知らなかつたよ。僕は聞いていただけかと思つた。だけど赤ちゃんでもお歌を歌えるんだ。だつたら、僕もお母さまと一緒にお歌を歌つていたんだ！」

残念だなあ。そんな素敵なことさえ覚えていないなんて。思い出せたらいいのに。

壁の大きな絵の優しそうな女のは、姉たちにそれぞれ似ていた。そしてカリスにも似ていると思つた。

みんなもとても似ていると言つのを聞いて、とても嬉しかつたのだ。

「お母さまは、あなたのが大好きだつたのよ」

「本当に?」

「信じないの? 決まつてるでしょ」

「わたし達、二人女の子でしょ。だから男の子のあなたが生まれて、お父さまもお母さまもとっても嬉しかつたのよ」

「わたし達、嫉妬するぐらいね。ほら、わかるでしょ」

うふふと、幼いカリスはそう言われるのが一番好きだつた。

お姉さま一人がいて、そのあとに自分。

女の子、女の子で、きっと、次は男の子がいいなと思つたはずだ。そうしてカリスは生まれた。

期待通りの男の子だつた。

「小さなあなたをお母さまはぎゅうぎゅうお胸に抱きしめていらっしゃ」

たわ

「あなたは生まれて、お母さまを独占したの。あなたのベッドはお母さまだつたの。ずっと一緒にいて、短い間だつたけれどね、その間にあなたはわたし達と同じぐらい深い愛を『えられたのよ』

「そうだよ。カリス」

優しい父の声に、カリスは振り向くと

「私はリリーナを愛しているよ。でも同じぐらいおまえを愛してい

る。リリーナもおまえを愛していたんだよ

「うん」

「いい子だ」

大きな手がカリスの頭を撫でてくれた。こんな風に母も自分を膝に抱いて慈しんでくれていたのだろうと思った。

「今、お母さんがいなくて寂しいかもしないけれど、悲しんではいけないよ。そんなことをすれば神様の元で、おまえのお母さんは一緒になつて悲しい気分になつていなくてはいけない。なぜって、ずっとおまえの様子を見ているのだから」

「わかつてゐる。大丈夫だよ。僕、あまり寂しくないもの。僕は生まれてお母さまを独占したんだもの。僕より、お父さまやお姉さまの方が寂しい気分だね！」

すると父も姉も、一瞬表情を消していた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

笑顔が戻つっていたがどこか変な笑顔で、おかしいなとカリスは思つたのだ。

そのわけはそれからしばらくして知ることになった。

すべては作り話だつたのだ。

カリスが聞いていた嬉しかつた話は全部嘘。

父は、姉たちにもそう言つように言いくるめていたのだろう。父に従つて、姉たちは笑顔で、本当のことのように話をしてくれていた。

自分には記憶はないけれど母と遊んだ楽しい話を聞いた後には、記憶にない母親と遊んでいる光景の夢を見たことも何度かあつた。

母親の顔は肖像画の顔。

夢でカリスの頭を撫でながら、歌つてくれる歌も姉たちが歌つていた歌だつたのだと今ならわかつた。

そして、ぎゅうぎゅうと抱きしめる胸の感触は、夢の中でもまさに夢見心地の感触は、ただのカリスの想像。

幻想だった。

父よりも柔らかくて、姉たちよりも広い居心地のよい、この世に生まれ落ちたカリスが独占した優しいベッドは、嘘だったのだから。「カリスさまは、リリーナさまに抱きしめられたことはないんだよ。おかわいそうにねえ」

前日、歴史の講師の先生と喧嘩をしてしまったから会いたくなくて、朝からずっと隠れていたのだ。

するとじばらくして、カリスの姿が見えないと気が付いた屋敷の者たちがばたばたと慌ただしく探し始めた。

でもカリスはじっと隠れていた。その日は午後の歴史の勉強の時間までずっと隠れ通すつもりでいたのだから。

一番狭い応接間のソファーの陰だった。そこが一番安全だと考えていた。

何度も人が出入りして搜していくたけれど、カリスの思つた通り見つけられなかつたが、そのとき聞いた。

カリスは隠れていて、聞いてしまつたのだ。

古参の使用者の女で、カリスもよく話をして知つているハンナという者だった。

でもカリスと話をするときは別人のような顔と声だつただろう。「・・・だから、おまえも気をつけるんだよ。余所で話を聞いてもそんな風に口にしてはいけないからね」

一緒にカリスを探していたのは、新しく屋敷にやつってきた若い女で、カリスはまだ話をしたことはなかつた。

「だつてどうしても聞いていた話とくいちがつてくるから気になつて気になつてしまふがなかつたから・・・」

そうだつたのか、と若い女は納得してもその後、難しい顔になつていた。

カリスは首を傾げていた。どうやら自分の話をされているのだけど、カリスは納得がゆかなかつたから。

「でも嘘は嘘だわ。よくないと思うな。そう言ひ隠し事つて無理よ。

いつかは坊っちゃんにだつてバレてしまうと思つし

「ええ・・・。そうだわね、子どもはああ見えて敏感なもんだからねえ。案外、もう気が付いていらつしやるかも知れないけれど・・・でもそれは私たちが悩むことではないでしょ？」

「それって、どういう話！？」

カリスは自分から飛びだしていた。

「カリスさまっ・・・」

捜していただはずのカリスの姿に、二人の女たちは顔色を無くしていました。

それほど重大なことなのだとカリスは思つた。

ハンナは、もう自分は知つているかも知れないと言つたことなのにカリスは何も気が付いていなかつた。だから聞いていてもよくわからなかつたから。

「いつたい、なにの話をしているの？僕は、なにも気が付いていいよ？くわしく教えてよ、お母さまが僕を抱きしめていないつてどうして！？」

二人にもつと聞きたくてせがんでいたけど話してくれなかつた。でも諦めずに追いかけていたら、執事のブラウニーがやつてきて二人をカリスの前から連れて行つてしまつた。

父が戻つていらつしやるのを待つようと、ブラウニーは厳しい命令じやなく、丁寧にお願いされたからカリスは夜まで待つていた。歴史の先生とは隠れてはいなくても、この日会わずにすんだ。

カリスはひたすら、父が帰つてくるのを屋敷の入り口に座つて待つていたのだ。

誰も何も、教えてくれないから。

姉たちもだ。

きつと知つているのだと思つた。なぜなら聞くと揃つて難しい顔をしたのだから。カリスの知らなかつたことだけど、カリス以外の者はみんな知つていたのだ。

「お母さまは僕を抱きしめていないの？」

その答えは、長い長い言い訳があり、はつきりとしない聞いていない内容も続いてわかりにくくされていたけど、簡単になると『はい』だった。

隠れていてこいつそり聞いてしまった話は本当で、カリスが母の膝の上で一緒に歌を歌つたというものが嘘だったのだ。

なかなか思うような話が聞けなくて腹立たしいときに、口火を切ってくれたのは皮肉にも母だった。

カリスは一人で屋敷を抜け出してお墓に行つてみると、墓碑に亡くなられた日付が記してあつたのだ。

それはカリスが生まれた日だった。

難産だったという。

ようやく産みの苦しみから解放されて、母は元気な産声を聞いた微笑んでいた———というけど、それも嘘かもしれない。カリスは母親の顔さえ覚えていないのだから。

男の子だと立ち会つた屋敷の主治医は喜びの声をあげた。父に報告が走る。

そのなかで母は目を閉じたのだ。

そのまま一度と瞳は開かれなかつた。

それが、カリスが用心深く自分でも動いて調べて、突き止めた本当の話だった。

「人を欺すのはいけないことだつて僕に言つていたのに、自分たちは僕をずっと嘘を言つて欺し続けていたんだよ」

ほんとに酷いよね、とカリスは笑つていた。

「ガレもそう思うでしょ。最低だよね。お母さまは僕が生まれたときには死んでしまつたのに、嘘を言つて。僕を抱きしめたんだとか、

『愛している』とか言つたとか全部、嘘なの」

くすくすと、まるで面白いことがそこにはあるかのようになつも優しい、女みたいとガレに思わせるきれいな笑顔だった。

「嘘はつこぢやいけないのに」

「・・・だけど、嘘かもしれないけど、それは・・・」

「それは“なに”だと言つつもり？良い嘘と、悪い嘘があつて僕を欺していたのは良い嘘で、僕が駄目だつて言つつもり？」

笑顔がぱつと崩れて、きつい目がガレを睨んでいた。

「みんなは間違つていなくて、僕が悪いって言うの？僕が、悪い・・・どうして？良い嘘なのに怒つているから悪いの？お礼を言つべきなの、みんなに嘘をありがとうって？」

カリスは質問形式でガレにすべて尋ねていた。

でもどれ一つ、ガレには返事ができないことばかりだった。

良い嘘と悪い嘘。

その通りだと思っていた。

人を幸せにする嘘と、不幸せにする嘘があり全部、嘘だから悪いとは言えないはずだつた。

だけど、それをカリスに向かつて言つことはできなかつた。

それを幸せにする良い嘘なら、カリスの現実が不幸せだと言つているようなものだつた。そんなことを言えば、きっとカリスは怒り出すだろう。

そしてたぶん、カリスもそれをわかつていて言つているのだ。

悪い嘘ではないと。

わかつてゐる上で、怒つてゐるのだ。

悪い嘘ではなかろうと嘘をつかれていたことに。

欺されていたことに。

・・・でも。

それだけ、だらうか？

ふと浮かんがことだつた。

考えてしまつたガレは、急に怖くなつて考えるのをやめたのだ。

「・・・欺されていたつてわかつても・・・いつまでも根に持つているのは、駄目だと思う・・・子ども、だよ・・・そんなの。・・・許してやらないと・・・」

ガレはしどりむせどりになりながら、なんとかそんな言葉を見つけ出したのだ。

思っていることと違う気がしたが、いいのだ。

触れちゃいけないことだから、ずらさないといけないから。すると。

「うん、そうだよね」

カリスは再び笑顔になっていた。

「でも駄目。僕、子どもだから許せないの。みんなだいっ嫌い。許さないの。しかたがないよ、僕はガレより背も低いし、子どもだものー！」

うふふふと、面白くてたまらないように笑う。ガレにはちつとも面白くない。全く笑えなかつた。笑える話じやないはずだ。カリス本人にだつて。カリスが生まれて、すぐお母さんが死んだのだ。ショックな話のはずだ。

『死ぬなんてことは気安く言わないで』

そう言つて急に怒り出したカリスだつたはずじゃないか。不謹慎なガレの『冗談を、嫌がつていた。

じゃあ、お母さんの死だつて笑えないはずなのだ。でも笑つているカリス。

笑つて許さないと訴えているのは、嘘をつかれていたという点だけた。

もつと衝撃なことのはずのそつちのことにあまつに触れない、避けているように。

痛々しくてガレには直視できないことをカリスも、避けているのだとthoughtた。

「ねえ、ガレ！」

「・・・なに・・・」

ガレの声は怖じ氣付いたものだつた。

「そろそろ行こうよ。ゾラおじさんが待つていてるよ

「・・・あいつ、おじさんと言われるの嫌つているよ・・・」

「でも、おじさんだよ。ガレにとつてお兄さんつて感じするの?」

しかめつ面になつたカリスにガレもつられるよつて顔を歪めていた。

「俺は、お兄さんつて思わなくて、ああいつタイプには、お兄さんつて言つよ」

「わつ、ガレ、卑屈。それ、恥ずかしいよ・・・男らしくない・・・

「なつ、賢いつて言つてくれつ」

沽券に関わることをしみじみと嘆かれたガレは息巻いて見せた。子ども子ども、とカリスがガレを離し立てて、空気は元に戻つたよつた感じになつていた。

明るい軽口で、何も聞いていなかつたときのよつて、楽しいものに。

「行こつか」「うん」

額きあつた一人はゾラと荷物が待つてゐる場所に向かつて駆けだした。

それで元通り。

戻るわけはない。戻つたかどうかだつたではないのだ。  
戻つて欲しいというのがガレの希望だつたのだ。

「待つてよつ、ガレ!歩くの速すぎだよ!」

「ああ、ごめん・・・」

「ごめんじやないよ、もつつ」

小走りになつて必死に歩いていたカリスが何度もかの苦情だつた。

「さつきから、こんなのはかりだよ、すぐに速くなるんだから「

「ちょっと考え方してて、ぼんやりしていたから・・・悪い」

ぼんやりとしているという言葉通り、どこかうわの空の謝罪だつ

た。

「ほんやり考え方なら、やつくりになつてもいいと思うの」ガレの場合、早足になるんだもの！信じられないよつ

カリスは細い眉を吊り上げてガレを睨んでいる。

家族をだいつ嫌いと言つていたときのように、口答えもできないほど激しくではなかつたが、何度も追いつけずに音を上げさせられ、待つてと言わなくてはならなかつたことにカリスは、そこそこに腹を立ててゐるようだつた。

ぶうぶうと文句を続けるカリスだが、その横でガレの心は冷めていた。

冷たい風が吹き回つていた。他でもないカリスのせいだつた。カリスの話を聞いてから、気分が晴れなくなつていて沈み込み、ついつい回りを忘れて歩いてしまう。自分のペースで、だ。

「・・・おまえが遅いんだよ・・・」

「むかつ」

「俺はただ普通に歩いているだけだ」

カリスの明るい茶化すようなしゃべりが、なんだか馬鹿にされているような気分になつていた。

激しい一面を見せて圧倒された後にはカリスのこんな明るさが空々しいと思つてしまつ。

「なんだよ、文句があるのか？」

「いいや。せんぜん、ないよ。これっぽっちも文句なんてない。好きなだけほんやり歩いていればいいよー」

つんとそっぽを向く愛らしい横顔はとても憎らじいものだつた。

「なんだつー！」

「そつちこそ、なんだ、その態度はー。」

「喧嘩売つてているのかー？」

「売つてているのはそつちじゃないか、やれるもんならやつてみるー。」

勇ましく拳を握つてファイティングポーズを構えて見せるカリスに空氣は一触即発の険悪なものに変わつた。

それまで視界の下の方で繰り広げられる寸劇を黙つて見守つてい  
たが、これ以上無視していられなくなつたのがゾラだつた。

「おいおい。なにやつてるんだ・・・見てられんぞ・・・」

「じゃあ、見てなきゃいいつ！」

すかさずカリスが介入に噛みついたが、倍ほどの歳のさすがに背  
丈は倍はないが、大男には通じなかつた。

「おまえな。気が強いのはいいが、相手見て喧嘩売れよ。勝てんだ  
ろう？」

「わからないよ、やつてみなきや！」

「いや、わかるはずだぞ。そもそもおまえと、こいつでは・・・

こいつとは、勿論、ガレだ。

顎でしゃくられて、そもそもなどと言われたガレも不機嫌な顔を  
ゾラに向けていた。

しかし途中で不自然にゾラの説教は途切れてしまつた。

二人の少年に分けて入つたゾラは、一人からそれぞれ胡散臭げだ  
とばかりに凝視されて、はははは、と笑つていた。

「・・・歳かな。何言うつもりだつたか一瞬で忘れちまつたみたい  
だ」

がしがしと頭を搔いたゾラだ。

「嫌だなあ。ゾラお兄さんつたらつ。気にしなくていいよ。だつて  
僕、最初からちゃんと知つてるもの、そんなことは！」

すると途端にこやかになつたカリスが一見優しいそうだが棘に  
まみれる言葉を吐いた。

「なんだと、こら、チビ」

「チビでもいいもん。これから成長するもんね！するどゾラお兄さ  
んもどんどん成長していくんだよね、ぶぶぶ」

「糞餓鬼つ」

逃げる子どもに大人げなく剥きになつて腕を伸ばす大人という微  
笑ましい光景に、和むことなくガレはふつと前を向いて歩き出して  
しまう。

「ガレッ・・・

すぐに気がついたカリスが足を止めて自分に向けられる背中に寂しげな目で見つめた。

「いじめっ子め。あいつもいびつたのか?」「変なこと言うな!」

腹立たしいゾラを睨み付けて、けれど勢いは少し弱かつた。

「・・・・言いたくなかったのに。・・・・だけど、ガレが聞きたがるから話したのに・・・」

「秘密を話してみたら、引かれたのか?」

「・・・・違うよ。ただ少し驚いただけだよ、きっと…」

見上げる大きな瞳はうつすらと潤んでいた。

「油断大敵だねえ、捕まえた!」「なにつ!」

「俺は口の悪い餓鬼を懲らしめてやるために捕まえる途中、だつたはずだぞ」

「わあ、離せ、離せよ、馬鹿、変態、オヤジいっ!」

きやあきやあ、騒ぐカリスの腕を掴み取ったゾラは次いでカリスの胸に両腕を伸ばした。

「オヤジおやじ、降ろせ、降ろせよっ!」

拳骨で頭といわす肩、胸も腹も担ぎ上げられたカリスは蹴飛ばしてでしたが一切を無視でびくともしない頑丈な男は大股で、先を進むガレとの距離を詰めたのだ。

「こいつの秘密を聞いたのか?」

心がいっぽいぱいでどうしていいかわからないガレは、大問題を軽口にしようとする巫山戯た男に不快感を剥き出しにしていた。

「つるさいな、なんだよ。あんたには関係ないだろ」

「ああ、関係ないけど。せつかくだからもう一個、おまえの知らないことを教えてやろうかなあと思つてなあ」

肩の上で荷物のように運ばれるカリスは逃れようと暴れていたが、お構いなしの会話だった。

にまつぐゾラの表情が、ガレの気分を逆撫である。

「なんだよ、知らないことって・・・」

「まめ」

「マメ?」

「肉刺だよ、足の裏や掌にできる。知らないか?」

「そのぐらい俺だって知ってるよつ。だから肉刺がなんだって・・・」

「

「潰れちまつて血が出てるよなあ。匂いがぶんぶんする。おまえは嗅覚鈍いのか?」

なじるわけでなく確認のように首を傾げるゾラに、はっとガレは目を向けた。

ゾラの肩でゾラの頭を最高に不機嫌な表情にぽかぽかと殴つているカリスだった。

「いいかげん離せよ、馬鹿親爺つ！」

カリスの抵抗はゾラが肉刺の話をしてから一層激しくなつていた。

「カリス!」

ガレに名前を呼ばれてびくつと身体が一瞬止まつたようだつた。

「おまえ、足見せろ!」

「嫌だよ、そんなの、なんで・・・うわあつ」

悲鳴に変わつたのは乱暴に身体が強く引っ張られてゾラの肩の高みからずり落ちそつになつたからだ。

「ガレつ、なにするんだつ・・・」

腕を伸ばしたガレにカリスの身体は危なげなく受け取られていた。いくらか小柄とつても猫耳やしつぽのある獣人であるガレは樂々とカリスの体重を支えて、そして地面に座らせていた。

「嫌だ!」

「嫌だじやない、靴脱いで足見せろつ！」

「嫌だね、なんでだよ、ガレはゾラのあんな言葉を鵜呑みにして信じたの? そんなの馬鹿・・・嫌だつてつ!..」

必死に足をばたつかせ、ガレを追い払おうとしていたが足はすで

に掴まつている。ガレの方が力が強くて振り払えずに、ブーツの紐が弛められていく。

「ガレっ、やめて、怒るよっ！」

「馬鹿、俺が怒りたいつーじ阿呆！なんだよ、これはっ！…」

怒りに猫のように背中が膨れあがつたように見えるガレに、足を取られたままのカリスは仏頂面でそっぽを向いた。

「なつて・・・肉刺だよ。見てわからないの？」

「こつち向けよ、そう言うことじゃない・・・ってわかつていて言つていいんだよな、おまえは！」

「僕にはどういう意味かぜんぜんわからないね」

ガレの激しい剣幕を浴びながらも、カリスは怖じ氣付くことなくさらに油を注ぐありさまに顎をつんと上げたのだ。

またしてもまともに答えようとしないカリスに、ガレは息を呑んで唸つていた。

けれど、それでは埒があかないと深呼吸をして氣を静めてから、感情を抑えた丁寧な言葉を紡いだ。

「おまえ・・・こんなになるまで、どうして言わないんだよ

「・・・べつに。・・・わざわざ言つほどのことでもないよ・・・」

「おまえ、痛くないのかよ。鈍いのか？」

「うん、あまり痛くないよ・・・」

「鈍いのはおまえだろうよ」

ゾラだ。

「あんな、もたもた歩いているのに痛くないのかと聞くか、普通

「二人で話しているのに入つてくるな！」

すぐにカリスは反応したけれど、ガレはしばらくの沈黙を必要とした。

「あなたは氣が付いていたのかよ」

「まあね。血の臭いがするけどなんだろうねえと、ね」

「臭いなどそんなにしないよ、嘘をつくな！」

「・・・氣づかなかつたよ、俺・・・」

「ガレが普通だよ、こいつがおかしいんだよ、気にしなくてもっ」  
「

「だから、おまえは鈍いんだって。まあ、使わない機能なんて鋭く  
もならないしじんじん鈍つてゆくもんだらうけど」

話の中心だらうに、二人に黙殺されるカリスは不機嫌が募つてゆ  
く。

「一人とも最低」

それきりむつりと押し黙つた。

無視されてしまうので、カリスの方でも一人の話など聞こえてい  
ないよう無視してやろうと思ったのだけど、ガレとゾラの話もそ  
れで途切れてしまつていた。

「・・・だからさ。すました顔してるけど、おまえなんだよ、原因  
はっ！」

いきなり話を持つてこられたカリスは、腕を掴まれているガレに  
少々乱暴に揺さぶられた。

「僕は！そんな、こんな平氣なんだって言つてる！」

「平氣なわけないだろ！」

「平氣だよ！」

人通りのない山道をいいことに道の真ん中に座り込んでまた、意  
味のない押し問答を始めてしまつたガレとカリスに、ゾラはため息  
だつた。

まあやつくりやつてくれ。

呟いた男も諦めたように少し離れたところに腰を下ろしてしまつ  
た。

二人に背中を向けているのはいくらかの心遣いだろうか。

「潰れてこんな風に血が出ているのに平氣じゃないっていつても通  
じない。足だつて赤く腫れてるじゃないか」

ブーツを脱がされ血色に染まつていていた靴下も両方とも地面に放り  
出されている。指先も足の裏も腫も擦れて無理をしそうに肌は熱を  
持ち、水ぶくれもある。今まで見たこともないほど悲惨なありさま

だつた。

「い、痛いよっ！」

悔しさについ指に力が入りすぎたガレに、はじめてカリスの苦痛の声だつた。

「じめん・・・おまえ、爪が剥がれかけてる・・・」

目にしたガレも悲鳴をあげていた。

「・・・なんで、や、一事、言わないんだよ・・・」

悲しくて腹が立つてぐるだらう。

「俺には言つても無駄だとか、思つていたわけ。言つても聞かない奴だとか、そういうことかよ・・・」

「違うよ・・・」

「じゃあ、なんだよ、わかるよひに言つてみろよっ」

「だから・・・これくらい平氣。まだ歩けたもの・・・。だいぶん樂になつてきていたし・・・」

「“だいぶん樂に”じゃない!どうしてその辛いときにも言わなかつたんだよっ」

激情につすりと緑色の瞳に涙を浮かべて怒るガレに、カリスもしょんぼりと肩を落としていた。

「・・・だつて」

「・・・だつて、なんだよ・・・」

「平氣だつたんだもの、これくらい、ほんとに・・・」

「まだ言つか!」

「だつて・・・こんなのは見せたらガレは置いて行こうと考えるよ。ただでさえ、とか思つていてるでしょ・・・置いていこうと思ひだすはずだよ。そつなるよりずっと平氣だよ・・・」

「ぼそぼそと説明したあと、カリスはぱつと顔を上げて力説だつた。「言つておくけどね。これくらいぜんぜん、何ともないんだよ。まだ歩けるからね、普通に!だから、ここに残して別行動しよううなうことば」

「言わなこよ」

聞き取れないほど低くガレは即答に答えた。

「本当だよね？」

「本当だよ」

「よかつた……」

カリスが嬉しそうに微笑んでいた。まさに花が開くようなそんなきれいでうつとうと見とれるような優しい笑顔。

だけど、ちらりと見ただけでガレは不機嫌な空氣のまま鞄の中を探り始めた。怪我の薬を取り出すためだつた。

「ガレ……怒っているの？」

「怒つていなよ」

「嘘だ、怒ってるよ……」

「……ああそーかも。怒ってるかもしれないな……」

「ガレの薬、減っちゃったものね……。今度街に着いたら買つて返すから……」

「そんなことじやないよ……」

どうしてカリスはこんななのだらけ、ガレは思わず声を荒げていた。

「……じゃあ、どうこう」と。早く進めないから怒つていいの？  
悲しそうに言つたカリスに、更にガレの声は大きくなつてしまつた。  
「違うよ……俺にもよくわからないけど、凄く腹が立つて  
んだ！」

「……」めん。だけど、これだけは。僕、薬も塗つてもらつたし  
もひげやんと歩けるから安心してよ

ガレは息を呑む。怒鳴りそうになるのを抑えるためだつた。  
歩けるわけなんかないと思つた。

しばらくまともに歩けないだろ。

だから、ぐずぐずすることになつて自分は腹が立つてゐるのか？  
自問が浮かんだが、すぐに否定だつた。そういうわけではないの

だ。

本当に、カリスを足を引っぱるから置いてゆこうなんてガレは思つてはいなかつた。

そうじやなくて。

もどかしい気持ちに追い立てられて、無言に立ち上がりつたガレをまだ地面に座つたままのカリスが不安そうに見上げていた。

「・・・俺には話せないか?——だからか?」

大きな溝があるのかと、聞きたかったのだ。

ゾラがいるため、ガレが口を動かすだけにとどめた部分は、“猫”であり、音にされなくとも正確に理解したカリスは、ううんと首を横に振つていた。

「違うよ」

だけどその後に、でも、と続いた。

「それもあるかもしだれないね。だつてガレは僕のことなんて最初からあまり好きじゃないでしょ。僕が無理矢理くつついでただけだものね」

作り物の笑顔の間にそつと覗いた素朴な色だったのかもしない。カリスは無表情になると小さく囁くように言った。

「・・・知られたら置いてちゃつかもしだれないものね・・・

「そんなこと、しないよ」

ガレは考えての返事だった。

よく考へても、他の考へなどないと思つたから。

「ほんとに?」

「ほんとだよ」

嬉しそうに笑顔を見せたカリスに、ガレも照れくさそうにしながら口元を綻ばせていた。

家出の理由を聞いて驚いて動搖してしまつてはいたが、それでもカリスが心配しているようなことは、ガレは欠片も考へてもいなかつたのだから。

そしてカリスも、猫・獣人だからとガレを嫌う様子はまったくな

いのだと呟づいたから。

「……なんだ。……ずっと我慢していたのに損しちゃった……」

・

カリスが言つて、ガレは、ははん、と笑つていた。

「やっぱり痛かつたくせに、やせ我慢してらあ」

和解だつた。

緊張感の末に、空氣は和らいだ。それだけでなくもつと温かみを持つていただろう。

少年二人が、己の取つていた態度に照れて、恥ずかしそうに顔を背けあつていた。

そのなかでむくりと動きをみせたのか、ゾラだつた。

「——といふことで、話も一段落したところで行くか

きやあ、と悲鳴をあげたのはカリスだつた。

小柄な身体がむんずと後ろから捕まえて、ひょいと持ち上げられたのだ。

「なにするんだよ！」

「嫌なら、ガレ坊におんぶして貰うか？」

「べつに俺なら構わないけど……」

「それは絶対に、嫌だ！僕は歩けるよ……」

カリスにも誇りがある。さらに背格好のあまり変わらないガレに道中をずっと負ぶさつてもらうなんて考えられなかつた。しかしするとガレが言つ。

「それは無理。俺がさせられないからな」

笑顔だつたはずのガレが再び不機嫌になつて、即座にカリスに宣言した。

ガレは今回、折れなかつた。

だから、しぶしぶ、だつた。

カリスは、ゾラの首に腕を回してしがみつくりとに甘んじる」とこなる。

「だから……ちゃんとまだ歩けるのに……」

ぶつぶつ文句を言うのにも飽きた頃、ガレの機嫌もカリスの気分もすっかり回復していた。

平氣だと言い張っていたけれど、痛みを知られないようにしないといけないという緊張感から解放されたカリスは、ゾラの背中の温かさを感じていた。

青い空と、白く続く道。

ガレと、ゾラと、穏やかにゾラの背中で笑っているカリス。ずつと續ければいいと思った。

ガレに訪れたとても穏やかな時間になつた。

「ゾラのお兄さん・・・」

言つて、うふふとカリスが意味ありげに可愛らしげに、笑いだしたのだ。

それまでのとことめのない話題も尽きてしばらく黙っていたカリスが、何事が見つけてしゃべり出したと思いきや、ゾラのことを

“おじさん”ではなくこんな風に言つてのけた。

呼ばれた本人以上にその猫なで声に警戒したのは密かにガレの方だったかもしない。

その後いつたい何が続くのだろうかとドキドキしながら横田で、隣を歩く黒い出で立ちの男とその背中に収まる青い上着の少年いう二人の様子をうかがつていた。

「お兄さん、僕、凄いの見つけちゃつたよ！」

「なんだ、こら、てめえ。言いたいことがあるならさつさと言え」

ガラも悪くドスを聞かせたゾラは言つと、カリスは素直に頷いたのだ。

「うん、なら言つね」

ガレの心臓はとても高鳴つている。カリスは果たしてどんなことを言い出すのか。

「ゾラお兄さん、禿げてるんだね！」

「はあ、ハゲ？」

思わず口に出して驚いてしまったガレは一警を送られ慌てて視線を逸らした。

「禿ができるよ。あ、一力所もだ。お兄さんつたらこれだとなんだか“おじさん”みたいだよね」

鬼の首を取つたようなカリスなのだと、ガレには断言できた。

知つてしまつたカリスはこれから先、さぞかし心配している風に装いながらちくちくと脅かしていくのだね。

しかし、展開はガレの予想と少し違つたものになつていて。

「・・・ああ、情けないなあ」

一つ大きなため息と共に嘆いてみせたゾラだつた。

文句を言つではなくて、身構えていた二人の子どもはおやつと思つただろう。

要するに。ゾラはやはりカリスより上手だということだった。

「こういうとき、大人の知性を持つ者なら決して口に出すことはないんだろうが、子どもは馬鹿だから。馬鹿で考へ無しで無神経だから！ひとのハゲ見つけたぐらいで得意になるんだからな。ああ、本当に嫌だ嫌だ子どもは、恥ずかしくてっ！」

ゾラの態度も結構大人げないものだとガレに思わせたが、カリスは反撃には走らずそれきり、ぶつつと口を開ざしてしまつた。休憩になるまで一言も口をきかなくてガレはとても退屈だつたのだ。

「ねえ、ガレ・・・」

ハゲ騒動の後、重たくなつてしまつた口をやつと開いたカリスだつた。

「なんだよ」

それだけでなんだか嬉しく感じるガレの声は少し弾んでいたが、カリスはまだ沈み込んだままのようだつた。

「・・・ハゲが、ね・・・」

ゾラのハゲに囚われてしまつてゐるようだつた。

「ああ、せつかくいい具合に証拠を見つけられたのに残念だつたよな。あんなふうに子どもつて決めつけられた言い方されちゃうともうハゲポイントはすっぱり諦めた方がいいだろうな・・・」

他の攻撃が跳ね返つてこないところを探した方がいいかも、と言おうとしたガレを遮るように、違う、と首が横に振られていた。夕方になり、野営の準備に入つて一人で焚き火に使う枝を雑木林

に探している最中だつた。ずっと背中にいたのでもう大丈夫と言つ

カリスに負けて、ガレとカリスは一人で探していた。

ゾラは水を汲みに行き、戻つて夕食の準備をしているところだろ

う。

「あのね。ゾラね、ハゲが・・・右側と左側にあつたんだよ。普段髪で隠れていて見えなかつたけど」

今まで知らなかつたけれど、今日足を怪我でおんぶされて間近に頭を見ることになつてはじめてカリスは気が付いたのだ。

カリスの話に、若そなのにハゲてるのかとしんみり思つたもののガレにとつてもゾラの頭は見下ろせる位置ではないので田にすることはできなかつた。

「・・・へえ。二カ所つてのも派手だよな」

神経質そうな表情になつてゐるカリスに、ガレは正直よくわからなかつた。

「だけどそんなに心配しなくとも・・・うつむもんじやないし、年とつてみんな禿げるつてわけじやないよ、だから」  
などと言いながら、ふと気が付いた。このところ妙に自分たちはハゲに縁があるのだ。

ガレの黒狐の帽子の下にも恥ずかしくて見せられないハゲがあることになつてゐるのだから。

ハゲを隠すために貰つたガレの黒い帽子は、本当はハゲではなく二つの黒い猫耳をニンゲンに見られないようにするためのものだけれども。

嘘も方便のガレとは違つて、ゾラには本当にハゲがあるわけだけど、によきつと突き出る耳ではなく生えていないハゲは、考え方を変えたときマジじゃないかとガレは思った。

猫耳がバレたとき身の危険に陥るけど、ハゲでは迫害はないはずだ。

「そんなハゲを氣を病むなんて変だよ」  
ところがカリスは激しく首を振つた。

「違うもん！そもそも、僕の家系だとハゲじゃなく白髪になる方だよつーそういうことじゃなくって」

「じゃあ、なに？」

もじかしそうに上目使いでなにかを訴えられているが、はつきりいつてくれないので、ガレだつてもどかしい。

「だから、ね・・・」

「だから？」

「・・・だから・・・。ガレはその、なんにも感じないの？」

「なにを？」

「ゾラについてだよ、ゾラについてなにか・・・」

「若ハゲ？可哀想だとは思うけど」

「もうつ・・・もう、いいよつ・・・」

「なにそれ？」

短気を起こして怒り出すカリスに、もう少しだけ気は長いと自覚するガレは首を捻るしかない。

「言つてくれないと、わからないって」

すると、ううん、とカリスはしばらく唸つていた。

「もう、いいよ。だつて自分でもよくわからなくて上手く言えないことだし・・・それにこんなの僕の考えすぎだつて笑われそうなことだから・・・」

「・・・なら、いいけど」

引っかかりが残つていいたけど、二人の両腕いっぱいに薪になる木の枝は集まつたのでゾラが待つ今夜の野営地に戻ることにした。

空は夕焼けを通りこして藍色に暗くなりはじめていた。

獣人であり、夜目も効くガレだからこれまであまり気にする必要のないことだつたけれど、今は違うのだ。

ガレの共にカリスがいる。

ただのニンゲンのカリスはガレと同じにはならない。

このくらいで足に肉刺ができる、潰れて血が出るなんてガレには信じられない脆弱さけれど、焚き木採りは自分がやるから座つてい

ろよと言つても聞かない意地つ張りさ。

ガレは用心深くなろうとしていた。

ゾラに言われて注意深く臭いを探つて、革靴の臭いに混じる血も感じ取ることをしていた。

そのガレの前で、カリスはなにか考え事をしながらそぞろ歩きをしていて、ガレは気が気がでもなかつたのだ。

夜になりカリスにはあたりは見通せない。足は怪我をしている。足下には木の根や、石が「ロロ」ロロしているところのところ。

「カリス・・・ちゃんと真面目に歩けよ？」

「変なの。真面目に歩いているじゃん。逆立ちなんてしけないよ」

「逆立ちっ！おまえ、できるのかよ、そんなこと」

「できるよー数歩だけど、ちゃんとできるよ、失礼だよ、ガレつたらー！」

「数歩なんて歩いてるに入らない、倒れるまでにふらつとしているだけじゃん」

「む。かなり失礼、じゃあガレはどれだけできるって言つんだよ」

「ははん。飽きたままでだ」

身のこなしには自信があるし、体力も同族の同世代で比べたとき優れていると自負するガレは胸を張つていた。

自慢ができることはいいことだつた。

良い服を着ていて、良い生まれのカリスに無意識に劣等感を持つていたのかもしれない。ガレに自信を持つて誇れることは、こういうことだつたから。

「俺は早く走れるし、長く走れる。垂直の崖もすいすい登るぞ、手も足も肉刺はできないぞ」

「・・・ガレ」

嫌ながんじ、と言つてカリスはそっぽを向いたが、すぐにまたガレの方を向いていた。それほど嫌な感じだとは思つていらない証拠だった。

だから、ガレは続けていた。

「でもおまえは、別にいいじゃん。二ングンだし。肉刺ができたつてゾラが、ゾラがいなくなつたら俺が支えてやるし。気にすること無いんだ。俺は体はまだ小さいけどさ、おまえぐらい背負つて歩けるんだよ。だから我慢してないで、こんどこんな風になつたときはすぐ言えよ、いいな？」

ガレはカリスを振り返りながら後ろ向きで歩いていく。

言い聞かせたかったから、もう自分の前で無意味な我慢などカリスがしないように。

弱くて脆いくせに強がつてみせるカリスは自分が守らないといけないのだと強く思つてゐるガレはここが大事な踏ん張りどころだと、言葉を重ねた。

「おまえ、二ングンなんだし獣人の俺に頼つたつてぜんぜん恥ずかしくないんだから」

「わっ」とカリスが悲鳴をあげた。

「危ないっ」

はつと思つたときには、ガレはバランスを崩していた。

地面があると思つていたところに踵を置いてしまつたガレは慌てて腕をばたつかせたが掴まるところはなく、落とし穴のようにくぼんだ穴に後ろ向きに落ち込むことになつたのだ。

たぶん、それだけでは問題はなかつただろうと思つた。

だけどカリスがいて、優しいカリスが支えようとガレの身体に腕を伸ばして、でも自分も不安定で一緒になつてなだれ込んでしまつた。

穴にはまつたガレの上に。

「い、痛ててつ・・・」

「・・・ガレ、大丈夫・・・?」

呻いたガレから慌てて離れたカリスが心配そうに窺つていた。

「どうしたの・・・?」

「信じられねえ・・・」

呆然と呟いたガレに、どうしたのかとカリスは顔色を変えていた。

「足を・・・挫いた・・・」

「・・・ねんざ・・・?」

一瞬生まれた沈黙はどういう意味だったのか。

ガレは慌ててカリスに言った。

「た、たいしたことねえよ!」

「本当に?」

カリスの性格はこうこうにかいま見ることができるので。言葉を疑つたカリスは即座に動かされないで地面に置かればなしになつてゐるガレの足を手にとつてぐいっと足首を動かしたのだ。「うきいいいいつ」とカエルの潰れたような悲鳴がガレの口から飛びだしてゐた。転んだ上にカリスの体重が乗つかつてしまつて強く変な方向に捻つてしまつた足首に、加えられたカリスの暴力

愛情?

そんなことをされるなんて思つていなかつたガレの目には涙が滲んでしまつたけれどカリスは

「ほり。嘘は駄目だよ、ガレったら、もうつー」

ガレは、ゾラに氣づかれないようなるだけ平氣なふりで歩いた。旅慣れてゐる男に、転んで足首を捻つてねんざして、痛いのなどと自分は許されないだろう。カリスの状態に氣づかなかつたことだけでも呆れた目を向けられているのに、そのうえこんなことがバレると思い切り馬鹿にされるに決まつてゐる

ガレのプライドに関わることなので必死だつた。

足を置くたびに痛みは走つたけれど、まあそれほど酷くもない。ましてカリスのペースに合わせて歩くぐらいことだから普通にこなせるはずと考えたけれど、とても甘かつた。

「ガレ転んで、ねんざしたの!」

カリスはゾラの背で歩かないなどという話でなく、もっと単純に、カリスがゾラの待つ場所に着くやいなや、明るく暴露してくれたの

だから。

ガレはカリスに文句を言う余裕無く責めていた。

聞いたゾラは、頬を引きつらせたガレを見てため息を吐いていた。そして再びカリスに顔を向けると、にかつと笑っていた。

「良かつたなあ。負傷者が一人になつて仲間ができたわけで嬉しいんだな！」

「うん！」

満面の笑顔で答えたカリスに、そういうことなのかとガレは複雑な気分に陥っていた。

その複雑さが祟ったわけでもないだろ？に、その後ガレの具合はどうどんどん悪くなつて、ゾラが作った夕ご飯を食べ終わつた頃には身体を起こしているのが辛くなつたほどだつた。

「どうしたの？」

「・・・いや、べつに。ただちょっとだるい・・・」

「ねんざしたせい？」

「そんなことはないと思うけど・・・なんか、寒氣もする・・・」

「大変だ、足首から悪い菌が入つたんじゃないの！？」

半日ゾラの背中で、歩いていなくて疲れていないことに理由があるのだろう。食べてすぐ、眠り出さないカリスのかわりにガレがずるずると地面に横になつてしまつた。

「大変だよ、お医者に診せないと・・・」

とまで言つたが、ガレを気安く街の医者に診せられないと氣が付いたカリスが、どうしようと悲壮な顔になつていた。

その横にしゃがみ込んだゾラが、ひょいと腕を伸ばしてガレの額に掌を当てていた。

「熱。鼻水も出ているよつだし、おおかた風邪でもひいたんじやないのか。普通な、足首から悪い菌と騒ぐ前に考へることじやないのかね？」

「風邪？」

驚いたように繰り返したカリスはすぐさま同じよつにガレの額に

触つて、大きな声をあげた。

「わあ、本当だ、熱いよ、ガレ。熱があるよー。」

「・・・そんなはずない、俺、丈夫なのに」

「丈夫だと赤い顔をして口を尖らしても意味はねえな。まったく。そつちもこいつもお子様にはお兄さまは困っちゃうね」

「・・・」

呆れた口調のゾラに、ガレは小さく謝つていたがカリスはとても楽しくてしかたないと上機嫌だった。

「頭を冷やさないとね」

「こら待て」

首に巻いていたチーフを外して、そそくさと立ち上がったカリスをゾラが引き留めていた。

「どこいくつもりだ？」

「だから。小川に行つて水で濡らしていくんだよ。ガレの熱、冷やすないと」

「暗くて見えないだろうが。危なつかしい。おまえもすつころぶのがオチだろ」

「でも・・・」

恨めしそうに言うカリスに、どっこらしょと腰を上げたゾラがカリスの手の中にあるチーフを取り上げた。

「大人しく待つてることぐらいはできるな？火があるから滅多なことにならないとは思うが、そのくらいは動けるな？」

前半部分はカリスに、後半はガレに向けて言い一人はそれぞれ頷いていた。

黒い衣服を着るゾラの姿はすぐに木立の奥の闇にとけ込んでゆき見えなくなつた。

カリスの横に再び腰を下ろしたカリスが、大丈夫、とガレの顔色を窺つていた。

「大丈夫だよ、こんなの。大げさんだから・・・」

「おでこも、ほっぺもとても熱いよ」

遠慮無くカリスの細い指が自分の肌を触つていて、ガレは少し緊張したがあまりに普通なカリスの態度に身体にこもつていた力は抜けていった。

「おまえ。ほんとぜんぜん、気にしないんだな」「なにを？」

めぐれていった毛布をきちんとガレの身体の上に広げ直していたカリスは不思議そうにガレに灰青の瞳を戻した。

ゾラは今、小川に水を汲みに行つて、いなかつた。  
気持ちよいな風が吹く穏やかな夜だった。

「猫とか・・・そういうことだよ」

小さな声に、驚いたようだつた。

「気にしてるよ、とても。でも、そんな風に言われちゃうといつそり触れないじょないか・・・しつぽ・・・」

看病していく、ガレが眠つたらしつぽりしつぽ触るつもりでいたのに、と笑つたカリスに

「触りたいならさ触つていいよ」

「どうしたの急に、風邪引いて心が弱つたの？」

首を傾げられて、ガレは苦笑していた。

「おまえが俺と一緒にいる理由つてそういうことだろ」「しつぽが触りたいから一緒にいる。

少し思つたのだ。じゃあ、しつぽを触つてしまつたらどうするんだろう。

ガレといふ意味はなくなつてしまつのではないか。

家出の最中のカリス。

家に戻りたくないのだろうけど、ガレである必要はないのでは、たとえばもつと頼りになるゾラにくつついていつてもいいはずだつた。

「触らない」

カリスは首を横に振つた。

「どうして」

ゾラが現れてから一言も口にはしていなかつたけれど、触りせろと騒いでいたはずだ。

「だって、ガレ触つて欲しくないって顔しているもの」

「そんなこと、ない」

「ううん。そういう顔してると、なら触らない」

汗を拭いてあげるよ、と返事を待たずにさつさとガレの襟を広げて拭い出すカリスの手にも、身体が重く、カリスの言うとおり風邪で心が弱つたガレはさせるままで地面に転がつていた。

ニンゲンなんかに触られるの嫌、などといつのはもう違つ気がした。

「だから見ているだけ」

ぱかっと頭から帽子を取り上げた。風が入つて汗で濡れる黒い髪の間に猫の耳が二つ生えていた。

「ゾラがいないうちにちょっと通氣しないとね」

耳の付け根が涼しくなつて気持ちよくて、無意識に耳が跳ねたようだつた。

「わ、動いた！」

「・・・動くよ、そりやあ・・・」

「でも、僕自分の耳、ぴくぴく動かせないよ。・・・動いても僕のだと、可愛くないけどね・・・」

顔を覰めてみせるカリスに、もう何度も口にする言葉だろうか。

「おまえ、変な奴」

「そう？ 気のせいだよ」

「変だよ、絶対」

「そうかな・・・。でも別にいいでしょ？」

尋ねられたガレは、一瞬考えてから。

「ああ。ぜんぜんいいよ」

ガレの頭に帽子を戻した頃、茂みが揺れてゾラが帰ってきた。

ガレの頭の上に濡らした布を置いて、ゾラから貰つた薬草を飲ませたあとカリスも寝息をたてはじめたガレの横で丸くなつていた。

今日は自分より先に眠ったガレを守るのだと「うつむく」、カリスの片腕はガレの身体に伸ばされていた。

仲の良い、好ましい関係を築いていると知れる一人だった。

そんな様子をちらつと目を向けたゾラは、一つ静かにため息だつた。

獣人の子どもとニンゲンの子どもがまま」と遊びのように仲良く遊んでいた。

はじめは一人の間にあるものをまだ知らない、隠しているのかと思つたがそう言うわけではなかつたようだ。

子どもだからなせるワザ。闇雲な勢いによる思い切りだつたのか、事故だつたのかは知らないが、カリスは知つた上でガレと付き合つているのだとわかつた。

ガレは典型的な獣人思考で、ニンゲンを恐れてビクつき怯えているのにカリスだけは側に置くことを良しとしているのだ。

いつたい二人の間に何があつたのだろうか。

ゾラには知り得なかつたが、大人としてあることを教える役目にあるとは考えた。

“子どもたち、いつまでも遊んでいてはいけないよ。そろそろお家に帰る時間だ”。

楽しいからといつても、おまえの足下にはやるべきことが積まれているだろう。

果たさず放置しそぎたら、重みで地面は抜け落ちてもうその場にいることさえ出来なくなるのだから。

“坊やたち、遊びはそれまで。まづくら夜が来るまえに、さよならのキスを——”

昔聞いた童謡の一節を思い出したゾラは、小さく口ずさんでいた。珍しくもない唄だつた。ニンゲンの母親が背中でぐずる子どもに歌つているのを「ごく最近も聞いた。

古くは自分の母親が最後の一人になつたしまつた小さなゾラが眠りにつくとき歌つてくれたものだつた。静かな夜の中、この唄を子守歌に聞きながら・・・あの夜がゾラが母親と過ごした最後だつた。そのとき自分はこのガレよりも、幼かつただろう。

俺はよく、ちゃんと一人で生き延びられたものだ。

一瞬くつと男の口の端が笑つたようだつたがそれだけだつた。

怒りとも悲しみともつかない感情は消えてゆき、ただゾラは思い出した童謡を口ずさんでいた。

しかしその低い声も、傍らで眠る子どもの耳には届くことなくパチパチと爆せる焚き火に搔き消されていった。

朝起きたときには、もつすつかりとガレの身体は軽かつた。熱くも重くもなかつた。

立ち上がりみると、痛みはほとんどない。足首のねんざもすっかり良くなつていていた。

目覚めたときは少し重かつたのだが、それは自分の肩の上にカリスの頭が乗つかつていて枕にされていたためだけであり、それはそのまま脇に置いてやれば解決できた。

けれど固い地面に置かれたカリスの方には不具合があつたらしくしゃみをした。そして「・・・寒い・・・」と呟いて目を覚ますことになつたのだ。

そういうえば温かかつたとガレは思い当たつた。

身体を寄せ合わせて眠るなんて家族のようだとちらつと感じて、でもすぐに家族ではあり得ないのにとそんなことを考えた自分におかしくなつていた。

とにかくこうして普段より早く目を開けたカリスは、身体を曲げ伸ばしする朝の体操をしているガレに気が付いて驚いた顔になつていた。

「ガレ！もう起きていいいの！？」

「ああ。もう平氣みたい」

ほら、というとガレはその場でぽんぽんと跳ぶと勢いを付けて大きく、宙返りをして見せてカリスの目はまん丸になった。

「そう。すっかりいいみたいだね、とても早いね・・・」

そして少し不服そうに

「僕の足、まだぜんぜんなのにつ・・・」

小声でガレには聞こえないようにだつた。

「狡いかもしない・・・」

でも聞こえてしまつたようだ。

「なにが？」

「ガレが。しつぽもあるし

「・・・狡いつて、それつて、・・・そういうことか？」

「羨ましい。・・・見つからないようにするには大変なんだらうけど・・・だけど僕にも生えてきてほしいつ、生える薬があるなら僕は絶対手に入れて飲む！」

冗談には聞こえないほど情熱がこもった言葉に、そんないもんじやないよ、と言いつつもガレは満更ではなくなつてきて不思議だつた。

ゾラがどこか近くに散策に出でているので、一人だけだつた。大人の目を盗んだ子供達の会話はだからとつても弾んだのだ。

これはゾラには内緒の一人だけの秘密の会話だつた。

そのあとしばらくしてゾラが戻ってきて、簡単な朝食を食べて出発だつた。

ガレは熱も下がり足首に走る痛みも回復してすっかり元気に歩いていたが、カリスの方は言い分も口に出す前から却下とされ、ゾラの背中だつた。

昨日に引き続いてのことだつたので、カリスも今日は「ええつ、またなの！」と口を尖らせた後は、比較的大人しく従つた。

歩くだけで必死にならなくてするので、道ばたには小さな花が咲いていたことや奥歯を噛みしめて歩かなくてもいいのでガレともお

しゃべりが出来ることに気が付いたためかもしない。ひき替えとしてとても恥ずかしい気持ちも味わっていたけれど。

「よう。なに人の尻見てんだよ」

「見、見てないよ！・・・し、失礼な僕があやしい者みたいじゃな  
いかつ！」

「ほんやりと見ていたのは本当だつたけれど、本当のことなので一  
層、ゾラに指摘されたカリスは真っ赤になつていた。

「触りたいなら、特別触らしてやらんでもないぞ、俺は心優しいお  
兄さんだからな」

「いつ、いらないよつ、変なことを言わないでよつ、ガレが僕のこ  
とを疑わしい目で見るじやないか、違うんだからね、ガレ！」

ガレにはいまいち、性格が良く掴めないカリスが真剣になつて目  
があつた自分に言い訳をしているのだけれど、別にお尻を触りたい  
云々を、本気にして話を聞いていたわけではない。ただ、また何を  
ゾラと遊んでいるのだろうかぐらいだったが、カリスは不名誉な誤  
解を解くべく躍起になつていた。

「別に、そんなに真剣にならなくても・・・それにもし、触りたい  
と思つていても、俺怪しいとは思わないし」

「まあ、俺様の尻だけあつて引き締まつていい具合だから衝動に駆  
られても仕方がないことだわなあ」

「・・・小さい尻だよね・・・」

「だろ？、おまえ良くなかつているなあ」

「ゾラつて、全身無駄な肉なくてバネのよくなかんじがするんだ」

「いい感じだろ」

「・・・敵にしたくない感じ・・・」

「つかり苦汁を舐めてしまつたよつてガレは言い、ゾラはガレか  
らカリスを振り返つた。

「まあ、そういうイイ尻だ。触るか？」

「もう違う！」

カリスをフォローしたつもりだったが、ガレの言葉は逆効果になつて話が弾んだ二人に、なんだかすっかりカリスは怒りを通りこして泣きそうになってしまった。

「信じられないよつ。どうして僕が人のお尻を触らなくちゃいけないんだ！」

ふんふん、と口で言つて怒つてみせるカリスはやはりガレにはどこまで本氣でやつているのよくわからないのだ。  
だけど、カリスは実際触りたいなんてちらりとも思つていなかつた。

ガレのお尻なら別として、想像していたことはそこまではつきりと確信あるものじやないのだ。だけどちょっとよろけたふりをして掴まつて引っ張つてみたら、ずるつとズボンが脱げないかなあと考えていた・・・それだけなのだ。

思つただけで、さすがに実行を、とは考へていない。カリスだつて守りたい体面があつた。

そんなことを脳近くまで歩いたあと、道の脇に置かれている大石に腰を下ろしての休憩の最中に、おしゃべりと興じていたカリスだつたが、ゾラがうーんと、背伸びをしていた。

そして「じゃあそろそろ行くか」と声をかけると、カリスの隣に座つていたガレが腰を上げた。

カリスも一緒に立ち上がり少しよろけた。すっかり忘れていた痛みを思い出してそうして、ため息のあとはこれまでゾラにからかわれ、不服げに尖らせていた赤い唇をすうつと引っ込めていた。

「じゃあ、乗れや」

背中にだ。

ゾラがカリスの前にかがんで背を向けた。

「・・・よろしくお願ひします・・・」

さつきまで軽口に文句を言つていた相手に向けての言葉は、とても小さな声だつたがガレはカリスのこういうところが好きだと思つ

た。

意地つ張りだけれど、見ているのも不快な類の嫌な奴ではないからだ。

首に腕を回して、ゾラの背中に収まつてゾラが立ち上がつたときだつた。

そいつらが一いつじにやつて来ようとしていることにガレが意識したのは、

緩やかに続く道が丘を越えたら街が視界に入つてくる場所まで来ていた。

人や荷馬車の往来も増していたが、非常事態ではないならガレも気にしないで普通にしていればいいことを学び、実行することにもそろそろ慣れてきたから、その男たち四人の集団にもあまり緊張感を感じていなかつたのだ。けれど、気が付いたゾラの背中のカリスが強ばつた声を出したのだ。

「ゾラ、走つて！ 嫌な奴たちが来るつー！」

「嫌な奴？」

驚いたガレがカリスの顔色を見てただ」とではないと確認すると、その男たちの方向に目を向けた。

同じマントを着て似たような感じの男たちは徒步ではなく、騎乗だつた。

馬は距離を詰めることなくその場所で足を止めていた。

男たちはこぢらを認めて、なにやら話がされているのだとわかつた。

「早く早く、奴らに捕まつちゃうよっ」

反応の鈍い突つ立つたままにいるゾラの背中でカリスが暴れていった。

「おまえ、なんか悪さをしたのかい？」

「違うつ、僕を閉じこめようとするんだ、家の中につ、連れ帰つてまた鍵を掛けるつもりなんだ！」

「鍵とは、また物騒だねえ・・・」

「だから早くつ、じゃなきや、降ろしてよつ……」

藻掻いてゾラの背から降りようとカリスは躍起だつた。しかし、危なげなくしつかりと支えて歩いていたゾラの腕は今はカリスの邪魔をしていた。

訳もわからず暴れ出すから、落つことしそうで力を込めたという雰囲気だつたが、ゾラよりもいくらかはカリスの事情を知つてゐるガレも男を説得しようと助け船に入つた。

「ゾラ、カリスは捕まっちゃうんだ！」

「なんでだい、ははん。よくある、家出か？」

馬鹿にしたようなゾラの言葉にカリスはさらに声を荒げた。

「そうだよつ、あそこに僕はいるべきじゃないから出てきたんだ！」  
「カリスには大きな事情があるんだ！無理矢理、連れ戻そつとするなんて、やっぱり奴らは横暴なんだ！！」

「無理矢理・・・横暴つて、それは一概には・・・」

ゾラが少し困つたような声を出した。

降りられず、背中に繋げられているカリスが悲鳴をあげていた。  
ガレもカリスが見たものを目にして慌てた。

「あいつら動き出した、ゾラ、駄目だ、早くしないと！」

「・・・わかつたよ。——おまえ、ちゃんと付いてこいよ」

一言を傍らのガレに言い置いて、そのあとゾラは早かつた。足下に置いてあつた荷物を引っつかんで一蹴りで道から跳びだしたのだ。脇の手入れのない草地はその奥の雜木林に繋がつていた。山を開いた道だつたから、少し逸れれば本来の手入れのない自然のままの横断の厳しい広がりだつた。

そこに、ゾラは走り出したのだ。

ガレもすぐに続いた。

ゾラは身軽く、ガレが警戒心を抱いた通りの、いやそれ以上の身のこなしでカリスを背負つて走つて行く。

ゾラの走りには舌を巻く思いだつたが、すぐに気分を切り変えて全力でガレも走つて、遅れずにちゃんと続いた。

馬の走る速度に一足歩行者が勝てるわけがなかつたが、狭くすり抜けなくてはならない足元も悪い山道は、馬ではなくガレの十八番だつた。

こうゆう場所を上手く走り抜くガレだからこそ生き抜いてこられたのだから。

後ろで馬のいななきと踏みならされる馬蹄の音、男たちの怒声、叫び声が聞こえたがそれだけだつた。

ガレと、ガレの前をカリスがしがみついているゾラが崖を飛び越え、岩面を這い上がって飛び降りて走り続けて、男たちが付いて来るなんていう心配な気持ちは熱くなつた身体から滲みだした汗と一緒に次第にガレから消え去つていつたのだ。

ガレが息切れをし始めたほどだつた。

獣人の自分が。

ニンゲンで、大人であるけれどゾラに遅れないように走るだけでどれほど懸命にならなくてはいけなかつたか。

これが自分を追いかける、ハンターだつたら……。

考えずにいられなかつたガレが、その結果、汗ばんだ背筋がぎゅっと凍りかせることになつた。

ガレは不安で堪らなくなつて尋ねていた。

「・・・ゾラって、・・・どういう人？」

「こういう人だが、いきなりなんだ？」

「どういう職業・・・どうやつて食べているのかなつて思つてさ」

黒い大柄の長身。

腰には幅の広い剣を吊している。

身軽すぎるほど身のこなしの良い男だつた。

「誰かに、仕えているとか？」

探りだつた。相手の素性、人柄は嫌いだとは思わなかつたけれど、その人格が植わっている物があまりに優秀だから、恐怖感が生まれ

てしまうのだ。

本当に、無防備に自分は側にいてもいいものなのだろうか。

それまでは上手くやっていても、一転、なにかを切欠にして不仲になってしまったことは往々にしてあることだらう。

そうなってしまった場合、この男は危険すぎないだらうか？

「ガレ、どうかしたの、怖い顔をして」

「ちょっとむ。気になっただけだよ・・・」

ガレと同じ黒い色の髪のゾラの頭の横からひょこつと金色の一回りに小さい頭が覗いて心配そうな顔をしていた。

まだ背中に負ぶさりっぱなしでいたカリスが、ゾラに頬んで地面に降ろしてもらつた。

走り続けて山の中腹で倒木のためにぽかりと開いた場所でしばらく休憩することになつて、思わずその場に座り込んでしまつっていたガレの横の下草の上にカリスもお尻を降ろした。

「ここにいらいろよ。俺はその辺でも見てくる」

うんと少年一人が額ぐのを視界の縁に納めたあと、けろりとした顔で遠ざかつて行く黒い背中。

声が十分届かないところまで見送つたあと、ガレが硬いままの表情で口を開いた。

「あいつ・・・凄いよ」

「うん。僕もそう思った。どんどん走るの。僕を背負つているのに

ね」

「・・・俺、あいつ、怖いと思ったんだ」

ガレは吐露しながら、こんなことを誰かに口にしたことなどなかつたことに気が付いていた。

「・・・うん・・・」

ニンゲンのカリスはガレに、静かに頷いた。

「最初、良い奴だと思ったけど・・・違う、今だって悪い奴とは思つていらないんだ、だけど、さ・・・凄く怖い」

こんなことは言わぬ方がいいのかもと、ちらりと思つたけれど

真剣な面持ちで自分の話を聞いてくれているカリスに対して甘えだつたのかもしれない。

ガレの恐怖感に負けた弱音だった。

「・・・俺、あいつの近くにいたくないって気がするんだ・・・」

「・・・そなんだ。ガレはゾラのこと好きなんだうつと思つていた」

カリスは考え考え、そんなことを言った。

「どうして、そんな・・・」

驚いたガレに、よくわからないけど、慌てて付け加えたあとに「なんとなく、そう思つていた。・・・やっぱり僕の気のせいだつたのかな・・・。ガレとゾラは少し似てるかなつて思つていたんだ」うんとカリスも悩んだ顔になつていたが、ガレの不安そうな視線に気がついて明るく気分を変えた。

暗い表情のガレと一人、暗い顔を突き合わせていても良いことなんであるわけがないだろう。

「じゃあ、ゾラを置いて一人で行っちゃおうか?」

ぐるぐるとした大きな瞳を悪戯つ子ぽい光にきらめかしたカリスがなんでもないことのように、ガレが少し怯むようなことを提案した。

「・・・それは・・・酷くないか・・・?」

「でも、ガレ、嫌なんでしょう?」

「嫌つてわけじゃないよ・・・怖いだけだ。怖いつていつても、俺の方の気分的な問題でさ、・・・俺が悪いだけであいつが悪いわけじゃないんだ・・・」

良いとか悪いとかではなく、嫌なら仕方ないのに、と思つカリスだつたけれどガレは同意はできなかつた。

「なら、平氣?このままでいいの?」

確認すると

「ああ。平氣さ」

ガレは頷いた。

ガレにとつて、怖いけれど逃げ出す理由にはおかしいと思つたし、その他には、ゾラはとにかくもう少し一緒にいた方がいいと考えた。なぜなら、ゾラだつたらカリスは素直に背中に乗るよくなつたけれど、自分が背を向けても無理だろう。

まだカリスの足の肉刺が完治しているわけがなかつた。そのうえ、ゾラと離ればかりに一番負担が押し寄せるのだろうと思うから。「ほんとに、いいの？」

「いいよ」

繰り返して確認するカリスにガレはもう一度はつきりと、力強く頷いて見せた。

ゾラに対しても、ガレの気持ち的な不安要素だけが問題ではないことに、すぐに気が付くことになつただろう。

それは、ゾラが夕食を食べている最中に言い出したからだ。

豆を発酵させて作られるという“味噌”という東方の貴重な調味料を味付けに使つたというゾラのシチューはとても美味しくて、ガレもカリスも言葉少なになつて夢中に匙を運んでいるときだつた。

「おまえは、いつまで家出をしているつもりなんだい？」

いきなりで、何気ないどちらかといえば、どこかおもしろがつているようなゾラの声だつた。が、言われたカリスの手はぴたつと止まつていた。

「関係ない」

普段の柔らかさも甘さも刮ぎ落ちた低い声だつた。

「まあ、そう言へばそつだけど、あると言へばあるだらうよ。追つ手が現れて山の中走り回されることになつたんだから」

「・・・それは・・・感謝してる・・・」

笑つていないときのカリスは別人のように体温の低い堅いしゃべり方をするのだ。

山野を走ることに關して、カリスよりガレの方がゾラと対等に近

くあれたが、会話となつたときはカリスだつた。

きやーきやーはしゃいでいるときはガレより小さな子どもでも、いつたん気分を落としてしまい、大きな目を相手にすえて語り出すカリスには、ガレは一人幼い子どもとなつてただ見守ることしかできなかつた。

「感謝か。そりや、ありがたくもらつとくが、」とはそれだけじや済まんどうう?」

「・・・街に着いたら、道具屋に行つてお金を作つてちゃんとお礼をする」

そのあと、くるつとガレを向いて、ガレにあげるつて言つたものじゃないから安心してと、説明をした。

ガレは、そういうば自分に高級な指輪か、それを売つてお金をくれるのだとカリスに言われていたことを、言われてはじめて思い出したぐらいだつたが、要するに他にも売る物を持つていて、それを売りゾラにお礼をするのだとカリスは言つているのだ。

「そりやあ、さらに有り難い。樂しみにしてるぞーーー」ということじやないと、ちゃんと気が付いているよなあ?わかっていて誤魔化そうとするかわいげのない餓鬼だな、まつたく」

ゾラは薄く笑つていた。

大人の顔だつた。

何を考えているのかよくわからない、信用できない表情だと一人は思つた。

カリスの警戒心がキリキリと寄り合わされて糸になつたものは、さらに合わさつて強い太いものに変化してゆく様子が手に取るようガレにわかつた。どんどん、顔つきが強ばつていくのだ。

それ以上言つたら、駄目だ!――というガレの祈るような気持ちはゾラには通じなくて、容赦ない言葉が続いていた。

「おまえ、体力ないよな。ガレにくつづいて行くつても実際、無理なんじやないのか?」

ガレははじめて食べるシチューを膝の上に置たままになつてゐる、

カリスに至つては地面の上にまだ中味が入つてゐる器を置いて、もう食事どころではなくなつてきていた。

その焚き火を挟んだ前で、ゾラだけがズズッと音を立ててシチューを飲み干したようだつた。

そのあと乱暴に手の甲で口元を拭つたあと、再び二人に目を向けてた。

「家出。子どもっぽいわなあ。そんなもん、いつたいいつまで続けるつもりだ。このまま逃げ続けるつもりか？」

そこでいつたん言葉を切つて

「このまま逃げ続けられると本当に思つてゐるのか？」

冷静すぎる言葉だつた。

的を得た言葉だつた。

そして、ゾラの言つてゐることはこの場で正しいことだとガレは思つた。だけど、それは聞きたくなかった言葉だつた。

「逃げ切るんだ！！逃げ続けられなくとも逃げ続けるよ、僕はここに帰らないっ！あそこには絶対戻らない！！」

ガレの横で、カリスの悲鳴のような叫びだつた。

「絶対嫌だ！！絶対だつ！！」

「どうして、そんなに剥きになるんだ。なんかやつちまつたんなら、素直にさつと怒られてしまえ。一度怒られちまつたらしばらくすれば嫌な思い出として、お互いがいざれは忘れてしまうぞ」

「知らないからつ、ゾラは何も知らないから、そんなことが言えるんだよ！僕はそとはならないよ、わかるんだつ！！」

「ちびつ子が何を小賢しくわかつてゐるつて言つんかい」

「みんなは、・・・僕の家族は僕を嫌つてゐるんだつ」

「さあ、どうだか」

ゾラは皮肉げな笑みを男らしい精悍な顔の口元に刻んでいた。

知らないだけでなくゾラはカリスを挑発しているのかと、一人バラバラするガレは思った。

挑発とわからうとも、決して無視できない事柄が人にはあるよう

に、普段冷静なカリスはゾラの言葉に激しく噛みついた。

「証拠があるんだ！」

「本當かね、どんな？」

「みんな、嘘を吐いていたんだ、僕にグルになつて、嘘を言つて欺していたんだつ！！」

「欺す——なんて、よくあることだぜ。そのたびにおまえはこれからもいちいち逃げ回るつてことかい。子どもだな」「

「違う、そういうことじやつ・・・」

カリスの目の縁には光るもののが滲んでいた。見かねたガレだった。酷すぎて聞いていられなくて、カリスを助けに入ろうと思つたのだが、すぐにゾラがガレに視線を向けた。

巫山戯でカリスをからかつていてるようにも見えていたゾラだったのに、その一瞬の目はとても厳しい目だった。

ガレに口を出すなど、無言の命令だった。

ガレはその目の眼光に圧倒されて口をつぐんだ。  
「カリス坊やは、甘つたれな子どもだという証明になつてしまつたな」

再びカリスに、ニヤニヤと笑いながらゾラは言い、カリスはがつと大地を踏みしめて立ち上がつていた。

握られた拳がぶるぶると小刻みに震えているのをガレは横目で見ていた。

ゾラはカリスを怒らせようとしていることはもはや明らかだつた。「子どもじゃない・・・僕の言つてることは正しいんだつ・・・」「自分だって嘘ぐらい吐くだろうに、おまえは他人を許してやれない心の狭い子どもつてことだらうっ？」

「違う」

「どこが？」

「そういう、ことじやないんだ・・・」

「ないが違うんだ、言ってみる」

「・・・」

カリスは深呼吸を繰り返して気持ちを落ち着かせようとしていた。

それを言つてしまわないようにな。

ガレも心の中で恐れているその点、だらう。

覆い隠して見ないようにしていることを、挑発に叫んでしまわないように気を静めようとしているのだとわかった。

けれどゾラが。

「言えないことは正当性に欠けることだわなあ

「お、お母さまはっ！」

「・・・カリス・・・」

カリスの瞳に涙が膨れあがつてガレも泣きそうな気分だった。

「僕が小さな頃に死んだけど、僕にいつも『愛してる』って。僕を胸に抱いてお歌を歌つたって・・・全部嘘だつたんだ。全部、嘘、作り上げた物語だつたんだ、それを僕にみんなで聞かせてつ・・・

僕は・・・」

立ちつくしたカリスの目からぼとぼと涙が流れていった。

「一つだけは本当があつたね。それは僕が生まれてお母さまを独り占めにしたつてことだ・・・その通りだ、僕はお母さまを独り占めにして姉様たちから奪つたんだ、僕が生まれて・・・」

飲みこもうとされる嗚咽にカリスの細い肩が震えていた。

「僕が生まれて、お母さまは死んだんだから。お母さまは僕のせい死んだ、僕が生れたせいで死んでしまつたんだつ、『愛してる』なんてみんな嘘だ、そんな風に思つていいわけないんだ。お母さまだつて、姉様だつて、お父さまだつて、許せないつて思つているはずだよ」

僕なんか、生まれなければよかつたつて――。

耳を塞ぎたい絶叫だつた。

一番恐れた言葉だつた。

「僕なんか生まれなれば良かつたつて、みんな思つているよつ！ それまでみんな楽しかつたんだ、お母さまと遊びに行つたりピクニックに行つたり、だけど・・・僕が生れたあとは・・・本

当は僕のことなんて嫌いなんだ、大つ嫌いなんだよっ！」

「カリス、そんなことないよ・・・」

「そりだよ、ガレ・・・だつて・・・大つ嫌いで許せないよこんなの・・・僕は僕が大つ嫌いだ・・・僕が死んだらお母さまが戻ればいいのに・・・戻らないのに僕が死ぬことは僕のせいで死んだお母さまにもっと酷いことをすることになるんだつ・・・」

両手で目を覆つてが指の間から零はあふれ出して地面に落ちて染みを作つていつた。

横に立つてガレはカリスを慰めたくて、涙を止めてあげたくて仕方なかつたのに欠けてあげられる言い言葉も見つけられなくて、おろおろするだけだった。心中でこんな酷い仕打ちをしたゾラを恨みながら。

「自殺なんかする」とは、悪いことだ。母親に対する最大の冒瀆だろ？

「もうやめろよっ！」

「こいつは中途半端に向き合つているからいかんのだよ」

怒りを込めらガレに、腹立たしいほど冷血なゾラだつた。

「おまえ、言つてやればいい。そいつとそいつの母親、二人いたらおまえはどちらを選ぶかを

「えつ」

ガレは驚いて息を呑んだ。でもすぐ意図を理解した。

同じくカリスもゾラが言わんとしていることに気が付くと、硬直していた。

「・・・そんなの変だよ・・・そんな選択を言つのなんて意味がないよつ・・・」

「でもおまえは、意味がないことを悔やんで自分を呪つているんだろうが」

「カリス・・・」

俯いて嫌々をするように首を振るカリスの顔をガレはそつと起して覗き込んでいた。

「意味はないかも知れないけど、俺はおまえとおまえの母ちゃんどつちか一人だつたら、おまえはいいよ」

「それはっ、ガレがお母さまを知らないから、でもお父さまや姉様たちはお母さまを知つていてあとで生まれた僕のことよりずっと大事だつたはずだよっ・・・」

「・・・かもしぬないけど。時間が短いし、俺だと駄目か？俺がカリスが好きで大事だつて言つても、会つたばつかで時間短いし家族じゃないし、そのうえーーーだし・・・。おまえにとつて俺の気持ちなんて価値ないか？」

カリスが言うとおり、ガレはカリスの母親を知らない。だけどそういうことではなくて、もつと単純でガレはカリスのことが好きだと思うから。

カリスを産む女人に会つことがあつたなら、きっと言つだらうと思つた。カリスを産んでねと。たとえそのあとその人が死んでしまつと知つても。

「俺の言葉なんて、いらない？」

「・・・そんなことは・・・・」

辛抱強く待つているとカリスは返事をくれたのだ。

「ないつ・・・・」

小さく言つたあと、わあつと大声を出した。

目を覆つていた手が外れるとガレにしがみついていた。

ガレに縋り付くようにしてカリスは夜中までずっと泣いていた。これまで気が付いてしまつたあと、ずっと一人で口にも出せずに我慢してきた思いだつたのだろう。

深い悲しみだつた。自分が生まれた直後に母親が死んだのだと聞かされたら、衝撃はとても大きいものだろう。

そんなものは簡単に忘れたり消せるわけがないし、どんないい言葉でくるんであげてもすんなり納得などできないことだとガレも思つた。

だけど、心の中で石のように固まつてしまつて、カリスは触れる

ことも恐れ泣くことだつてできぬにできたと感じるから、こんな風に心の底から引っ張り出して口に出して大泣きできたことは悪いことではないのではと考え直していた。

ゾラがやつたことは、カリスの背中をなで続けていのつちガレにもいくらかは理解できたのだ。

ただし、もう少し優しい方法はなかつたのだろうかと・・・。

「お母さまは、僕を憎んで死んだと思つ?」

カリスは珍しい虫を見つけて、きやあきやあ騒ぎながら追いかけつづいていたと思つたら、いきなり顔も上げず、そんなことをガレに聞いた。

この虫はなんていう名前なの?と聞くような何気ない声だつた。

ガレは、と、いうと絶句だ。

鞄の中味を整頓していた手を止めて、カリスを見る。カリスはガレを見ていなかつた。ガレは横顔を見つめながらじっくり考えなくてはならなかつた。

よく考えて、見つけた答へだつた。

カリスのための慰めとか、きれいごとではなくて、率直にそう思つたことだつた。

「そんなこと、なんにも考へていなかつたんじゃないのか?・・・よくわからぬけどお産つて、大変で苦しんだる。死んじゃうお母さんの話、他にも聞いたことあるし・・・。だからさ、そのときは生まれよかつた、大変なこと乗り越えて良かつた・・・つてホツとしていたんじゃないのかな・・・」

「それだけ、かなあ。・・・きっと・・・そうだよね。僕もちょっとそうかなつて思つたんだ。まだ僕のこと、産まなきやよかつたとか、嫌な子とか考へる余裕なんてきつとなかつたよね・・・」

カリスはゾラに口出しされて、気持ちをしゃべつて、怒つて泣いたことによつてどこか変わつたとガレは思つた。

翌朝、泣いた影響で目が腫れていた笑える顔になつてしまつていたがカリスも笑つていた。元々カリスのイメージは、笑顔だつたけれどそれまでとはまた違つて力が抜けた笑顔だつたような気がしたのは、考えすぎだらうか。

でもやはりどこか変わつて、肩の力が抜けたのだろう。

今まで自分のことを積極的にしゃべるとはしなかったのに、ましてやカリスの悩みの核となるような母親の話は触れるのも嫌がつていたはずなのだ。

それを自分から口にした。

少々、ガレが返事に困る難しい内容だつたが・・・。  
無神経にならないように、無責任にならないように。

そしてカリスが拘つている、嘘にもならないように慎重に考えてみてガレは口にする。

「すぐだつたんだろ・・・だつたら、さ。やっぱり、元気に生まれてよかつた、ってそれだけだつたと思う」

「うん。そうだね！ガレもそう思うんだし、きつとそうだよね！」

虫を草むらに追いやつたカリスが立ち上がりて振り向いた。

お姉様やお父さまの気持ちは無理でも、と前置きをしたあと「でもお母さまは、僕のこと、ぜんぜん時間がなかつたんだもの、まだきつと嫌いじやなかつたよね！」

嬉しそうな笑顔で言うカリスが、ガレにはとても眩しかった。  
眩しすぎて、少しちなかつた。

そして、そのあとはさらに返事に窮することになった。

「ね、ガレ。ゾラつてさ、結局、僕に家に帰れとは言わなかつたんだよね・・・」

ゾラは今、出発前の準備で近くの小川に水を汲みに行っている。  
だからガレは、カリスと二人待ちながら荷物の整頓をしていたわけだが、着の身着のままポケットには高価な宝石がいくつか入つているとのことだが身軽なカリスは出発寸前のアクシデント、目の前に現れた虫も無事、踏まれないような草むらの奥に救助しあえた。  
準備は終わつたとばかりに、ガレの前に戻つて踏み固められて土が剥き出しになつている地面にぺたんと腰を下ろしている。

「・・・それは、おまえが怒つて泣き出したからだろ？」

「・・・うん。もつといいろいろ言われると思つたの。帰れつて、家出は駄目なことだ、さつさと帰れ、子どものくせに・・・とか。でもそういうのとちょっと違つたね・・・」

「そりだよな・・・。まだよくわからないけど、いつまで続けるつもりだとは言つたけど戻つた方がいいと言つてないよな・・・」

「じゃあ、ゾラはこのまま放つておいてくれるかなあ！」

「・・・おまえさ」

ガレは、思い切つて今までだつたら決して聞けなかつたことを口に出していた。

今のカリスなら、聞いても大丈夫だと感じる、ガレにとつてもとつても重要なことだつた。

「おまえはこのままいいのか。・・・」うう生活、辛いんじやないのか？」

「ゾラがいいて言つても、ガレが反対するんだ」

カリスは薄い苦笑だつた。

「違うよ、そういうことじやないだろつ！」

静かな笑みを皮肉げに口元に浮かべたカリスにゾラは大慌てだ。「実際、血が出るほど肉刺ができるんだ。それに今までとは食べ物だつて、おまえぜんぜん違うんだろ、ベッドだつてないんだし・・・。そういう生活をずっと続けるんだぞ、俺と一緒に来るつてことははずつとだぞつ、おまえはそんなんでき・・・・・いいのかよ・・・」

・・・

言いながらだんだんガレの声の勢いがなくなつていつたのは、理性が薄まりガレの気持ちが入りこんでいつたせいだつた。

いいのかよ、とカリスに尋ねながらガレは、それでいい、このままがいいと思つてゐるのだから。

肉刺だらうと、ニンゲンで体力のないカリスで毎日くたくたにならうとも、ガレはカリスに戻つた方がいいとは言えなかつた。

戻れと言いたくてこんな話をしてゐるわけではなくて、戻らないとはつきり聞きたいから言つてゐるのだと自分でもわかつただろう。

カリスはすぐに返事ができないようだった。

静かに何かを考えている。

即答が欲しかったのに。

ガレはどんどん不安になつていく。

言い出しながら先に堪えられなくなつたのは、ガレだった。

「・・・このまま、一緒にいればいい」

「・・・ガレ。でも・・・」

「・・・ベッドも家もなくたつて生きてゆける。食べ物ならこれからは少し多目に俺が一人分を調達すればいいことだし」

「・・・でも、一番の問題は、僕が一緒にいるとガレみたいに早く走れないもの。ガレの足を引っ張ると言つことだよ」

「慣れたら走れるようになるさ」

「ならなかつたら?」

カリスは水を差すようなことを淡々と言つのだ。

「僕のせいで、ガレが楽園にたどり着けなくなるつてことにもなるかもしねないよ」

「じゃあ、おまえはやつぱり、帰りたいと思つてているのかよつ!」

欲しい結論がカリスからぜんぜん出てこなくてガレは、腹立たしかつた。

「だつたら、はつきりとそう言えればいいだろ!」

怒つて立ち上がつたガレの前で、カリスはそのまま座つてただガレの顔を見上げていた。

「・・・帰りたくない。ガレとこうしていたい

それはガレの欲しかつた返事だ!

しかし、でも、と続きがあつた。

「こうしていく本当にいいのか・・・は、よくわからない・・・。僕が足を引つぱり続けたら、ガレはそのうち僕のことを嫌いになるね。それだけじゃなくて僕のせいで悪いことになるかもしねないよね。・・・だつたら、僕は我慢して帰つた方がいいのかもしねない・・・」

「そんなことないっ！」

「・・・でも。ガレは追われたりするでしょ。そのとき、僕はお荷

物だよ」

「だつたら、カリスがゾラのときみたいに、俺の背中に素直に乗ればいいんだ！」

「・・・」

「俺は二ングンじゃないから、カリスと同じぐらいの背だつてもぜんぜん違うんだ、強いんだ。それに俺は獣人の中でも優秀な方だぞ、力は強いし走るのも速いし体力もある！だからカリスぐらい背負つたつて、俺は平気なんだ、ゾラじゃなくたつて！…」

「・・・ガレだとちょっと恥ずかしい・・・」

「そんなん気にすんなよっ、いいじゃんかそれぐらい！」

強く力説したガレは、大きく肩で呼吸していた。

「・・・恥ずかしいかもしれないけどさ、少しだけ我慢してさ・・・」

俺と一緒にいようよ。・・・いろよ・・・

カリスはすぐに返事をしなかった。

しばらくガレから目を逸らして下を向いていたあとに、ガレと同じぐらい小さい声だつた。

「考えてみるね・・・」

「今日は大人しいんだなあ」

ゾラが歩きながら静かな背中をからかっていた。

「大泣きしそぎて疲れが残つているのか？」

「うるさい」

と今日も、だいぶん良くなつてはきたものの足の肉刺はまだ痛々しい状態というガレとゾラの揃つた意見によつて背負われているカリスは低く文句を言つたあと、その生意氣を吹き散らすように明るい声になつた。

「僕も少し反省していたの。ハゲの人にハゲハゲと、本当だつても

言っちゃあいけないんだなって。ううん、実際ハゲは本当だから、余計にハゲハゲハゲと言われることはハゲのゾラにはとっても辛いんだなって凄く反省していたの。ゾラ、ごめんね。素直にハゲをハゲって言つて……「ごめんなさい！」

それは、泣いたことは触れられたくないことであり、そういう嫌な点を突かれたカリスの逆襲だろう。

いつたい今、何度、ハゲと笑顔のうちに言つたのか。

カリスの性格はとても怖いとガレはしみじみと思った。

ゾラは。

「おまえ、ほんといい性格しているなあ」

感心していたが、

「でも今、ガレが引いたな。今のおまえの性悪さに確実に一步嫌いになつておまえから心が離れていた。・・・ああ、考え無しは今、とてつもなく大きな後悔だな、可哀想に・・・」

厳かに言われて、カリスははつとした顔になつて隣を歩いているガレの方を見た。

ガレはぶんぶんと顔を横に振つて、真顔になつてしまつているカリスに心配ないのだと伝えたが、やはりと思つた。

ゾラの方が上手だ。

そのあとカリスは落ち込んだのか黙り込んで、一行はザクザクと歩いて行く。

三人、いや歩いているのはガレとゾラの二人で、カリスはゾラの背中だった。

足の長さのため、同じ一步でもガレよりも先に進むゾラのため、進行はゾラ先に歩き、ガレが付いて歩くというかたちになつていた。確かに歩みだった。

子どもだけど獣人なのでそのくらいガレも平氣だったが、見方を変えたとき、大人だけどただの二ングンのゾラの体力もたいしたもので、ほとんど疲れ知らずで歩くのだ。

二ングンに、こんなレベルが「ロロロロ」となるとかなり怖い、

とガレは再び考えざるをえない。

そうして、これからどうなるのだろうと歩きながら考えていた。  
ゾラはガレの敵のハンターではないにしても、カリスにとつてどうこう存在になるのだろうか。

いつまで家出を続けているのだと昨夜、言い出したゾラ。  
結論まで問いつめなかつたけれど、今の状態を好ましくは思つて  
はいらないのだろうと思つた。

客観的に言えれば、良くないとガレも思う。

黙つて家を抜け出してきたと、失踪中のカリスなのだ。  
家族は必死になつて探していく、だから捜索の手は一人の元まで  
伸びてきているのだ。

だけど、ガレは思うのだ。

カリスと一緒にいたいと。

このまま一緒にいたいと。

カリスだつて戻りたくないつて言つてゐるのだから、悪いことじ  
やないと思つた。

無理矢理、自分が引きずり回してゐるわけじゃないのだから。  
このまま一緒に旅をする生活だつて、カリスにとつても悪いこと  
ではないはず、だつて絶対、そんな風に母親が死んだことを誤魔化  
してきて明らかになつてしまつたのなら、いい気分なはずはないの  
だから。

カリスだつて。

そう。カリスが言うとおり、カリスの家族もだ。本氣で少しあは母  
親を失う引き金になつたカリスのことを疎ましく思つてゐるかもし  
れない。

きつと・・・そうだ。

「おい、そつちもえらく静かだな」

ゾラに声をかけられたガレは、ビクッと背筋を震わしてしまつた。

「俺も少し考え方・・・」

「おまえもハゲか?」

渋面な顔を作つて言つたゾラにガレは、違つ、と首を横に振る。短い否定のあとは沈黙だつた。

すると

「・・・面白みのない奴だなあ」  
言われて何となく傷ついたガレのために、「ガレを苛めるな、ハゲ」とカリスが援護に出たものだから、また急に一行は賑やかになつた。

カリスと一緒に楽園を目指そつとガレは思った。

ガレは決めたのだ。

カリスと一緒に、行くのだ。

最初に決めたとおりだ。最初からカリスは自分で、ついて行くと言つたではないか。

だから、これははじめの予定通りのことだ。  
自分はカリスと一緒に楽園に行く!と――。

「カリス、服を脱げよ!」

「え?」

カリスはとても驚いた顔をしてガレの方を見たが、ガレは真剣でだからカリスは余計に戸惑つてしまつたようだ。

「きゅ・・・急にガレつたら、何を言い出すんだよう・・・」

お昼ご飯の休憩で、日差しが高く一番高温の時間は少し道ばたの木立の木陰で休むことにした、そのときだつた。

「だから、その着ている服を脱ぐんだよ!」

「こらこら。昼間の明るい往来で同性不純交流はお兄さんとしては認められんぞ」

「違うよつ、何言つてんだよ、ゾラは!」

「じゅんと根っこを枕に寝ころんでいたゾラが顔から腕をのかせて

じろつとガレを睨んだが、ガレもきろつと睨み返していた。

馬鹿じゃないのかと、と言わんばかりの口調で言ったガレは、それでも一人先走っていることを反省して説明をはじめた。

「だから、カリスの高そうな服は目立つんだよ。俺はゾラと親子と何度も見られたのにカリスは一度も言われなかつた。このなかで一人、なにかが違うって思われるんだ。まずその服だよ。高そうでこんな野山を行く旅行服じゃないんだよ、だからおかしいと思われるんだよ」

下着や肌着は何度か手で洗つて清潔にしていたけれど、カリスは着替えを持たないままの状態だつた。ここしばらくで、青い上着は少し草臥ってきたようだつたが、光沢の良い上質な空気は仕事の行き帰りの農夫や、マントを着る旅行者の目には場にそぐわない奇異と映るだろう。

今更だつたが、気が付いたガレは躍起になつて改善をせよつとしていた。

「目立つんだよ！ 駄目だ、それは脱いで代えた方がいい！！」

「でも、着替えを持つてないよ？」

「俺のを貸してやるよ。靴もどつかの街にいつたらもつと楽なのを買ってやるから。そうすればカリスも普通の感じになつて変だと思われない。目立つて人の記憶に残るのは一番駄目なんだ、情報になつて追いかけられることになるんだから！」

「そつか。・・・そうだね・・・わかつた」

頷いたカリスが上着のボタンを外しに掛かり、ガレは自分の鞄をあさつた。

今、着ている物とよく似た黒色の質素の衣服だつた。

「ちゃんと洗つてあるから、大丈夫だ」

手渡したガレ、カリスは素直にそれを受け取つたのだ。  
しかしそのとき、ゾラから“待つた”が入つた。

「こらこらこら

「不純同性行為じゃないぞ」

ガレが眞面目な顔つきで言つたが、ゾラは納得はしなかつた。起きあがつてゾラも普段のにやけ顔ではないため精悍な顔つきは怖いような野性意味を際だたせていた。

「目立たない物を着せて、どうする氣だい、おまえ」

「行くんだよ、おばさんのところ」「元気！」

ゾラには内緒があるため、樂園ではなくおばさんのところだと話してあつた。

「カリスを連れて？」

「そうだよ。最初からそう言つているじゃん」

カリスは神妙な顔で黙つている。

だからガレはカリスの保護者のようにゾラに対峙していた。

「おまえも、本氣でガレにくつづいて遠いおばさんの家まで行くつもりか？」

尋ねられたカリスは。

「わからない。行きたいと思つていたけど、どうせそのうちガレに置いて行かれるんだと思つていたよ。・・・でも連れてってくれるなら僕は・・・」

「無断の家出のまま、もう家族に会わないつもりなのか？」

「そうだよ、カリスはそう決めたんだつー！」

「おまえは黙つてろよ。おまえとは今、話はしたりん」

びしゃりと男に言われて、ガレは不満そうにだつたが口を開じた。

「・・・駄目なの？」

カリスは反対に、ゾラに質問だつた。

「だつて、きっと僕のこと、みんな嫌いだよ。口ではそう言わなくとも心の中では嫌いだよ。嫌いじゃなきやおかしいよ・・・。僕はお母さまとお話ししたかったし、どうして僕にはいないんだう、僕にもいて欲しいとずつと思っていたもの。でもそれは僕のせいだつたんだ。僕が生まれたことで、みんなからもお母さまを奪つたんだものね」

今のカリスは泣いてはいなかつた。

泣かずに冷静に、痛々しいほど静かな言葉が紡がれるのだ。

「きっと、僕はあの家にはいない方がいいんだよ。僕を見ればお母さまを思い出すだろうから。僕はあそこにはいない方がいいんだ。大人で良識もあるし、体面だつてあるから口に出しては言えないけど、きっとそう」

ガレはカリスの代わりのように苦しそうな表情になつてそれを聞いていた。

ゾラは、唸る。

「言つていることは間違つているとは言わんさー。」

「僕は、ガレが好きだ。ガレも僕のこと好きだつて言つてくれる。邪魔じやないつて言つてくれるなら、僕はガレと行く。たぶん、それが一番いいことだ」

「間違つてはいないが、おまえは最大の重要なポイントを見落としている」

ガレとカリスが同時に不思議そうにゾラを見つめた。

ゾラは頭ごなしに反対だと怒鳴りつけようとしないから、聞く耳がもてるのだ。

「それは」

「なに?」

「不可能、つてことだ」

での、その言葉にはがつかりだつたガレが失望もあらわな声で、「なんだよ、それ。・・・だけど、今だつてさつ——」

「まあ、聞けよ」

ゾラは気色ばむガレを遮つた。

「本気で追つ手から逃げ延びるつもりなら、バラバラに別れるべきだろうよ」

「別れる?」

カリスが驚いたように目を大きく見開いた。

「そうだろう。追つ手に捕まらずに自由に生きたいなら、お互いを連れることは不自由だ」

自分は追われながら、そのうえ連れも別に追われているなら一重に警戒していなくてはならない。

助けになることもあるだろうが、逆に足を引っ張ることにだつてなりかねない。

「足の引っ張り合いになるだけだろうて。本気で、逃げ延びることを考えるならそれぞれ一人ずつになるべきだ。お互いの危険性をも、ひつかぶるなるて馬鹿げたことだぜ」

「そんなつ、そういうのはガレには当てはまるけど、僕には無理じゃないか！」

「ただ家出を完遂したいということなら、その方が安全だと言つているんだよ」

顔色を変えたカリスに、ゾラは冷徹だ。

「おまえはこういった生活が苦手だと踏まえてもだ、ガレと一緒に行動するよりは可能性は大きく膨らむだろさ」

ガレは口を堅く引き結んで無言に憤つていた。

ゾラの言葉は正しいと思つたから、口答えはできなかつたのだ。獣人であり、ハンターに追われる自分が一緒にいることで巻き込んでカリスのみに及ぶ危険は増えるだろう。

刃物、流血沙汰になることにもなる日常をガレと行動すればカリスも体験することになつてしまつだらうから。

早く走れないカリスを連れることはまた、ガレにとつてもカリスを庇わないとならない負担がかかり、旅の安全はぐんと下がつてしまふだらう。

わかつていてる。

言われなくても、わかつていた。

だけど、それでもガレはカリスを連れて行きたいと思つたのだ。気づかないならさいわいに、カリスにその危険性を隠しても、だ。

だけど、またしてもゾラが、暴いてしまつた。

ゾラによつて知つてしまつたカリスは——。

ガレはじつとカリスの言葉を持つていた。

やめると言こ出せないだらうかと怯えながら。

「ねえ・・・」

カリスは口を開いた。ガレはぎゅっと身を強ばらせた。

「ガレと一緒にだと、どうして危険なの?」

カリスは不思議そうに小首を傾げたのだ。

「ゾラのお兄さんは、何のことと言つてているの?」

わからないと。

頭の回転が良くて、実際に可愛くて、その上性格も普段、可愛くぶつっている様子だけビガレには、カリスが話がわかっていないとは思えなかつた。

が、カリスは大きな瞳をしばたたせるだけなのだ。

「どうしてガレと行くのは危険なの? ガレは僕の家出を連れ戻そうとやつてくるお家の人たちと一緒に追われてしまふことになるから、駄目だよねえ・・・と思つていただけど、ガレは、どうして。僕が危険なの?」

カリスの質問の前でゾラは、男らしい大きめの唇の端を吊り上げていた。

「・・・ガレは・・・」

ゾラの言葉はこれまでとは違つて濶んでいた。

ガレは、獣人だから危険だからだ――。

ゾラは口ごもつてゐるが、カリスの中でくつきりはつきりと『えられなくてもわかつてゐる返答はこれだらう。

だけど、これは、ゾラには秘密のものだつたはず。言つていない。自分もガレも。

それをゾラは知つてしまつていて言つことだらうか? だつたら、どうして、いつ、気が付いてしまつたのか。

カリスの疑問はここだつた。

ゾラはいつたい、どういう人なのだらうか・・・。

どういうつもりで自分たちに関わっているのだろうか、この人と一緒にいて大丈夫なのか。

体力が無くてガレに守られるだろう自分。だけど、できることでちゃんと自分だってガレを守るのだ。

真偽を見極めようとするカリスの直視にゾラは言った。

誤魔化したのだ。

「ガレはぬくぬくなおまえとは違つて野良に生きてきた部類だらう。善良ばかりな振る舞いでやつてこれたと思うか？」

「ガレは悪くないもん！ そういう風にしないと生きていけないっていうなら僕も同じようにできるようになるもん！…」

言つて、ふんとカリスは男から顔を背けた。

言わないつもりならこつちだつて、それなりにするものね。とは、カリスの内心だった。

「ゾラ、ムカついた！ ガレ、向こうで一人で休憩しよう…！」

ガレの手を引いて、カリスは歩き出す。

「おい、こら」

「まだ休憩時間あるものね。いいでしょっ！」

ふくれつ面を隠そとしないカリスに、あまり遠くに行くなよと、ゾラは諦めのため息だった。

カリスに手を引かれて少しガレは歩いた。

クヌギの古木と茂みを迂回してゾラの姿は全く見えなくなつて、ここなら普通にしゃべる会話なら聞こえないだろうという場所までやつてきて、カリスは草の上に、よつこらしょと年寄りのようになつて座つた。そして持つてきていた着替えを地面に置いた。ほらとその横の位置を手で示されたので、ガレは、カリスのかけ声を真似することなく無言で座つた。

「あのね、ガレ」

甘く澄んで優しい女の子のような声でカリスは言つ。

「・・・なんだよ」

ガレはゾラが言い出した不穏な内容のために暗い気分になつていた。

聞いたカリスはどう思つてゐるか、想像が付かなかつたからだ。カリスはガレにはよくわからない。

だからこの時だつて結果はやはり、悪い想像すらも軽やかにほんと超えた驚くことだつたのだから。

「ゾラ。お別れ、しちやう？」

平然とした顔でカリスはガレに言つた。

そして返事を求めるのだ。

「ゾラ・・・。ちょっと嫌な感じ。意地悪を言つ・・・」

「・・・でも、意地悪じやなかつたら？」

カリスの提案に飛びついで頷けばよかつたのに、ガレにはそれができなかつた。

自分でも馬鹿なことをいつていると思いながら重い口を無理矢理のように動かしたのだ。

「ゾラが言つことは本当だつたらどうする？・・・きつとせ、大変だよ、俺と来るのは・・・」

「ガレは、嫌なの？」

カリスは驚いたような高い声だつた。

「俺はつ・・・」

「ガレは大変だから、僕なんかと一緒にいるのは嫌？」

「俺は違う、けど、おまえが大変だつて言つてんのつ、今だつて足の裏、肉刺だらけになつてきついんじやないか！」

「僕は、きついて思つていないよ。ガレは優しいし自分のことみたいにきついて感じてゐるだらうなつて心配してるとど・・・。」

こうしたことだつて本当は言わないでおこうと思つてゐたのに、ゾラのせいでバレちゃつたね。・・・そつなると、やつぱりゾラつてとっても迷惑だね・・・」

嫌そうに顔を顰めたカリスに、ガレは話が、またズレてるつて怒

りたい。

カリスは話をすり替えるのが上手いのだ。

「でもさ、おまえがこだわっているとおり、嘘はついていないよ。あいつの言ひとおり、おまえだってそのうち旅に慣れてくだろうし今よりかいろいろ上手くできるようになる。そうなったおまえは一人で、俺とは一緒にいない方が安全なんだよー・ハンターの怖さだつておまえは何も知らないんだ、逃げ延びたあとだつて何度も何度も夢を見るんだぞ、それだけじゃないつーーー」

一緒に来るなどガレは説得したいわけではないのに、心は悲鳴をあげながら、でも言わずにはいられなくて、それはただカリスを望む自分の首を絞めることなのに！

すると、カリスはガレを遮つた。

「だつて。・・・一人は嫌なんだもの」

溢れるように言いたいことはまだ山ほどあつたはずだつたけど、ひつそりと紡がれたカリスの言葉にガレは止まつた。

「僕はガレと一緒にいいんだもの。ガレにとつて迷惑かもしけないけど・・・」

「どうして・・・」

信じられなかつた。

なぜ、そんなことをカリスは言ひのか。

どうして、そんなことまで自分は言つて貰えるのか、ガレにはわからなかつた。

「・・・なんで・・・」

すると何でもないことのように、カリスは柔らかく笑つて、だつて、と言つた。

「だつて、僕はガレが好き。ガレも僕のこと好きでしょ。だからしかし、そのあとでカリスは不安を滲ませた顔になつて「違うの？・・・ガレも本当は僕のこと嫌いなの？」

ガレは首を横に振つていた。

声はあとからになつた。

「・・・違つよ、好きだよ・・・凄く好きだよ。・・・好きだから  
こいつのうちに巻き込んでいいだろうって、俺は・・・好きだ  
つたら駄目だつてつ・・・」

「ガレ。・・・泣かないでよ。ガレが泣くと僕も悲しくて嫌な気分  
になっちゃうよ。泣かないで・・・」

カリスは腰を浮かして自分より大きなガレの身体を引き寄せて抱き  
しめていた。

優しく大事な家族のように。

黒い帽子からこぼれる黒い髪を指で梳いて小さく丸めて込み上げ  
る嗚咽を必死に噛みしめている背中を撫でてやる。

「ねえ、ガレ。一人でゆこう。ゾラとはお別れしよう。いいよね?」  
「うん、どガレは手の甲で止まらない涙を拭いながら言葉なく頷い  
た。

ゾラも良い奴かもしれないけど、ゾラはカリスを引き離そうとする  
なら、三人は望めないなら、カリスだけでいい。

カリスがいればいいと思った。

カリスと二人で。

ガレと一人で。

自分のことを好きだと黙ってくれるガレと一緒に。

ガレにとつて良くない選択かもしれないけど、優しいガレに甘え  
てしまつてだ。

カリスはそう決心した。

二人は。

一人で行こうと決めたのだ。

決心のあとは、呆気ないほど簡単に進んだ。  
すぐ実行したわけではなかった。

一行が進んでいた道が小さな湖に差し掛かったときだった。

「絶対に覗かないでよね。いくら僕が、可愛いって言つたって、僕

は一つ以上年上はお断りなんだからつー！」

「なにを、お断りだという、糞餓鬼がつー！」

「ガレが一緒に水浴びするんだから平気なんだから、ちょっとでも覗いたら一度と口聞いてあげないからねつー！」

眉を吊り上げて威嚇するカリスに、ガレは本当に、以前そういう怪しいことを体験したことがあるんだろうかと心配になつたほどだつた。

鬼氣迫る雰囲気の前で、ゾラの方もカリスの言つとおり、水浴びの光景を決して覗かなかつたようだ。

だから。

成功したのだ。

心中でカリスとガレの二人は、ゾラの優しさに感謝して、そして、ごめんなさいとそれぞれ謝つっていた。

余分にある上着をゾラから見える木の枝に残したままで、二人はそおつと足音も忍ばせて湖を後にしたのだ。

カリスはガレの背中に乗つかつていた。

ガレの言葉通り、ガレはほとんど変わらない背丈があるカリスを背負つても平気な様子で山の斜面を駆け上がつて、滑り降りて走り続けた。目指していた街からも大きく離れることになつてもガレはゾラから離れるために走つた。

藪を飛び抜け、木の根を蹴つて無言で走つていた。背中で弾んでいるカリスの身体は、迂闊に口を開けるなら舌を噛んでしまうことともう一つは、黙つて置き去りにしたゾラへの罪悪感が彼らをしゃべらせなかつたのだろう。

それでもまだまだ軽やかに、しばらく動き続けそうな足運びがぴたりと止められたとき、ガレとカリスは元通り一人になつて、木立の果てに沈もうとするオレンジ色の夕日を静かに眺めていた。

じつしてゾラから離れて、元通りに一人になつたとき、大きな危

険を回避し、た気持ちになっていた。

安心感を重視して、存在に心を乱されるゾラから自分たちで離れるこことによってもうすべてが平気になるはずという気分になつた。

そのあとは穏やかに、カリスとガレだけのペースでやつてゆけるだろうという予定はその晩すぐに、第三者から崩されることになつてしまつた。

最悪の展開と言つてもいい。

二人の決断が裏目に出たのだ。

強くて油断できないと感じたゾラだ。彼を遠ざけたとき、彼の力を心から求めるという皮肉な結果が一人を待つていた。

夕方になつて、野宿の準備に取りかかつた。

ガレに出会うまでは、屋敷の外で夜を明かしたことなどなかつたカリスも、すっかり慣れて覚え、てきぱきと枯れ枝を集めて焚き火の支度ができるようになつてその様子を、感慨深げに見つめるガレだつた。

「なに、ガレ？」

「いや・・・べつに、用事はないけど・・・」

「用事はないけど、なに？」

誤魔化すべく慌てて手に持つていた火打ち石を打つていたが、小枝の山を作つて手の砂埃を払つて立ち上がつたカリスはにつこりと笑顔だつた。

笑顔で逃さない。

「・・・だから・・・凄いなと思つて・・・」

「なにが？」

カリスにはわからず首を傾げている。

「だから、何にもできなかつたのに・・・全然違う、変わつた・・・

」

「でもそんなこと言つても、ガレは普通にやつていたことだもの。

驚くことじやないよ」

「わかんないかな、その変わつたことが驚くんじやないか！」

「そりなの？」

赤い少女のような唇を不服そうに歪めていたが、言いいたいことはちゃんと通じているようで頬のあたりが嬉しそうに持ち上がつているように感じられて、ガレも満足な気分だった。

とにかく、ガレはカリスに対して、凄いと思つていてそんな相手と一緒にいられることが嬉しいのだ。

ゾラに対する後ろめたさ忘れるために、ずっと楽しく陽気に笑つていていた夜だつた。

だから少しはしゃいでいた。

ふとすると伏せ目がちに頬に長い睫の影を落としてしまつカリスも明るくあれよつとに言葉を途切れさせることを避けて、取り留めもないことをずっと考え、言葉に紡いでいた。

今日は良い天氣だつたね、星が綺麗だよね。食べ物が少なくなつたから、もう少し少なくなつたら町か村に――その前に、狩りをしなくては。

うん、そうだね。そうだね、とカリスは頷いて夜が更けていくうちに、うつらうつらと身体が揺れるようになつてきた。

穏やかな星の光がにぎやかな夜で、膝を抱えた姿勢で穏やかに舟を漕ぐカリスの肩を優しく押してやつて身体を横たえさせると、ガレも意識も薄れるようになつていていた。目を何度もしばたたかせたけれど眠気を追い返すことはできなかつた。昼間にカリスを背負つて走り続けた疲れと緊張が溢れでてきたようだつた。

そのときだ。

一瞬、ガレも眠つたのかもしれない。

一瞬じやなかつたのかもしれない。

酷く近くで物が動く気配がした。

座つて膝を抱いた腕の上に伏せていた顔を上げたとき、音は一挙

に数倍に膨れあがつた。

痛みだつた。腕を掴まれて引っ張られた。

逆の肩は強い力で地面に押さえられるようになり、身体が二つに裂け るのかと。

ニンゲンの臭いだつた。

急に、風下から現れただけでなくて臭い消しが使われていた。

今の時期にはあちらこちらで咲く山の木の花の独特的の強い香りが、木の根元にいるように。

いくつものにやけた男の顔だつた。ひげ面の凶暴そうなニンゲン の——。

頭に大きく響くの嫌な音は鋼が擦れてたてる不穏な音だつた。

「ガレッ！——」

眠つっていたカリスも目を覚ました。せっぱ詰まつた悲鳴だつた。

カリスを助けないといけないとガレは思つた。

カリスはただのニンゲンで、弱いのだから。

「ガレに、触るな！」

衣擦れの音、地面を踏みしめる荒々しい音を、けれどガレは土に顔を押さえつけられて耳に聞くことしかできなかつた。

「このつ、おまえは関係ない、大人しくしてろつ！」

暴れているのだ、カリスに向けられる苛立つた怒声だつた。

「やつ、離せ、馬鹿つ！！」

カリスの悲鳴と怒声、荒い息づかい。カリスは必死に彼の自由を妨害しようとする男達に応戦しているがわかつた。

カリスを相手しているのは、地べたのガレは下半分ぐらいしか見えなかつたが大柄で鈍重そうな男一人だつた。

男にとつて少年はか細く強く握つたら壊れそうで、だから強く掴めずそのためすばしこく手足を男の手から取り戻し巧みに逃げようとする子供に大男は手を焼いていた。

一方、ガレを押さえつけていた男はもう少し俊敏で鋭い雰囲気を纏つた三人だつた。大柄な男より手強そうな者たちで、なぜなら本

命はガレなのだから、そういう力配分だった。

ハンターが追っているのはガレ。

獣人の珍しいガレは市場に売れるのだから。旅芸人の物見小屋、お金持ちの愛玩動物、はたまた最近では珍しくなった学問材料、特殊な処置を施した骨は万病に効く高価な薬の原料とも聞かされた。

もつともガレには、自分がそんな薬になるなんて信じられなかつたが、信じている二ングエンがたくさんいるからこうした目に遭わされるのだとは思った。

どこからか情報が漏れるか、うつかり街で見つけられてしまつたのかガレを目的に、この男達が一人の元にやつってきたことは今や明らかだつた。

強く体を押さえられた拍子に、ガレの猫耳を隠していたおばあさんから貰つた帽子が跳ばされて地面の上に転がつて、男達の足にぶつかつてさらに遠くに蹴飛ばされていった。

顕わになつた黒い髪のなかに聳える二つの耳を乱暴に引っ張つてガレに悲鳴を上げさせた男は、ぐひ、と押さえ撲ねたような、でも満足そうな声だつた。ガレにとつてはこの上なく不快な笑い声を漏らしていた。

頭にきた。

目の前がくらむほど頭にきたが、ガレにできそなことはこれだけだつた。

「そいつ、そいつはつ、関係ないだろ！汚い手で、乱暴に触る——

——

必死で身体を起こすように力を込めながら、でも触るなとは、最後までガレには言つこともできなかつた。何本もの手に押さえ込まれたままで、さらに離れていたもう一本の手がガレを目指した。首根っこに棍棒を痛烈な一撃を食らつたガレの意識は煮え湯に流されたように爛れて途切れ、ガレの身体は地面の上に沈んだきり、ぴくりとも動かなくなつた。

「ガレ、ガレ——」

暗い山の中で、少年の悲痛な叫び声が響いていた。

「ガレ・・・・、返事、してよお——・・・」

星が出ている晴れた夜で、そのうえ、いつたん引き返したカリスは焚き火から炎を一本の枝木に移して捧げ持つて、道ない夜の山野を一人きりで歩いていた。

嵐のようなひとときだったのだ。

カリスは眠っていた。

それでも痛いと、呻いて目が覚めた。

きっと男の足が偶然、カリスの身体を蹴つ飛ばしたのだろう。普段起きの悪いカリスだつたが、ぼんやり目を開いたときに目の前に繰り広げられていた光景は、カリスに“普段”を許さなかつた。

飛び起きて、ガレを助けようと思った。

ガレから引き離そうと思った。

ガレの黒い帽子が跳んでいて、男達の間にガレの頭の黒い猫のような耳が見えて、それはカリスでさえまだ触らせてもらつていないと大事な耳だつた。それなのにいきなり現れた男達は無理矢理に、ガレの耳を引っ張つてガレは悲鳴をあげた。

「ガレつ・・・どこだようつ・・・」

大男が太い手でカリスの手を掴んでいて、そして意識を失つたガレが大きな麻袋に入れられたのだ。そうして袋の口は縛られて、小柄で太めの男に背に荷物のように担ぎ上げられた。

ガレが連れて行かれてしまうと慌てたカリスが決死の勢いで大男の腕を振り切つて駆け寄ろうとしたが、逃れてもすぐに捕まえられていた。

「こいつはっ！」

怒りがこもつた声と同時に、強い力がカリスを後ろに投げ飛ばしていた。

軽い丸太のようになると空を切つた小柄な身体は、すぐに一本の木の幹にぶつかつり、肩をしたかに打つて根元に落ちていったカリスの視界は涙が滲んだ。襲われた痛みには呻き声も満足あげられなかつた。

蹲つて痛みが薄まるのをじつと待つてから、カリスがのそりと木につかまつて立ち上がつたときにはもうあたりには静かさが戻つて、パチパチと焚き火が燃えているだけだつた。

カリスの前から四人の男達も、ガレの姿も消えてしまつていたのだ。

カリスは、ガレを探していた。

最初は走つていたけれど、転んでから足首が痛くなつて上手く動かなくなつてしまつていた。灯りで足下を照らしながら足を引きずるよう歩きながら、ガレを追つていた。

どつちに行つたのかもわからなかつたけれど、じつとしていられないなら、とにかくカリスは進むしかないのだ。

最初は呼ぶ以外はじつと奥歯を噛みしめていた。  
けれど今では呼吸するためにわずかに開いた口からはすすり泣きが止まらなくなつっていた。

「ガレ・・・どこだよ・・・返事、してよつ、じゃないとわからな  
いよおつ・・・」

嗚咽の間に、声を張り上げてガレを呼ぶ叫び声だつた。

見つけられないハつ当たりなのだ。怒りの色と、そして聞くもの的心を潰すような強い悲しみが交互に居り混ざつた声だつたが、夜の中からカリスに返事を返してくれる求める声が聞こえることはついになかつた。

## ガレとカリスと、ソラの物語 7

ガレ。

「ガレ、ガレ。」

「ガレ・・・」

足首が痛い。足の先が焼けるように痛い。

歩けなくなつたカリスは一本の古い大木の太い根つこと根つこの間にできたへこみに足を取られて転んだまま、座り込んでいた。何度も転んだせいで土に汚れた手の平や甲で涙が伝う頬を拭うので顔まで泥まみれになつていた。金色の髪には枯れ葉が絡まつていた。半分視界の縁に見えていたけれど、カリスには取り除く気力もなかつた。

ガレがいなくなつてしまつた。

一緒に楽園に行こうと決めていたのに。

ガレがいれば平氣だと思つたのに、そのガレが急に、こんな乱暴なかたちで自分から奪われてしまつたのだ。

ガレと、二人で一緒にゆく。

そのために危険な、ゾラを置き去りにしてきてこれでもう安心だと思っていたのに違つてしまつた。

ガレを目の前で奪われてしまつたカリスは、このときはじめて強い後悔を感じていた。

ゾラは強かつたのに。

ゾラは強くて、もしあんな悪いことをせずにはまだ三人でいたならあの三人など撃退してくれたかもしれないのに。

そのまえに、ゾラがいたら襲われなかつたのかもしれない。

もしかしたらずつと自分たちを見ていたけれど、ゾラがいたから。ゾラがいなくなつたから、今夜襲われたのかもしれないとカリスは思つた。

考へてゐるうちに、そうとしか思えなくなつてしまつっていた。

ゾラを追い払つたから、その罰がわりに自分たちは襲われたのだ  
と——。

「・・・『ごめんなさい』・・・」

ガレ以外の名前だつた。

「ごめん、なさい・・・ゾラ・・・ゾラッ・・・」

カリスはぽろぽろと涙を流して繰り返してゾラに謝つていた。今  
『ごろ遅いとわかっているし、自分勝手だとも。

黒い山の夜。遠くで梟の声が聞こえた。虫の声も、木々や草の葉  
が擦れる音がカリスの鳴き声を圧しつぶさんとしているように押し  
寄せていで、カリスは声を出して泣くこともできなくなつていて  
た。

一人ぼっちがとても恐い。不安で苦しくて、それが嫌でカリスは  
自分の部屋を飛びだしてきたのだ。

あそこの家では、母を殺したカリスは誰にも愛されていない、家  
族に嫌われているのだから。

それはカリスの優しさとまっすぐさ、そして寂しさのなかで生み  
出された心の闇だつた。闇の中で、有りもしないものの気配を想像  
して怯えているのだ。

でももうそんな思いも、もうおしまいになるはずだつた。

なぜつて、もう家には帰らないのだから。家族がカリスを憎んで  
いても関係ない。カリスはガレと生きてゆくんだから！

「・・・ゾラ、『ごめんなさい』・・・ガレ、『ごめんなさい』・・・」

欺して置き去りにして。  
助けてあげられなくて。  
そうして。

「『ごめんなさい』・・・お母さま・・・』『めんなさいつ・・・  
僕のせいで。

生まれて『ごめんなさい』、だつた。

「・・・『ごめんなさい』・・・」

小さく消えそうな声でもう一度言つたカリスも、その声と同じよ

うに闇に溶けて消えてしまうのではと思われる様子だった。カリスは小柄な身体をさらに小さく丸めて蹲っていた。

「よしよし。よーく反省したな。じゃあ、もう一度」  
それはそんな空氣にそぐわない明るい声だった。

耳に飛び込んできて、カリスは顔を上げていった。  
涙でぐちゃぐちゃになつた顔だつたが、暗がりの中に立つて存在  
に腕を組んでいる男の姿を認めるに驚き大きく目を見開き、次いで  
ゆつくり頬の緊張が緩んでいった。

「『ゾラのお兄さん、ごめんなさい』だ。謝つたら、心の広いお兄  
さんはほつぺたつねるくらいで、許してやるぞ」

「ゾラ・・・ガレが・・・」

「最初に言つことは？」

「『めんなさい、ゾラー』めん、謝るから、お願ひ、ガレを助けて  
！」

「ああ、酷いなあ。鼻が真っ赤だぞ？・・・ガレが見たら驚くぞ・・・

・

「ガレが連れて行かれちゃつたのつ！」

「そうみたいだな。向こうさんも、ちゃんと好機は逃がさないって  
ことだ」

ゾラにとつて、油断して一人の子供を見失つてしまい、すぐに追  
いかけてみたものの探し出すには少々時間がかかつてしまつた。そ  
の間にまんまとしてやられてしまつたということだった。

冷ややかな苦笑を浮かべていたが、それはゾラ本人に向けられた  
自嘲であり、ゾラの大きな手は優しくカリスの頭を撫でていた。

ゾラの筋肉に固い男らしい胸にしがみついてカリスは泣きながら  
訴えていた。

「ガレを袋に入れて連れていつたの、殴つてガレは動かなくなつて  
しまつたの、ガレ、殺されちゃう、死んじやう」

自分の紡いだ言葉に怯えたカリスの悲嘆がさらに深まつていた。

「死んじゃうよ、死んじゃう、ガレも死んじゃうよ！」

泣きじやくり、じつとりと男の服を濡らすカリスにゾラは、今までになかったほどとつても冷めていると感じられた。

「大丈夫だ」

ぽんと言った。

一瞬嬉しかつたけれど、何もわかつていな氣樂な言葉だとカリスは思つたから、腹が立つた。

「だから、大丈夫だ。あの小僧が自分で悲觀したりせずに大人しくていれば、すぐに殺されることはないだろうから落ち着けつて」

「・・・本当に？・・・なんで、わかるの・・・」

嗚咽を堪えて、顔を上げたカリスはゾラを見上げるとそう聞いた。

「ゾラは、わかるの、そんなこと・・・どうして・・・」

「おまえ、疑つてるんだろ？」

悪戯っぽく笑つたゾラに、カリスは不安そうな顔になつていた。

「・・・でも、ガレは何も言わなかつたし・・・僕の気のせいだと・・・お尻もぼこつとしていないし・・・」

ゾラはぴつちりとした下衣だった。

ゾラの身につける衣類が顯わにする身体のラインは、普通の筋肉の流れか、カリスと変わらない肉のつくるものだつた。そこに余分な、ニンゲンにはない物が隠されているようには見えなかつた。

「尻尾は根本から切つた」

これも信じられないほど、ぽんと言われた。

「・・・き、切つた・・・？」

「耳はもつと不自由だからな、これも切つた」

肉の部分を切つただけだから、聴覚には差し障りがないのだとゾラはカリスに説明した。

カリスは絶句して、泣くことも忘れてしみじみと男を見つめていた。

「ニンゲンの体臭の香水をつけているんだよ。・・・というか、あの小僧がドジ過ぎている気がするがな。・・・ここまで、あいつに

気づかれないとは思わなかつたな・・・

たぶん、他事に気を取られすぎていたせいだとゾラは思つてゐる。全力で、カリスに意識を向けているから注意力を欠いてゐるのだ。端から見ていてハラハラするほどに。そうしてその結果としては、ニンゲンに夜襲を許して狩られてしまつた。獣人特有の鋭敏な感覚を備えているというのに、不注意で・・・。

「その人間の耳は・・・？」

「これが？」

笑つたゾラは黒い髪を搔き上げてほとんど隠れていた人間の組織らしいものをカリスの目に晒してやる。

「当然、作り物だ。こてごて大きめの飾り物をつけていたり、髪を長めに被せていると気づかれないものだな」

「・・・耳も尻尾も切っちゃつたの・・・ゾラは、切っちゃつたの？」

「ああ。生きづらいと思ったからな」

精一杯冷静を務めたけれどカリスの声は引きつっていた。

反対に、さすがに今は明るすぎるほど陽気ではなかつたが、やはり薄く笑つているゾラはとても自然体だとカリスは思つた。

「・・・痛いつ・・・痛すぎる・・・」

「ああ、痛かつた。かなり痛かつたが、切つたときは満足だつたな。けれど最近は少しだけ後悔するようになつたな。何年経つても寒い冬の朝に切り口が傷んだりするんだと知つて、ずっと続くのかと憂鬱になるときもあるが、それだけだな。普段はほとんど痛みはないぞ」

カリスは身体を離して、目の前の不思議な男を見つめていた。

人間でもなく、自分で獣人の特徴である耳と尻尾を切り落として、獣人でもなくなつた男だつた。

そのうえ、後悔もしていないのだといふ。

カリスとガレは、強い男と恐れていたのだ。

そんな辛さを抱えてきた男だとはちらりとも思わなかつただろう。

「・・・悲しくないの・・・？」

「なにが」

「耳と、しつぽ・・・」

「寒くなつてへるといふやうとしもやけみたいに痛みだして、そうすると――」

「違ひよー。そうじやなくて、切つてしまつたことだよ。なんで、切らなくちやうけなかつたかつて、どうしてこうなんだつて！」

「そんなこと、わかつてゐるぢやないか。生きていくためだ。俺が、これからも、より良く。そのためにできることをしたんだ。そんなこと今更考えても意味がない、と俺は思つてゐる。そんなことを悩みならこれからのことを考えるだ」

言われたカリスはじつと考へる顔になつていたが、そのあとに続いたゾラの言葉を聞いてさつぱりと悩むことを止めてしまつたようだ。

「俺が、尻尾がないから悲しいかもしれないと考へ出すとする。よく考へるために座り込むだらう。これは簡単に答えは出ないだらうので数日掛けて、じつくり考へるかもしない」

「にやつと猫の耳を切り落としたゾラは虎のように笑つていた。

「そつとしている間に、ガレの小僧はいつたいどこまで運ばれて行くのやう！」

「わっ、駄目、ゾラ、考へないでっ！」

弾かれるように叫んだカリスは自分がとつとも、勝手だと思つた。

カリスとくつついて寝ることが最近多かつた。

思い出のなかにいるお母さんとは全然違つて、小さくて頼りなかつたけど温かだつた。

同じように温かで気持ちよかつたのだ。

お母さんではなく、仲間でもなく、ニンゲンなのに。  
信じられない、ニンゲンなのにだ。

弱くてまともに走れもしないカリスで、いても戦力にもならない

とはわかっているけれど、ガレが暗い鉄の格子の檻のなかで求めるものは、強い力でも武器でもなくなっていた。

弱くて温かいカリスだった。

カリスに会いたいと思った。

もう一度でいいから会いたいと思った。でも無理なのだとわかつていた。

それどころか、カリスは無事にいるのだろうかと考へると心が凍りそうになつてくる。

カリスは氣絶させられ運ばれた自分と違い、あの場所にそのまま置き去りにされたのだと聞かされたのだから。

「連れの、人間の餓鬼だろ？ どうしろっていうんだい。ちょっとばかり造作は良かつたが、そんなもん！だからって捕まえて売つたりしたら俺達は犯罪者になるだろうがよ」

俺達は歴としたハンターだ、と四人のハンターのなかで一番大きな男が胸を張つて答えていた。

真つ暗な檻の中で目を覚ましたガレが騒いで暴れて、檻は壊すことはできなかつたが、覆い被されていた分厚い布が捲られたのだ。氣を失う前に見た凶暴な男達の顔が揃つてあつた。武器を振り上げてもおらず、檻は大きめなので残つた狭い馬車の隙間に身体を窮屈そうに曲げて座つている様子は狂氣もなくてまるで別人の様に感じさせたが、間違いなく同じ顔で、同じ臭いだつた。

「カリスを置き去りにしてきたのか、山の中に！ あいつはお屋敷育ちで弱いのに……」

「元気だつたぞ、噛みつきやがつた！」

「おまえよりも骨があつた」

「戻つて、あいつもつ！」

「何を言つてんだ、あいつもおまえと檻に入れられてか？ できるわけないだろうが」

「走つていたからな。そのうち道に辿り着くさ、運が良ければ腹が

空く前に」

一番細身の男が鼻を鳴らして言い、それきり、ガレの叫びは無視された。

さんざん騒いでいるうち、遠くで鳥の鳴き声がしたのが聞こえた。夜は明けて朝が着たことをガレに教えていた。

「もうすぐ町だ。暴れるならまた殴つて氣絶させるぞ」

低く脅されるまでもなく、ガレにはもう暴れる氣力が残つていなかつた。

ガレを入れた檻を乗せる馬車は「コトコト」と走り続けていた。

覆い布を被されて、太陽が昇ろうともガレのところまでは差し込むことはなく真っ暗だった。

息苦しい風も入らない闇の中でガレは膝を抱えていた。もう眠ることもできずに、考へても何も手助けしてあげられないカリスのことを考え、鼻をすすり上げていた。

「『めんよ・・・樂園に一緒に行こうなんて言わなきやよかつた・・・』

・そうすれば、カリスは助かつたのにな・・・」  
山の中で、足にも肉刺ができるカリスは歩けなくなつて動けなくなるのだ。

一人つきりでお腹も空かして、雨だつて降り出すかもしれない。出会つたあの街に、置いてこれば良かつたのだ。

でもカリスは自分で、ついて行くと言いだして実際に一緒にいっぱい歩いてきた。

ガレが今まで、自分の正体を知つてゐる二ングエンとこれだけ一緒にいたことなどないのだ。

当然だつた。そもそも二ングエンと一緒にいたことなかつたのだから。

はじめてのカリス。

はじめて会つた、二ングエンのカリス。

体力もなくて、きれいで女の子みたいで、少し歩いただけで足の裏中肉刺を作つてしまふような奴だつた。

そのまま街に置いてこれば良かつたと思つたけれど、でも同じよ

うなことでも出会わなければ良かつたとは、全く自分は思つていなかつたことにガレは気が付いていた。

必要だと思つたから。

カリスはガレにとつて、出会わなければ決定的に足りない要素だと疑はないのだ。だから、自分たちは会わないといけなかつた、ガレにとつてはそんな大きな存在、たとえそれによつてカリスの人生が崩れる要因になつたとしても。

なぜつて、現に自分が連れ回したことにより山の中でカリスが孤独に運命を閉じようとしているのかもしれないのに。

「酷いな・・・俺・・・」めん、カリス・・・

小さな、ガレの懺悔の声だつた。

ガレにとつて今、世界は真つ暗だつた。檻の中で光も差さない暗がりにいた。

再び太陽の下に引きずり出されたとき、そにはビンなのだらうか。どんな目的に立たされるのだらうか。

ガレには想像がつかなかつた。そんなことなど考えたくはなかつた。

「・・・今度があつたら・・・今度はもつと注意して守るから、絶対・・・」

乾いていながらどこか夢見るよつに甘い響きを帶びたガレの声は、しかし檻の外にいるハンターの耳にも届くことはなかつた。

ガレは獣人だ。

おまえは二ングンだ。

違うんだよ、一緒にはならない。

腹が立つ言い方だつた。でも唇を尖らせただけで文句を言えない

のは、その声がとても穏やかだつたから。

穏やかで、少し嘲つてゐるように冷たくも聞こえて、悲しそうに

笑っている田をしているから。

淀みない言葉は、すぐにこう続いていったから。

「おまえは一engenで、お屋敷のぼっちゃんだ。ならおまえにはガレを救う力がある」

力なんてないよ、とすぐにカリスは首を横に振っていた。  
自分は、そんな良いものではありえないと思つたから。  
すると静かに訂正されたのだ。

「いや、おまえは俺達には持つことができる力を持つているよ。  
——いや、言い直す。持つことのできる可能性のあるところに生まれたということだな。今は持つてない。ひ弱な子供だ。家出をしてもまともに歩くこともできないんだからな」

優しい声音でも、言葉はとっても辛辣だった。

そして、カリスには内容は本当のことだったのを言い返すこともできなかつたのだ。

「でもガレを助けることができるだろ?。合法的に、この先の穏やかな人生を与えてやれる可能性だつて持つていいんだよ」

「・・・嘘だ・・・」

「嘘じやないさ。おまえはどんな家に生まれたか、考えてみろ。おまえの家名はなんだ、言つてみるといい

「そういうの嫌い。・・・そんなの、だつて僕のじやないもの  
家出中の息子は堪らず俯くような話だつた。  
けれどゾラの話はまだ終わらなかつた。

「ああ。今はまだな。ガザワイン家の当主は、ハーザード氏だ。そ  
のハーザード氏はおまえの父親だ」

「僕のことを嫌つてゐる!」

母親の死を自分のせいであり、家族みんなが母を好きだつたのだから自分を許すわけないのだという苦悩を抱えているカリスは、傷口を触れられそうになつて顔色を変えて否定していた。

その様子を見たゾラはその先にはもう立ち入らうとはしなかつた。  
ただし、代わりにこんなことを口に出した。

「俺はハーザードに頼まれて、その手に負えないドラ息子の様子を見たよ。息子に出す金は惜しまなかつた。他には適任が見つけられないのだと俺に頭を下げたぞ。そういう親ばかなら、息子が家に戻つて頭を下げるとき、どれほどの協力をしてくれるだろうね」

意味深げに、ゾラの言葉は途切れていった。

彼は結論までは言ってくれなかつたから、カリスは考へないといけなかつた。

考へて未、

「——協力？」

考へつかなかつた発想だつた。

「相互関係、助け合いさ」

教えられて、カリスは一瞬目眩がした。

けれど、ぐらつきが消えて再び目を開いたときには自分が今すべきことを悟つていただろう。

そうして、ここまでだつた。

過去の時間に戻つて繰り返す夢は今日はここで途切れていた。カリスが夢から目を覚ましたときにはもう朝日は高く地上を離れて、明るい光が世界を包んでいる。

大きなベッドのなかに沈んでいた小柄だけれどしなやかな少年の身体が氣だるそうに起きあがつた。

まだ目はまだ閉じられたままだ。

場所はガザワイン家のとりわけ豪奢ななかの一室だつた。

部屋の主である金色の髪の少年はベッドで上質のレースも恥じるような白い肌をした優しい少女のような顔立ちで、まるで広い部屋を華美になることなく上質に装つ厳選された上等な調度の一部、美しい陶磁の人形のようにも見えた。

「まだ眠いのに・・・」

ただしこの人形は口を開き、家出さえ企てたことがあるいわく付きだつた。

不満を唱えた声は、高く澄んでいても少女でも人形でもなく、彼が生きる少年であることをうかがわせる何かがあつた。

「おはようございます、カリスさま。遅くまで本を読んでいられるからですよ」

「一昨日は一晩中起きていたけど、昨日は普通に寝たよ・・・」

朝を告げに現れた屋敷で働く侍女に文句を言つたが、こんなことは毎日だつた。の方も明るく聞き流して、まだ眠りのなかに漂つていたいと目を開けないカリスの身体の上から掛布を剥いでしまつた。

こうしてしぶしぶと、カリスの遅い朝がはじまつていった。

いつもと同じような朝だつた。

晴れてはいるけれど、だからといってそれだけのこと。退屈で、明るすぎてしまいカリスが少し憂鬱になるような朝だつたけれど、カリスの予想と違つて決してつまらない日にはならなかつた。

それは午前中の勉強の時間をつつがなく終えて、お昼ご飯を食べて午後の予定がはじまるまでを自室のソファーの上で豪華な彩りのクッションを抱き、しどけなく過ごしていたときだつた。

「僕にお客？うん、会うよ」

相手が誰なのか要領の得ないのは、この使用人が屋敷に来たばかりで仕事に慣れていないから、だとカリスは思い、お客様とはたぶん本屋だらうと自分で予想をつけていた。

見つからないのは覚悟するから、探すだけでも良いから探してようと出入りの商人になんとか頼み込んでいた。父の古い友人だという老人は渋りながらも最後には骨董市に行つたときにでも探してみようと頷いてくれたのだ。その古い本の結果がやつてきたのだろう。たぶん、無理だつたんだろうな、と考えるカリスの応接間に向かう足取りは重かつた。

「お待たせしました」

カリスは社交的な笑顔を浮かべて部屋に入つていった。

奥の窓際に立つていた人影が驚いたように勢いよく振り返つてい

た。

一瞬、カリスの息が止まつた。

カリスを見つめていた。カリスは見つめた。

カリスはあんまり驚きすぎて、すべての言葉を忘れてしまつたのだ。

最初は、そのうち偶然に会つことがあるかもしれないと考えていた。再会を夢想して、何度も会話の練習を頭の中でやつていたのだ。幾通りのパターンを想定して、どんな言葉が聞かされても上手く答えられるようになら。

でもそれはカリスにとってとても昔のことになっていた。  
偶然なんてそんなに簡単にあるものじゃないと考えだし、もうこんな虚しいことは考えまいと思つよくなつてしまつていたから。  
そんなタイミングだつたのだから。

古い練習した言葉の一切がカリスに戻らなかつたのだ。

無言のまま立ちつくすカリスにガレは記憶のままの低い声は彼らしく不機嫌そうに

「・・・おい、なんだよ、それ・・・もう俺のことなんか忘れた、とか言うのか？」

自分の沈黙など余所に置いて、ガレに最初に出てきたのはこんな文句だつた。

どちらも喜びの声があがらなかつたことが腹立たしかつたのだ。そうして睨むようにしてガレは、部屋に入つても帽子を脱ごうとしない聞かれても名乗りもしなかつた獣人の少年・ガレは屋敷の一人息子たるカリスを見つめて顔を顰めて見せた。

それがカリスの呪縛を解くことになつた。

「半年、だよ！」

カリスの感極まつた高い声だ。

「忘れるわけないよ！半年だよ、半年も経つてゐるのにー・もうガレには会うことはないのかと思った。ガレは冷たい、会いにも来てくれないんだつて、もうこんなのが、信じられないよつー——」

カリスは一息に叫ぶとガレに駆け寄っていた。

「遅いよ、ガレ！」

「それは、さ。・・・だつてさ・・・」

訴えられたガレは少し戸惑つて何かを言おうとしたが結局言葉に上手くまとまらずに「ごめん」と小さく謝つた。

カリスは腕を伸ばして外套」とガレを抱きしめていた。

ガレだった。まさにこれはガレだ。外套の下で動いているその気配はガレの艶やかなしつぽだ。カリスの会いたかつたガレなのだ。

「遅いんだつて、もうつ・・・」

ぎゅうぎゅう抱きしめてその間、カリスの好きなようにさせていたガレがそつとカリスの力が弱まつた頃合いを見計らつて腕をカリスから引き抜いていた。

そして、今度はガレの番だつた。

「おまえ、少し、背、伸びたんだな・・・」

ぐつと力を込めて抱きしめた身体は、一緒に旅した時と比べて大きくなつていると感じた。

「信じられないよな・・・本当にニンゲンで、カリスの臭いだ・・・」

「それが自分の腕に収まつているのだ。

ガレの感激に震えた声に、カリスは涙ぐんでしまつた灰青色の目を優しく細めていた。

「信じてよ。僕は信じているよ、夢じやない、本当にガレだと、ね」  
そういうカリスだつたけれど、本当に信じても良いのか不安になるような大きな素晴らしい喜びだつただろう。

午後からの予定は古典を学ぶものだつたが、講師の先生ももう屋敷にお見えになつてゐるため、カリスは休まなかつた。

休みたかつたけれど、でもそのかわりにガレが、その間も側にいると言いだしてくれたためにカリスは承知したのだ。

つまり、ガレも一緒に講義に出てくれたのだ。カリスから少し離

れてぽつんと座っている少年。旅支度のままで部屋の中でも帽子をかぶりっぱなしだった。大人しく無言でカリスが講義を受けている様子をじっと眺めていたが、これには老講師の方がとても気になつたのだろう。落ち着かない様子で何度もガレを横目で見ていたが、最後には「今日は特別です」と授業を少し早めに切り上げてくれて、カリスはこの老人が急に好きになつたほどだ。

そのあと、カリスとガレはカリスの部屋でやつと二人で落ち着ける時間を持てることができた。

ガレも最初はカリスの部屋の中を珍しそうにキヨロキヨロしていつが、しばらくすると絨毯の上にどっかりと腰を下ろして、外套と帽子も脱いでいた。

待つっていた時間のはずだつたけれど、いざ田の前に広がると沈黙が生まれていた。

ガレは元々、無口で言葉が少ない。

ここはカリスの家なので、カリスは自分が気を利かせないといけないと考えた。

「・・・ガレ、僕の家、話していなかつたけれどよく・・・わかつたね・・・」

するとただの沈黙だつたのに、不機嫌さが加わつたような空氣に変わつてカリスは焦つてていたが、ガレは大人で、カリスが恐れた冷戦状況にはならなくてホツとしたのも一瞬だつた。

「わからなかつた

「・・・うん」

「ああ、なにもわからなかつたぞ、最初。俺はどうして檻から出られたのか。出るときは市場の競りかなんかだと思つていたけどどうじゃなかつたんだよな。俺が出たときは夜中で、そのあとすぐに水場に連れて行かれて洗われて、きれいな服まで着せ替えられた。そのあとどうなるのかと思つたら、どうもならなかつた。気取つた帽子を被つた男が俺の前にやつてきて、首に飾りを付けた」

ガレは自分に起こつた出来事を、丁寧にカリスに話して聞かせた。

暴れないで、危害を加えないから。と、丁寧な言葉でニンゲンはガレに言い、ガレは従つたからではなくただ気力が湧かなかつたのだと言う。食べ物は投げ込まれていたけれど、十日ほどを檻の中で過ごしたあとだつた。檻から出されたと言つてもこの時、壁に囲まれた部屋の中であり腰や手に武器を持つた男達が何人もガレを取り囲んでいた。

ガレが暴れたら鎮めるために厳つい男達ばかりだつたのだろう。そのなかで一番ひ弱そつたのは、帽子の男であり、けれど一番部屋で強い立場にあるのもこの男だつたのだ。

「怪我はしていないと言つていなかつたかね？これから先、彼を殴る場合はこちらの許可を得てからにしていただこう。かれはもうこちらの物だ」

ガレを目にして最初にまわりの男達に言つた言葉がこれだつたのだから。

ガレには初めての場所で、全員がはじめて目にする顔であり、二ングンだつた。

あの夜にガレを襲つた四人組のハンターはもういなかつた。

「ガレくんだね」

と改まつて聞かれて、ガレは頷いた。

否定する理由も思いつかなかつたから。

そのあとガレを持つていた展開は、奇天烈だつた。

ガレはそのときを思い出して頬を歪めていた。

「紙をもらつたんだよな。そうして、それは強い武器になるから大事に持つていて。何か困つたことになつたら取り出して見せれば上手くゆくこともあるだらうから。俺を助ける物だつて言つたんだ。そのあとはどうなつたと思つ？」

「・・・さあ、わからない・・・」

尋ねられて小さな声で答えたカリスは、笑顔が消えて困つたような顔になつているとガレは思つた。

「じゃあ、さよならつて言われたんだ。全然わけわからないよな。

その紙に書かれていた文字だつて、俺が読めるもんじやなかつたし。で、読める奴、仲間を探してやつと書かれている内容を知つて、この場所も知つた

不機嫌な調子でガレの言葉が終わつて、再び沈黙が訪れていた。

「なんか言えよ」

今度はガレが静寂を破つた。

ガレの前で、同じように絨毯に直に座つているカリスはとても縮こまつてゐる。表情も緊張を隠せないでいた。

「・・・ガレ、怒つてるの・・・？」

やつと紡がれた言葉は怯えていたようだつた。

「大事にしろつて言われたものがさ、所有書なんだもんな。俺はガザワイン家の正式な所有物だつて書いてあつてさ、なんだこれ、つてかんじ。俺は俺のものじやないか。それなのにいつの間にか、ガザワイン家のハーザードつて奴の所有財産で、その所有証明書を俺は大事に持たされていたんだよな。ハーザードて奴をこつそり覗いてやろうと思つたら、おまえがいた」

「・・・ガレ・・・『めん。他にどうしていいか、わからなかつたから・・・』

「あのあとおまえ、どうしたんだよ。・・・」うしているんだから、ちゃんと家に帰れたんだよな？」

心配そうな聲音になつたガレに、泣き出しそうな弱い笑顔をカリスは浮かべた。

「迷つていたら、ゾラが来てくれた。ゾラが僕を家に運んでくれた」

「ゾラ、ゾラ！！！」

叫ぶように言つたガレはこれ以上ないほどの仏頂面になつていて了。「化け猫のゾラ、つていう有名な奴だつた、俺達のなかでは！でも俺はそんな奴、知らなかつたつて言つたらさんざん笑われたぞつ。腹が立つ、そなうならそなうつて一言言えればいいのにさ！」

ゾラの悪口に言葉を荒立てて行くガレの前でカリスはますます背を丸めていた。

「ゾラが化け猫なら、おまえは猫かぶりだよな！」

「えっ？」

いきなり自分に話を振られたカリスは驚いた。

「そうじやん。分厚い皮被つてるとよな！」

唇をにっこり吊り上げると、ガレは断言していた。

でもその口調にカリスは笑顔になれたのだ。

明るい笑顔だった。

「ガレは野良猫だ！じゃあ、みんな猫だつたんだね！」

「猫、猫、猫。野良猫、化け猫、猫かぶり！」

言つてガレが笑いだしたのは、ガレの言いつぱりにカリスが吹き出したのと同時だった。

「でも俺は、もう飼い猫」

「怒ってるよね、やつぱり」

大きな緊張は解けたけれど、カリス自身がされて気持ちがよいことではないと感じているから苦笑が浮かんでいる。自嘲かもしけない。

「よくわからない。これから俺はどうなるんだ？」

しばらく前までは、考えられなかつた。

二ングンに囚われて家畜のように所有物にされるなどありえないと思つていたけれど現実は代わつてしまつた。でもその相手がカリスだと考えたとき、自分はどうあればいいのかわからないのだ。

「同じだよ。このまま同じ・・・でもガレの持ち物には紙と首の輪の荷物が増えてしまつたけど

それから、カリスは低い固い声になつて伝えた。

「獣人を所有する所有書は有効期間があつたの、三年。三年後にも父に頼んで更新してもらうつもりでいる。ガレは嫌かもしれないけど。ガザワインに一目置いてくれる者だったら、父の報復処置を恐れてガレにあまり迂闊に触れないと思うから」

「おまえ、ほんと、なんか旅の時とは別人みたいな感じだよな」

「それはきっと家の中にいるからだよ。」こは父の家で僕はその息子だから。旅の時は僕はただのカリスでいられたけど、それはもう終わり。家出もおしまい……家出はもうしないと約束したんだ」「それは俺が捕まつて、俺のことをおまえの親父に頼んだからか?ガレの想像は正しいと、カリスは頷いた。

「うん」

薄い笑顔で困ったようにでも、見た者が心を傷めるような悲しげな色は見あたらなかつたのだ。

「でね、だから……僕はガレと樂園に行くことは出来なくなつちやつた。ごめんね」

躊躇つたあとに、気になつていたことを尋ねていた。

「ガレはこれから予定通り樂園田指して行くんだよね?……するともう会えないのかな……でも行つたきりとかじやないよね、たぶん。ときどきは帰つてくる予定は……あるよね?」

「樂園つてさ。おまえ、本とかいっぽい読んでそうだよな。あると思つか?」

ガレはカリスの部屋の壁を占める大きな本棚を眺めながら言つた。分厚い本や、ガレには読めない文字が並んだものもざつしりと並んでいるのだ。

「え、それは……わからないよ……」

「素直に言えよ、思つてること」

「……あるとしても簡単には見つからないと思つ。簡単に見つけられるものならもうみんなに知れわたつているかもしけない」

「……うん。そつなんだよな、日々に唱えて目指すようなことをみんな言つていたけどさ、俺もきっと夢話でありはしないと思つ」  
他人事のように淡々としゃべるガレを励ます言葉をカリスは上手くは見つけられなかつた。

「なあ」

ガレが、再び書架からくるりとカリスに向き直つていつた。

「広いよな、おまえの部屋。明日まで隅っこにでも泊まつていいか

？」

「えつ」

カリスはガレから飛びだした想像もしていなかつた言葉に目を丸くしていた。

「だから、嫌なら別にいいけどさ。俺急いで行くところなくなつちやつたんだから。だから・・・」

だから時間あるし・・・。ガレの決死の言葉に、カリスが首を横に振るなどありえなかつた。

「おまえって、俺の飼い主なんだ」

「ち、違うよ。僕じゃないよ、僕の父だよ、僕には実際、そんなお金なかつたもん！」

ガレを買い取るほどの金額は実際、カリスには簡単に出せなるものじゃなかつたのだから。

それに飼い主などという言葉は悪人と同じ響きを感じるカリスは懸命に否定していたが、ガレは言つた。

「俺は、どうせなら、顔も知らない奴よりかおまえの方がいいけどな」

「・・・そのうち僕に代わる・・・」

ガレの割りきりの良さに反して、カリスは釈然としない表情で現実を認めて告げていた。

「よくわからないけどさ、俺、結構嬉しいかもと思つ」

「・・・なにが？」

「一緒に笑つていられること。だつたらさ、あとはいろいろ我慢できると思った」

ガレは怒つてもいなければ笑つてもいない、真面目な顔になつていた。

「きっと、全部は無理だよな。全部嬉しいことつてあり得ないよな。

・・・なら俺、これで満足かもしれない」

これが半年の間にガレが見つけたものだつた。

一人で山ほど考えて、自問自答ももう飽きてしまったのだ。

だからカリスを前にしても、ガレの予想以上にすんなりと言えた。カリスは目を見張つてガレの言葉を聞いていたけれど、そのあとくすぐつたそうになつてうつむいていた。

「そうだね。僕もそう思う。きっとこれで平氣かもしれない」家出をしたカリスにとつて、戻ることになつた家において心にある不満も問題も一切がそのまま解決されたわけではなかつた。けれど、カリスを好きだと黙つてくれるガレが一人でも確かに、贅沢を言うなら自分の側にいれば平氣、とカリスも思つたのだ。なら寂しくはない。

カリスはもう家出はしない。

父親の条件だつたから。ガレの所有書を更新してゆくことの。そのためには少なくない費用が必要となるけれど、その金額がガレの自尊心を傷つけていても、ガレの身の安全を守る働きにもなるのだから。

ガレもカリスも、よくわからなかつたけれど他には思いつかなかつたなら。

首輪をつけたガレは、カリスの家にときどき出入りすることになる。

カリスは友人として愛想のえしい黒い帽子の者をいつも歓迎し、新しい使用人などは眉根を潛めたけれど。

そこはカリスが逃げ出した家だつた。

しかしガレが探していた楽園でもあつたのだ。

旅のはじめに目指した場所とは違つたけれど、二人の楽園になつたのだから。

## ガレとカリスと、ソラの物語 7（後書き）

二人は楽園に辿り着きました——。

どこが、楽園かと言う人がいるかもしれない。  
けれど一人が辿り着いたところだって、ある意味、ささやかで現実  
的な楽園なのだと思います。

長めのお話に、最後までお付き合いくださりどうもありがとうございました！

評価頂けると、書き続ける励みになります！よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4384c/>

野良猫物語

2010年10月8日14時23分発行